伊吹町文化財調査報告書第14集

# 上平寺遺跡

－北近江京極氏城館に伴う城下町跡－

# 寺林遺跡

－奈良時代後半から平安時代前半の集落跡－

2001. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

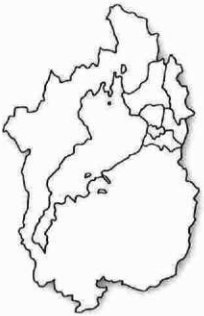
伊吹町文化財調査報告書第14集

# 上平寺遺跡（じょうへいじいせき）

－ 北近江京極氏城館に伴う城下町跡 －

# 寺林遺跡（てらばやしいせき）

－ 奈良時代後半から平安時代前半の集落跡 －



2001. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

上平寺遺跡調査区全景（北から）

上平寺遺跡出土白磁碗片

上平寺遺跡出土漆器椀

# 序

伊吹町は、伊吹山系を中心とした自然環境に恵まれ、縄文時代から連綿と続く、数多くの歴史的遺産や、先人達が営々と築きあげた優れた伝統文化などにつつまれた町です。

近江と美濃の国境に聳える伊吹山は、奈良・平安の昔から山岳信仰の霊場として栄え、山頂から放射状に延びる尾根上には、多くの社寺が建立されました。

戦国時代には、北近江を支配した京極氏が上平寺に居を定め、山麓の館や庭園、城下、山腹の山城を整備しました。西暦1500年前後から大永3年（1523）までの短い期間ではありますが、ここに北近江の政治の中心が置かれていたのです。いま現地を訪ねると、京極高清が日夜愛でたであろう巨大な庭園遺構や、御屋形を中心にした屋敷割りを見ることができます。尾根の末端部にも広大な家臣団の屋敷群が連なり、屋形の背後には土塁囲いの郭や尾根を断ち切った堀切などで防御された典型的な山城が遺っています。

本書は、町道寺林上平寺線改良工事に伴う発掘調査の結果をまとめたものです。調査では、永く水田の下に眠っていた城下の遺構がはじめて検出されました。町が保管する『上平寺城絵図』に描かれた城下町部分が実際に存在することを証明する貴重な調査となり、出土した建物跡や土器からは、戦国時代の人々の暮らしぶりを伺うことができます。守護所の調査として全国的にも貴重な資料になるものとおもわれます。

また、南に続く寺林遺跡では、町内ではじめて奈良時代後半から平安時代前半の集落跡を確認しました。伊吹山麓の交通史をはじめ、山麓の古代史を解明する上で、たいへん貴重な調査になりました。

上平寺の遺跡群と県史跡弥高寺跡を含めた「上平寺城跡遺跡群」は、町のシンボルとして、また、かけがえのない歴史遺産として認識されつつあります。今後、歴史学習の場としての活用はもちろん、地元上平寺区や町民の憩いの場・交流の場として、身近で親しみやすい遺跡に活用できたらと考えています。

3年間にわたった発掘調査が無事終了し、このような成果を得られたことは、地元上平寺・寺林区民の皆様のご理解と、地権者の皆様のご協力の賜物です。また、夏の暑い最中や冬の雪の中での調査にも厭わずに参加いただいた地元の皆様、調査および出土品の整理に際し、ご指導・ご協力を賜りました関係諸機関・各位に、あらためて厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

伊吹町教育委員会
教育長　松　嶌　膽　龍

# 例　　言

1. 本書は、滋賀県坂田郡伊吹町大字上平寺および大字藤川に所在する上平寺遺跡と、大字藤川に所在する寺林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、特定地方道路町道寺林上平寺線改良工事に伴うもので、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受け、伊吹町教育委員会が実施した。
3. 上平寺遺跡の発掘調査は、平成10年度から平成12年度にかけて実施した。寺林遺跡の発掘調査は、平成9年度から平成12年度にかけて実施した。ともに平成12年度に報告書の作成を行った。
4. 現地調査は伊吹町教育委員会生涯学習課主任・高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記の通りである。

調査主体　伊吹町教育委員会　教育長　石河竹二郎（平成9年度～12年度10月）
　　松嶌　騰龍（平成12年度10月～）

調査事務局　伊吹町教育委員会　生涯学習課

課　　長　堀内安夫（平成10・11年度）伊富貴孝司（平成12年度）

課長補佐　鈴木雄市（平成9年度）伊富貴鉄雄（平成10年度）尾木義比己（平成11年度）高橋兵太（平成12年度）

係　　長　山田英喜（平成10・11年度）大澤信悟（平成12年度）

主　　任　山田哲代（平成9・10年度）

主　　事　甲斐沼和弥（平成9年度）児玉　澄（平成9年度）石河輝男（平成11・12年度）

調査作業員

瀧上庄司　三宅美　清水　保　瀧上光子　瀧上美代子　三宅千代美　清水すえこ
的場育代　安田郁子　谷口朋子　丸木比佐乃　山本直人　田中真　堤　光弘
多賀　兼　吉原達男　石井治子　児玉玲子　岩崎敦子　宮川　大　田中智容衣
宮川光江

5. 遺物の整理・実測等に関しては、上記作業員のうち的場、安田、谷口、田中智、山本、宮川光でおこなった。
6. 遺物の写真撮影は、寿福　滋氏（寿福写房）に依頼した。
7. 本書は、高橋順之が執筆・編集した。
8. 上平寺遺跡の空中写真撮影は、株式会社イビソクに委託して行った。
9. 発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方々からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して厚く感謝の意を表す次第である。（敬称略・順不同）

磯部敏雄　稲葉降宣　内田保之　桂田峰男　木戸雅寿　桐山秀穂　古賀信幸　小島道裕
坂本正裕　清水ひかる　田中勝弘　土井一行　中井淳史　中井　均　中川正人　福永円澄
堀　真人　前川　要　南　孝雄　宮崎幹也　山崎清和　山田哲也

10. 調査記録および出土品は、伊吹町教育委員会で保管している。

# 凡　　例

1. 遺構挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。
   - 掘立柱建物……1／60
   - 竪穴住居……1／60
   - 井戸……1／40
   - 上坑……1／30、1／60
   - 土器集積遺構…1／30

2. 遺物挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。
   - 土器類……1／3
   - 土製品……1／2
   - 木製品……1／3
   - 金属製品……1／2
   - 石製品……1／3、1／4
   - 縮尺の異なるものは、それぞれ添付したスケールのとおりである。

3. 図中の方位はすべて磁北を示す。

4. 水糸高は標高を示し、土層図の右または左肩に記した。

5. 本文・表・図中に必要に応じて遺構番号を使用したが、これらは次のように遺構の種類を示す。
   - ＳＢ＝建物跡
   - ＳＨ＝竪穴住居跡
   - ＳＫ＝土坑
   - Ｐ＝ピット
   - ＳＤ＝溝跡
   - ＳＥ＝井戸跡
   - ＳＸ＝その他

6. 遺跡の番号は、本文・挿図・表・図版ともに統一している。

# 目　　次

序
例言・凡例

第１部　上平寺遺跡
第１章　遺跡の環境……12
第１節　自然環境……12
第２節　歴史的環境……14
第２章　発掘調査の経過……19
第１節　調査に至る経過……19
第２節　試掘調査の結果……20
第３章　発掘調査の結果……22
第１節　Ｔ２の調査……22
ｉ）層　　序……22
ii）遺　　構……22
1. 土坑……22　　2. その他の遺構……23
iii）遺　　物……24
1. 土器類……24　　2. 土製品……26
3. 金属製品……26　　4. 石製品……26
第２節　Ｔ３の調査……28
ｉ）層　　序……28
ii）遺　　構……28
1. 土坑……28　　2. その他の遺構……30
iii）遺　　物……30
1. 土器類……30　　2. 金属製品……32
第３節　Ｔ４の調査……34
ｉ）層　　序……34
ii）遺　　構……34
1. 掘立柱建物……34　　2. 溝……36
3. 井戸……37　　4. 土坑……38
5. その他の遺構……39
iii）遺　　物……40
1. 土器類……40　　2. 金属製品……45
3. 石製品……45
第４節　Ｔ５の調査……48
ｉ）層　　序……48

ii）遺　構……48
1. 掘立柱建物……48　2. 溝……48
3. 井戸……53　4. 土坑……55
5. その他の遺構……57
iii）遺　物……57
1. 土器類……57　2. 木製品……60
3. 金属製品……60　4. 石製品……63
5. 繊維製品……63
第5節　T6の調査……66
i）層　序……66
ii）遺　構……66
第6節　T7の調査……67
i）層　序……67
ii）遺　構……67
1. 掘立柱建物……67　2. 溝……67
3. 井戸……67　4. 土坑……68
5. その他の遺構……68
iii）遺　物……70
1. 土器類……70　2. 石製品……71
第7節　T8の調査……71
i）層　序……71
ii）遺　構……71
1. 溝……71　2. その他の遺構……72
iii）遺　物……72
1. 土器類……72
第4章　まとめ……75

## 第2部　寺林遺跡

第1章　遺跡の環境……80
第2章　発掘調査の経過……82
第1節　調査に至る経過……82
第2節　試掘調査の結果……82
第3章　発掘調査の結果……85
第1節　T1の調査……85
i）層　序……85
ii）遺　構……85
1. 溝……85　2. その他の遺構……85

iii）遺　　物……86
1. 土器類……86
第2節　T2の調査……86
i）層　　序……86
ii）遺　　構……86
1. 溝……86　　2. その他の遺構……87
iii）遺　　物……87
1. 土器類……87
第3節　T3の調査……88
i）層　　序……88
ii）遺　　構……88
1. 掘立柱建物……88　　2. 土坑……89
iii）遺　　物……89
1. 土器類……89　　2. 金属製品……90
第4節　T4の調査……91
第5節　T5からT10の調査……92
第6節　T11の調査……94
i）層　　序……94
ii）遺　　構……94
1. 溝……94
iii）遺　　物……94
1. 土器類……94
第7節　T12の調査……98
i）層　　序……98
ii）遺　　構……98
1. 掘立柱建物……98　　2. 竪穴住居……104
3. 土坑……105　　4. その他の遺構……107
iii）遺　　物……109
1. 土器類……109　　2. 石製品……111
第4章　まとめ……115

# 挿図目次

## 第1部


第1図　伊吹町周辺地形図……10
第2図　坂田郡の街道と宿場……13
第3図　上平寺城絵図トレース図……18
第4図　上平寺遺跡群と寺林遺跡……18
第5図　試掘トレンチ位置図……20
第6図　発掘調査区位置図……21
第7図　T2 遺構図……23
第8図　T2 出土遺物実測図……27
第9図　T3 遺構図……29
第10図　T3SK1・SK2 実測図……29
第11図　T3 出土遺物実測図……32
第12図　T4 遺構図……33
第13図　T4SB1 実測図……35
第14図　T4SB2 実測図……36
第15図　T4SB3 実測図……37
第16図　T4SB4 実測図……38
第17図　T4SB5 実測図……39
第18図　T4SE1 実測図……40
第19図　T4SB6 実測図……41/42
第20図　T4 出土遺物実測図(1)……46
第21図　T4 出土遺物実測図(2)……47
第22図　T5 遺構図……49/50
第23図　T5SB1 実測図……51
第24図　T5SD1・SD2 断面図……51
第25図　T5SB2 実測図……52
第26図　T5SD1 土器出土状況実測図……54
第27図　T5SE1～3 実測図……56
第28図　T5SK1・2・5・6 実測図……56
第29図　T5 出土遺物実測図(1)……61
第30図　T5 出土遺物実測図(2)……62
第31図　T5 出土遺物実測図(3)……63
第32図　T5 出土遺物実測図(4)……64
第33図　出土石臼実測図……65
第34図　T6 遺構図……66
第35図　T7 遺構図……68
第36図　T7SB1 実測図……69
第37図　T7SE1 実測図……70
第38図　T7 出土遺物実測図……71
第39図　T8 遺構図……73
第40図　T8 出土遺物実測図……73
第41図　土製品・釘・石製品実測図……74


## 第2部


第42図　試掘調査ピット配置図……83
第43図　発掘調査区位置図……84
第44図　T1 遺構図……86
第45図　T2 遺構図……87
第46図　T3 遺構図……88
第47図　T3SB1 実測図……89
第48図　T1～3 出土遺物実測図……91
第49図　T4 遺構図……92
第50図　T5～T9 遺構図……93
第51図　T11SD1・SD3 断面図……95
第52図　T11 遺構図……95
第53図　T11 出土遺物実測図(1)……97
第54図　T11 出土遺物実測図(2)……98
第55図　T12 遺構図……99/100
第56図　T12SB1 実測図……101/102
第57図　T12SB2 実測図……103
第58図　T12SB3 実測図……104
第59図　T12SB4 実測図……105
第60図　T12SH1 実測図……106
第61図　T12SH2 実測図……108
第62図　T12 土坑実測図……108
第63図　温石実測図……111
第64図　T12 出土遺物実測図(1)……112
第65図　T12 出土遺物実測図(2)……113
第66図　T12 出土遺物実測図(3)……114

# 表 目 次

**第1部**

第1表　上平寺遺跡出土土器組成表……75
第2表　上平寺遺跡出土土器組成グラフ……76
第3表　出土土師皿口径別個体数表(1)……76
第4表　出土土師皿口径別個体数表(2)……76
第5表　上平寺南舘遺跡出土土師皿
口径別個体数表……76

## 図版目次

**巻頭カラー図版**

図版1　上平寺遺跡調査区全景(北から)
図版2　上平寺遺跡出土白磁碗片
上平寺遺跡出土漆器椀

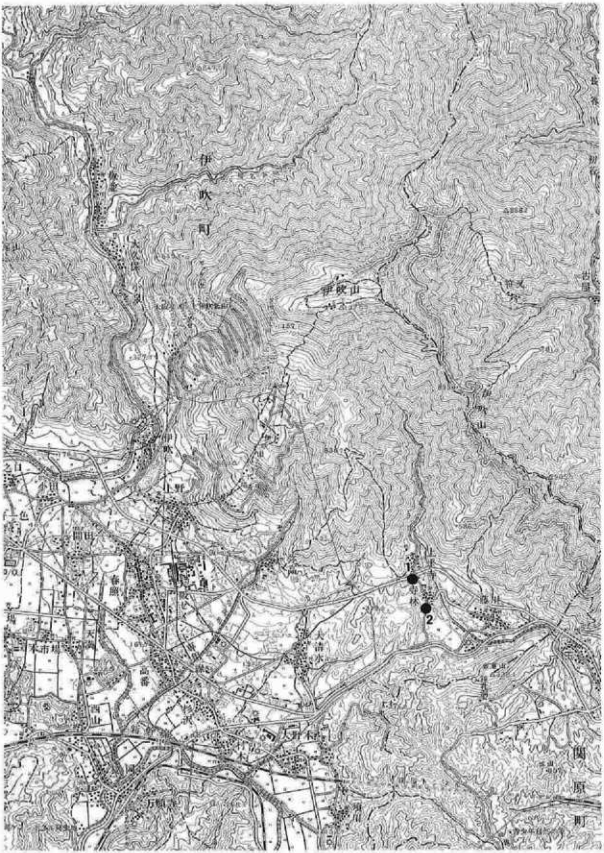
**第1部　上平寺遺跡**

図版1　上平寺城絵図
図版2　上平寺遺跡群遠望
調査前風景(北から)
図版3　調査区遠景(南から)
調査区遠景(北から)
図版4　T2 全景
T2 全景(東から)
図版5　作業風景
T2SK1
T2SK2
図版6　T3 全景
T3 全景(西から)
図版7　T3SK1
T3SK2
T3SK3
図版8　T4 全景
T4 全景(北から)
図版9　T4 調査区西側(南から)
T4SB1
T4SB2
図版10　T4SB6 柱穴
T4SD1
図版11　T4SK1
T4SE1
T4SK2
図版12　T5 全景
T5 調査区東側(北から)
図版13　T5 調査区西側
T5SB1
T5SB2
図版14　T5SD1 遺物出土状況
T5SD1(南から)
T5SD2(南から)
図版15　T5SD1 土器集積遺構(C)
T5SD1 土器集積遺構(D)
T5SD1 土器集積遺構(E・F)
図版16　T5SE1
T5SE2 検出状況
T5SE3
図版17　SE3 漆器椀出土状況
T5SK1
T5SK6
図版18　T7 全景
T7 作業風景
図版19　T7SB1

T7SE1
T7SE1 作業風景
図版 20 T7ST1
T7SK2
T7 焼土
図版 21 T8 全景(北から)
測量作業風景
現地説明会風景
図版 22 T2 出土遺物
T3 出土遺物
図版 23 T4 出土遺物(1)
T4 出土遺物(2)
図版 24 T5 出土遺物(1)
T5 出土遺物(2)
図版 25 T5SD1 一括遺物(1)
T5SD1 一括遺物(2)
図版 26 T7・T8 出土遺物
金属製品
図版 27 木製品
石臼

**第2部　寺林遺跡**

図版 28 調査前風景
作業風景
作業風景
図版 29 T1 全景
T1P1
T2 全景
図版 30 T2SX1
T3 全景
T3SB1
図版 31 T3SB2
T3SB1 柱穴
T3SB1 柱穴
図版 32 T3SK1
T4 全景
T5 全景
図版 33 T11SD1(南から)
T11 全景
作業風景
図版 34 T12 全景
T12 上段
T12 下段
図版 35 T12SB1
T12SB2
T12SH1
図版 36 T12SH2
SH2 遺物出土状況
SH2 遺物出土状況
図版 37 SH2 作業風景
T12SK3
発掘体験
図版 38 T1・T3 出土遺物
T11 出土遺物(1)
図版 39 T11 出土遺物(2)
T12 出土遺物(1)
図版 40 T12 出土遺物(2)
T12 出土遺物(3)




第１図　伊吹町周辺地形図（●印調査地点　１上平寺遺跡　２寺林遺跡）

# 第1部　上 平 寺 遺 跡

# 第１章　遺跡の環境

## 第１節　自然環境

### 遺跡周辺の地形

坂田郡伊吹町は滋賀県の北東端に位置し、東および北は伊吹山地をはさんで岐阜県になり、南から不破郡関ケ原町、揖斐郡春日村・坂内村に接している。西は七尾山系をはさんで滋賀県東浅井郡浅井町。南は伊吹山西南麓の扇状地から山東盆地となり、坂田郡山東町に接しており、その西には横山丘陵があり、長浜市さらに琵琶湖へと続く。町域は東西約 7.0km、南北約 22.7 km と細長く、面積 109.17 km²の約 85％を山林がしめる。北中部の集落は、伊吹山地とこれに対峙する七尾山系がつくる姉川渓谷沿いに点在し、南部および上平寺遺跡がある東部の集落は、伊吹山から流れ出る数本の河川が形成した扇状地の扇央部や扇端部に立地している。

伊吹山地は、滋賀県の最高峰伊吹山（標高 1377 m）を南端にして、北へ国見山（1126 m）、虎子山（1183 m）、射能山（1259 m）、貝月山（1234 m）と連なり、さらに県下第２位の金糞岳（1317 m）をはじめ標高 1000 ～ 1200 m の稜線や峰が、滋賀・福井・岐阜三県にまたがる三国岳（1209 m）へと続く地塁性の山地である。ここから越美山系となり、遠く越前・美濃国境の能郷白山へと続く。伊吹山地は、滋賀県側の姉川水系と岐阜県側の揖斐川水系の分水界であり、古くから近江と美濃の国境であった。

町内の河川は、姉川・天野川・藤古川（河戸川）の３水系に分けることができる。姉川水系は、新穂山（1067 m）に源をもつ姉川が、伊吹山地と七尾山系の間の渓谷で多くの支流を集めながら町内を約 20km 弱にわたって南北に貫流し、伊吹町伊吹付近で大きく西へふれ、山東町・浅井町の水田を潤しながら、横山丘陵北端の龍ヶ鼻付近で長浜平野に出て琵琶湖へ流れ込む。伊吹山西南麓の天野川水系は、扇状地を流れる弥高川・油里川・政所川が扇端部の湧水を集めて天野川に合流し琵琶湖にそそぐ。藤古川は、町内 6km の間を伊吹山南側中腹の標高 720 mから一気に流れ下って渓谷を作り、南東に流れを変えて関ケ原盆地に入り、牧田川、揖斐川を経て伊勢湾にそそぐ。県内の諸河川が琵琶湖に流れる中で、特異な例としてあげられる。

今回報告する上平寺遺跡は、伊吹山南麓に位置し、藤古川上流域の西側扇状地に位置する伊吹町上平寺とその南の寺林集落の間に所在している。上平寺は藤古川扇状地の扇頂部付近にあたり、伊吹山地に取り込まれたわずかに広がる高台に位置する集落である。中心部付近の標高は 315 m を測る。集落の西は伊吹山から延びる尾根が台地状に張り出している。東側は藤古川の急峻な断崖で、深さ約 30 m を測る。南は寺林の集落を経て、扇状地上に水田が広がり、関ケ原峡谷になる。東には藤古川をはさんで藤川集落がある。ここは北国脇往還の宿場町で、中山道関ケ原宿で分岐して伊吹山麓を通り、北国街道木之本宿につながる、東海と北陸を結ぶ重要なルートである。また、藤古川の渓谷をさかのぼり、伊吹山頂から南東に延びる稜線の鞍部の峠にとりつく上平寺越は、近江と美濃を結ぶ古くからの間道の一つと考えられる。さらに、東国と畿内を結ぶ東山道（中山道）にも近く、地理的に交通の要衝として重要な位置にある。

**遺跡周辺の地質と自然**

伊吹山地の地質は、古生層の石灰岩相と非石灰岩相の２つに分けられる。石灰岩相は伊吹山と南西部の丘陵に分布している。遺跡が立地する上平寺の北西は、伊吹山の南に張り付く弥高山（標高 838.9 m）の山麓で、この山塊は伊吹山の石灰岩層とは異なり砂岩層で形成されている。藤古川対岸は砂岩および粘板岩の山塊である。南は伊吹山南麓に広がる扇状地堆積物層が発達しており、古生層岩石の礫を主として、粘土をはさんでいることが多く、時代は洪積世新期のものと考えられている。藤川地区の県境付近には、約 130 万年前の古琵琶湖層群が堆積している。この層は主として砂礫層からなっており、少量の泥層を含み、この中にコメツガ・ハンノキ・ヒメバラモミなどの植物遺体が含まれている。関ケ原方面から古琵琶湖に水が流入して堆積したものと推定されている。

伊吹山付近は、若狭湾と伊勢湾が迫ってくる本州でもっとも狭い部分にあたり、まわりは中部山地と霊仙・鈴鹿山地、丹波山地に囲まれている。この狭い部分を目指して、冬は若狭湾から北西の季節風が、夏は伊勢湾から南東の風が入ってくる。伊吹町の気候は、ほとんどの地域が日本海側気候区北陸型に属すといわれ、気温が低く降水量が多いうえ、特に冬期の積雪が多いことが特徴とされている。町の南部地域は最高気温と最低気温の差が北中部にくらべるとやや少なく、平均気温もやや高くなって降水量も少なくなるが、上平寺周辺は、伊吹山系と霊仙・鈴鹿山系との接点に位置するとともに関ケ原の狭隘を吹き抜ける風の道にあたっているために、積雪量が多く豪雪地帯となっている。

〈参考文献〉
伊吹町史編さん委員会編
『伊吹町史自然編』
伊吹町　1992

**第２図　坂田郡の街道と宿場（○印　調査地）**

## 第２節　歴史的環境

ここでは、まず伊吹町内の遺跡の概要を紹介したい。

**旧石器時代**

町内でもっとも古い遺跡は、上野の人塚遺跡である。旧石器時代末期に属すと考えられる木の葉形尖頭器が採集されている。

**縄文時代**

続く縄文時代の遺跡が、全時代を通して最も多く 22 ヵ所を数える。縄文時代早期では、押型文土器が出土した姉川上流山間部の起し又遺跡（曲谷）や、異形部分磨製石器が採集された山麓の東野遺跡（弥高）などがある。前期の遺跡は確認されていない。

中期から後期初頭は、山麓や山間部でもっとも活発に縄文人が活動した時期で、起し又遺跡では、住居跡５棟と配石遺構や中期初頭（船元Ⅱ式）～後期初頭（中津式）の継続した土器群が確認されている。さらに、包含層からは後期初頭～晩期までの土器も出土している。その他、姉川沿いの段丘上には、西山遺跡（甲津原）、伊吹遺跡（小泉）があり、伊吹遺跡からは剣を模した装飾を持つ石剣が出土している。山麓部では、井の田遺跡（大清水）で東海系土器を中心とする中期後半の土器群が出土しているほか、大清水遺跡（大清水）で中期のものと思われる大型の石棒が見つかっている。同様の石棒は杉沢遺跡（杉沢）でも発見されている。後期初頭、起し又遺跡では、中津式系の土器を用いた埋設土器６基などが出土している。さらに姉川と足俣川が合流する付近の段丘面で内座遺跡（上板並）が営まれた。山麓では、井の田遺跡がある。

晩期の遺跡としては、著名な杉沢遺跡がある。現在までに９組の土器棺墓が確認されており、表採を中心に多様な石器類が出土している。また、山間の起し又遺跡や内座遺跡でも、わずかながらこの時期の土器が出土している。両遺跡の間にある大字古橡では、平成 10 年、工事中に扁平な小型石棒が出土しており晩期のものと考えられる。

**弥生時代**

弥生時代の状況はよくわかっていない。数カ所でわずかな遺物が採集されているのみである。隣接する山東町でも同様の傾向がみられ、横山丘陵を隔てた長浜平野で濃密な遺跡の分布状況が確認されているのとは対照的である。

**古墳時代**

大清水の井の田遺跡で昭和 12 年に１点の完形土器が発見された。器形から東海系Ｓ字口縁甕Ｃタイプに分類されるもので、伊吹町では唯一の古墳時代前期、いわゆる庄内期の土器である。Ｓ字口縁甕は、濃尾平野を中心とする伊勢湾岸地域から発生した土器で、濃尾平野の首長が、近隣の首長に配ったものといわれている。近江では坂田郡で集中的に出土しており、ここを経由して越前・加賀地方まで分布を広げるという。１点の土器の出土が伊吹山麓に３世紀末の拠点的集落が眠っている可能性を示した。古墳は、『平成７年度滋賀県遺跡地図』には、岩谷山古墳の他１基が登録されているにすぎず、いずれも詳細は不明であったが、平成 10 年度に県教育委員会により調査された人塚古墳、ミミ塚古墳が、伊吹町における初めての古墳の調査で、６世紀後半から７世紀前半代の横穴式石室を持つ円墳であることが確認された。

**奈良～平安時代**

第２部で述べる寺林遺跡以外は、高番遺跡などで須恵器や土師器が出土しているのみである。この時期伊吹山中腹では山岳仏教寺院が展開し、仁寿年間（851 ～ 854）に三修が開いた伊吹山護国寺は、のちに弥高寺、長尾寺、観音寺、太平寺のいわゆる伊吹四ヵ寺に発展する。

**中　世**

伊吹四ヵ寺は、正元年間（1266 頃）に観音寺が現在地の山東町朝日に移転したあと、弥高寺と太平寺が勢力を誇り、徳治３年（1308）には両寺が本末寺をめぐって論争を起こしている。一説に太平寺を京極家始祖の氏信が城塞化し、その後も京極氏の山城的機能を果たしていたといわれているが、古文書による裏付けは不充分といわざるをえない。しかし、時代は下るが、明応４年（1495）に京極政高が弥高寺から出兵し、翌年には京極高清が同寺に布陣するなど、京極氏が弥高寺を利用していることを考えると、太平寺も南北朝期に山岳寺院をそのまま利用して立て籠もる拠点として使用したのかもしれない。太平寺跡は、現在石灰石採掘などにより詳細は不明であるが、弥高寺跡には空堀や堀切、虎口状の大門跡、土塁など城郭機能と思われる遺構が明瞭に残っている。

中世北近江を支配した京極氏は、仁治２年（1241）に近江守護職佐々木信綱の四男氏信が愛知川以北六郡を与えられ、柏原（山東町）に館を構えたことに始まる。京極氏の居館は、京極高氏（道誉）が建武４年（1337）に甲良荘に館（勝楽寺城）を移した一時期をのぞいて、柏原館であったと考えられる。上平寺館は、明応元年（1492）改めて京極家の惣領職を認められた高清が、永正２年（1505）京極材宗と和睦して、文明年間以来続いた一族の内紛を納め、政権を確立したことで構築整備したものと考えられる。同時に詰めの城としての上平寺城、台地上の家臣団屋敷群とともに、今回調査をおこなった城下町を整備したものとおもわれる。しかし、上平寺館と城下の機能は、大永３年（1523）の浅見氏ら国人の攻撃で、高清が尾張に追われることで終わりを告げる。その後、一般には小谷城を拠点にした浅井氏三代に北近江の政権が替わったといわれているが、文書からの検証では、天文 20 年（1551）頃まで坂田郡南部を中心に京極高広による政権が機能しており、その居館が河内城（山東町又は、多賀町）であった可能性があるという。

**上平寺城跡遺跡群の概要**

今回報告する上平寺遺跡は、『平成７年度滋賀県遺跡地図』のなかで「上平寺遺跡」として登録されている。その内容は「寺院跡・城下町跡」であり、その範囲は現在の上平寺集落の全域から寺林集落を東西にはしる北国脇往還までとしている。これは、上平寺城下とこれに先行して存在したと考えられる寺院・上平寺を包括している。今回の調査地は、遺跡範囲の南半分にあたり、寺院跡に重複しないことが予想されることから、現地説明会などでは「上平寺城下町遺跡」として報告した。

上平寺遺跡には、隣接して上平寺館遺跡、上平寺南館遺跡（高殿地区）、さらに北西の標高約 669 m付近の尾根上には上平寺城遺跡があり、全体で京極氏の城館および城下を構成していることから、伊吹町教育委員会が平成７年度以降おこなっている詳細分布調査では、「上平寺城跡

遺跡群」として調査を進めている。『上平寺城絵図』(伊吹町役場所蔵。絵図の成立は近世の比較的早い時期、または遡っても17世紀末といわれている)には、これらの遺跡が、山城や館の現存遺構や道路・地割りの現況とかなり合致した状況で描かれている信憑性の高い資料である。

上平寺城(上平寺城遺跡)は、別称を刈安尾城、桐(霧)ヶ城といい、文書では「かりやす尾の御城」と記されることが多い。文献上の初見は大永3年(1523)の浅見氏らの国人一揆の『江北記』の記述である。舊の館や城下が廃絶したあとも、美濃国境警護の城として機能していたようで、元亀元年(1570)対織田信長戦に備えて、浅井長政が越前朝倉氏の援助で上平寺城や長比城(山東町)を改修している記述が『信長公記』にみえる。発掘調査は実施されていないが、平成2年以来継続した刈り払いと踏査により遺構の確認をおこない、平成12年度と13年度の2ヵ年で測量調査を実施する。主郭部分の標高が669m、城域は南北約306m、東西約54mの規模をもち、尾根上一直線に曲輪を配置している。外枡形空間をもつ虎口や長大な土塁囲いのテクニックなど、現存遺構は元亀元年の改修時の遺構と考えられる。

山麓の上平寺城下を構成していたとおもわれる遺跡には、今回報告する上平寺遺跡と先に述べた上平寺館遺跡、上平寺南館遺跡(高殿地区)がある。『上平寺城絵図』に描かれた、所謂上平寺城跡遺跡群は、「刈安尾・本丸」などと記された上平寺城部分の他に、①「ホリ」内側の「御屋形・隠岐屋敷・弾正屋敷」など京極氏の居館とその重臣屋敷部分、②「外ホリ」内側の「諸士屋敷・町屋敷」と記された家臣団などの居住区と考えられる部分、③「越前□道」(北国脇往還)沿いの「市店民屋」部分、④西側台地上の「若宮・加州・浅見・黒田・多賀・西野・上鵜衆・駒繋」などと記された重臣屋敷部分に大別できる。それぞれ、①は上平寺館遺跡、②・③は上平寺遺跡(城下遺跡)、④は上平寺南館遺跡に該当する。

京極氏の館があったと考えられる①は、東を藤古川の急峻な断崖、西南を谷と内堀と呼ばれる細い谷川で区画されている。古図に「御館」とある京極氏館跡は約60×40mの規模で、さらに北側に約55×15mの庭園跡をもつ。他に約32×25mで二方を土塁で囲まれた隠岐氏館跡など、中央の道の両側に展開する十数段の削平地で構成されている。当遺跡は大永3年に湖北の政治的拠点としての地位を無くしたとおもわれるが、元亀元年に京極高吉が隠棲している記事があり、この時期まで何らかの形で存続していたのであろう。平成7年度から9年度に伊吹町教育委員会において地形測量と遺物の表採をおこない、館の時期とほぼ重なる16世紀前半頃を中心とする土師皿などを採集した。京極氏館跡庭園は、二つの池と100点近くの大小の石を用いたもので、作庭時期のわかる武家屋敷庭園として貴重な遺構である。このような庭園を持つことで、京極氏が幕府の公権力を具現化していたことがうかがわれる。

②は現在の上平寺集落とほぼ重なり、③は主に水田として利用されている。この上平寺遺跡の南端を北国脇往還が通る。

④は城下の西側に張り出した尾根上の高台で、大小10以上の削平地が整然と並び、古図に記載されている6人の家臣屋敷にほぼ合致する。この西には古図に「要害谷」と記された深い谷がある。当遺跡では、平成10～11年度に伊吹町教育委員会で地形測量と踏査をおこなったほか、平成9年度には「駒繋」と「若宮」の間の「径」で、滋賀県教育委員会による発掘調査がおこなわれ、堀切・土塁を兼ねた石敷きの道が確認された。また、平成11年度の町教育委

員会による「駒繋」の確認調査では、京極氏段階に整地された層を確認した。さらに、平成12年度の推定「若宮」屋敷の調査では、屋敷内を区切る築地か門とおもわれる石垣遺構を検出した。

上平寺城下全体を見ると、北には上平寺城がある山地がそびえ、西はそれから続く尾根および台地と「要害谷」、東は深い谷をもつ藤古川が存在し、南を外堀で区画することで、自然地形を最大限に利用し、防御する形になっていることがわかる。

このように、上平寺城跡遺跡群は戦国時代の山城、居館、城下町がセットで残る全国的にも希有な例で、近年ようやく研究成果や調査の成果が公開されて遺跡自体が持つ情報が増加し、第1級の遺跡であると注目されている。

〈参考文献〉


伊吹町教育委員会『伊吹町内遺跡分布調査報告書』伊吹町文化財調査報告書第3集 1992

同 『起し又遺跡発掘調査報告書』 同第6集 1993

同 『起し又遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 同第11集 1998

同 『内座遺跡発掘調査報告書』 同第9集 1995

小林行雄他「近江坂田郡春照村杉澤遺跡」『考古学』9-5 1938

伊吹町教育委員会『杉沢遺跡発掘調査概報』 伊吹町文化財調査報告書第2集 1988

同 「杉沢遺跡」『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ』 同第4集 1992

同 『杉沢遺跡甕棺墓の調査・谷海道遺跡』 同第10集 1996

坂田郡社会教育研究会文化財部会「井の田遺跡出土のS字口縁甕」『坂田郡文化財ニュース 佐加太』第13号 2000

滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『人塚遺跡』 中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書1-1 2000

同 『寺林遺跡』 同1-3 2000

伊吹町教育委員会『弥高寺跡調査概要』 伊吹町文化財調査報告書第1集 ――

同 『長尾寺遺跡測量調査報告書』 同第5集 1992

同 『伊吹町内遺跡調査概報Ⅰ』 同第7集 1993

同 『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ』 同第8集 1994

同 『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡』 同第12集 1998

同 『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅱ 高殿地区(上平寺南館遺跡)』同第13集 2000

太田浩司 「戦国期京極氏の家臣団－文献史学からの考察－」『概要報告書Ⅱ』(上記)

滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『上平寺南館遺跡』 中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書1-2 2000

長谷川鎮蔵・博美「上平寺城跡」『近江の城』16 1985

用田政晴「弥高百坊の調査について」『近江の城』16 1985

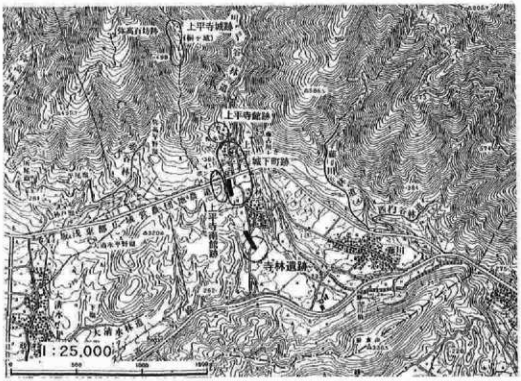
小島道裕「上平寺城下について－地名と絵図－」『城と城下』新人物往来社 1997

中井均・高橋順之「上平寺城とその城下－遺構と絵図からの再検討－」『近江地方史研究』29.30 1994

中井均「知られざる山城・上平寺城」『近江の城－城が語る湖国の戦国史－』サンライズ出版 1997

中井均「戦国期城館の庭園」『概要報告書Ⅰ』(前掲書)

第３図　上平寺城絵図トレース図（中井均氏原図）




第4図　上平寺遺跡群と寺林遺跡（ ▬ 調査区）

# 第２章　発掘調査の経過

## 第１節　調査に至る経過

今回の調査は、特定地方道路町道寺林上平寺線改良工事に伴うものである。この工事は、伊吹山麓をはしる国道 365 号線（三重県四日市市と石川県加賀市を結ぶ）と、これよりもさらに山側を縫うように通る町道藤川相撲庭線（伊吹町藤川の国道 365 交差点から浅井町野村の国道 365 交差点を結ぶ幹線町道。渋滞しやすい国道を避ける東海・北陸間の最短ルート）を結ぶ幹線町道のアクセス整備として計画された。旧道は上平寺集落と寺林集落を結ぶ生活道路であったが、寺林から国道に出るには、交差する手前で急勾配となり非常に危険であった。上平寺・寺林周辺は第１章第１節でも述べたとおり町内でもとりわけ積雪の多い地域で、冬場この危険度はさらに倍加することになる。また国道 365 号線は、関ケ原町で国道 21 号線（滋賀県米原町から岐阜県大垣市・岐阜市を経て瑞浪市に至る）と交差するが、両国道とも霊仙・鈴鹿山系と伊吹山地の隘路を通るために抜け道が無く、海水浴やスキーシーズンの土日、積雪時などには大渋滞を引き起こし、町道藤川相撲庭線と国道を結ぶ迂回路が求められてきた。そのため、町道寺林上平寺線全線を一定基準の勾配に改良したうえで国道と安全に結び、充分な幅員を確保することにより上記のことが解消されることから、今回の改良工事が計画された。ただし、上平寺城跡遺跡群は第１級の遺跡であり、さらに周辺では、本工事と前後して中山間地域総合整備事業（伊吹山南麓地区）に伴うほ場整備事業が計画されていた。当初の計画案に対して協議を重ね、ほ場整備部分についてはできる限り盛土対応にして遺跡に及ぼす影響を少なくしたが、町道部分については、全面的な発掘調査をおこなうこととなった。

現地は棚田状の水田が広がり、調査の対象となる区域の多くは、西側尾根に隣接して比較的水が得にくかったようで、数年前から休耕田になっていた。そこで、すでに計画が進められつつあったほ場整備事業を視野に入れて遺跡の確認を目的とした試掘調査を、平成７年 11 月７日から 12 月 15 日の期間に実施していた。その結果は次節で述べるとおりである。

発掘調査対象面積は、約 3,200㎡（平成 10 年度約 2,450㎡、平成 11 年度約 350㎡、平成 12 年度約 400㎡）である。調査区の番号は調査の順番に応じて数字で示すが、Ｔ２、Ｔ４、Ｔ５については、排土を反転して調査をおこなった。また、各遺構番号は、調査区ごとで完結することとした。

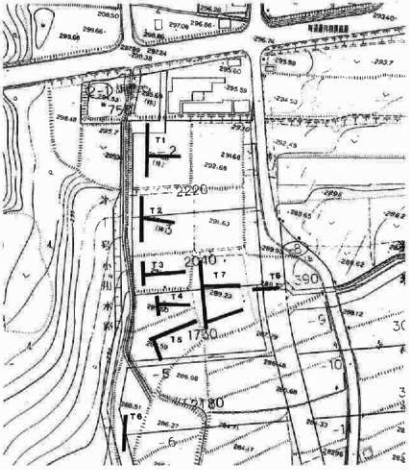
発掘調査は、重機により耕作土と床土以下に分けて遺構検出面直上まで除去したのち、作業員による遺構の検出と遺構内の掘削、遺物の検出をおこない、写真撮影と実測図の作成により記録した。調査は、平成 10 年度は平成 10 年５月 28 日から 12 月 22 日および平成 11 年３月 10 日から３月 30 日までおこなった。平成 11 年度は平成 11 年４月６日から７月 22 日までおこない、途中６月 12 日に現地説明会を開催した。平成 12 年度は補足的にＴ８を調査した。期間は平成 12 年７月３日から７月 28 日までである。

## 第２節　試掘調査の結果

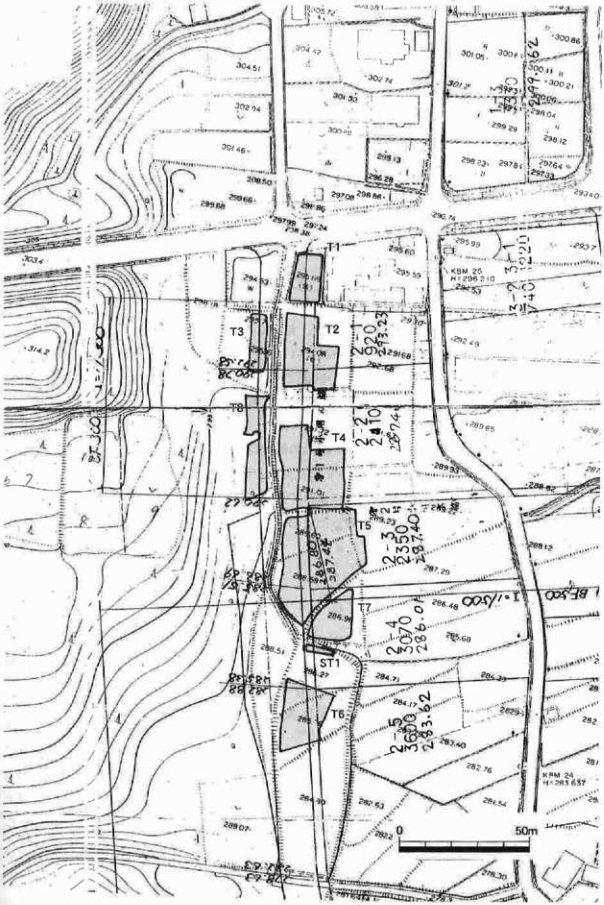
試掘調査は、原則として現状の田面に、幅約１ｍで東西・南北のＴ字型の試掘トレンチを８ヵ所設定した。掘削は0.4 m³級のバックホーで遺構面直上までおこない、人力で遺構の検出をおこなった。原則として遺構の掘削はおこなわず、写真撮影、平面図と土層柱状図を作成したあと、床土以下、耕作土の順に埋め戻し、重機による填圧を加えた。

調査の結果、約20～45cmの表土を除去すると、ほとんどのトレンチでは、黒色土・黄茶色粘質土の堆積がみられた。黄茶色粘質土層は東へ傾斜しており、断面の土の堆積状況の観察から、遺構は黒色土層を切り込んでおり、この層に遺構面が存在している可能性が考えられた。ただし、遺構の埋土と黒色土層の区別が困難なために、黄茶色土層まで掘削をおこない遺構の確認をした。

遺構を確認したのは、Ｔ１、Ｔ３～５、Ｔ７、Ｔ８で、主な遺構はピット、土坑、大型の円形土坑と石組（ともに井戸）、溝などである。出土遺物としては、須恵器、上師皿、陶器、瓦器、青磁などがあるが、いずれも少量細片である。15世紀後半から16世紀に属するものが中心であった。この地域は絵図の「上鵜衆」の南端および「市店民屋」にあたり、これらに関連する遺構が存在することが予想された。




第５図　試掘トレンチ位置図




第６図　発掘調査区位置図

# 第３章　発掘調査の結果

協議および試掘調査の結果をもとに、遺跡が存在すると考えられる範囲について発掘調査を実施した。トレンチの配置は第６図に示すとおりで、Ｔ１からＴ８を設定した。

Ｔ１～Ｔ７については、いずれも道路になるために全域にわたって調査をおこなった。また、Ｔ８については道路と尾根のあいだの狭い範囲で、深い盛り土となり将来的に調査が不可能になることが考えられることから、やむを得ず発掘調査をおこなった。

以下、その概要について記述をおこなうが、Ｔ１については遺構・遺物ともに検出しなかったために省いた。

## 第１節　Ｔ２の調査

ｉ）層　　序

Ｔ２は、調査区域の中で一番北に位置するＴ１の南側に設定した調査区である。調査は平成10年度に西側半分、翌年に東側をおこなった。絵図の記載では、「浅見・黒田」などの家臣団屋敷が並ぶ尾根筋の東側に張り出して描かれている「上腐衆」屋敷に隣接する区画で、「市店民屋」の北端にあたり、「外堀」に比較的近い区画である。調査前の水田面の高さは293.94ｍを測る。多くのピットと土坑を検出し、ピットの中には直線あるいはコの字状に並ぶものもあり、掘立柱建物の存在が予想された。土層の堆積は、耕土（約25～40cm）以下は基本的に、茶褐色砂礫土、黒色土、淡黄色土（地山）で、地形の傾きは、西側から東側にかけて低くなっている。西側では約50cmで遺構検出面に達するのに対し、東側では、100～160cmを測る。断面の観察から、遺構は黒色土上層から掘り込まれており、元の生活面は遺構検出面より高いことが判明したが、遺構の埋土が黒色土であったために、やむを得ず淡黄色土面まで掘削し、遺構の検出をおこなった。

ⅱ）遺　　構（第７図）

1．土坑

SK1

調査区の東側で検出した円形の土坑で、直径約160cm をはかる。深さは遺構検出面より約25cm で埋土は黒色土である。土師皿（13・14）のほか、焼けた壁土とおもわれる小さな塊が出土した。赤茶色を呈し、表面に藁の痕跡が残る。遺構の南東を中心に大小のピットが集中しているが、遺構の性格は不明である。

SK2

西側の斜面に近いところで検出した台形の土坑で、長辺300cm、幅約150cm、深さ約70cmを測る。埋土はほぼ茶褐色土で充填されており、底のあたりから土師器の甕を検出した。埋土および遺物から、他の中世の遺構とは時期の異なる可能性が高い。土師器は胴部片で、図化しえなかった。

SK3

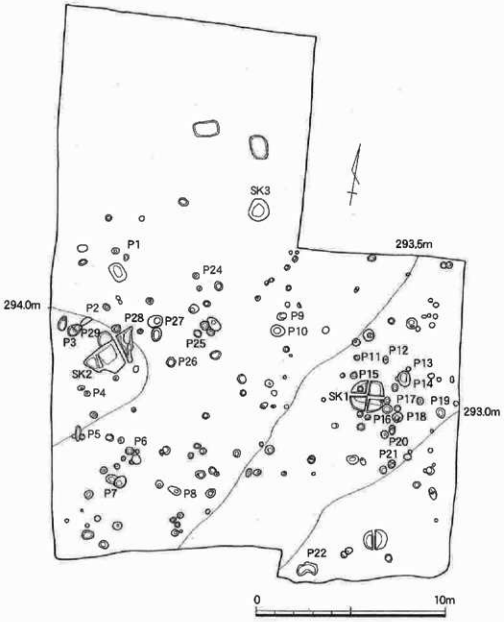
遺構密度の少ない北側中央寄りで検出した円形の土坑で、直径約 100cm、深さ約 60cm を測る。埋土は黒色土で、出土遺物は土師皿の細片および瓦質火鉢の胴部である。

2. その他の遺構

**ピット**

ピット群は北側を除く、ほぼ全面で検出した。なかでもＳＫ１の東側に多く集中している。ほとんどのピットの埋土は黒色粘質土である。

Ｐ１は長径 35cm、短径 30cm のやや楕円形のピットで、深さ約 37cm を測る。土師皿が出土した。Ｐ２はＰ３を切る形で検出した、長径約 65cm、幅約 30cm の細長いピットで、深さは約




第7図　T2 遺構図

47cm である。土師皿（1）が出土した。P 3は長径約 80cm、短径約 55cm の楕円形のピットで、内部が2段になり深さ約 51cm を測る。瀬戸美濃端反皿（2）・鉄釘（26）・炭が出土した。P 4は直径約 20cm、深さ約 27cm の円形のピットで、火鉢の胴部が出土した。P 5は長径約 80cm、幅約 25cm の細長い遺構を切る形で検出した直径約 30cm のピットで、深さ約 31cm を測る。土師皿小片・鉄釘（27）が出土した。P 6は直径約 40cm の円形のピットで、深さ約 47cm を測る。土師皿小片が出土した。P 9は中央付近で検出した直径約 40cm、深さ約 40cm の円形のピットで炭が出土している。SB 1の柱穴である。P 10はP 9に隣接するピットで、長径約 75cm、短径約 60cm の楕円形を呈する。深さは約 47cm を測る。出土品には土師皿がある。P 11はSK 1の北側で検出した直径約 25cm の円形のピットで深さ約 23cm を測る。土師皿小片が出土した。P 12はP 11の東側で検出した長径 35cm、短径 25cm、深さ約 24cm の楕円形を呈するピットで、土師皿（4）・炭が出土した。P 13はP 14に隣接する直径約 20cm、深さ約 15cm の円形のピットで青磁片が出土した。P 14は長径約 80cm、短径約 65cm の楕円形を呈し、深さ約 43cm を測る。土師皿（5）が出土した。P 15はSK 1の中で検出したピットで、直径約 30cm を測る。SK 1底部からの深さは約 58cm である。出土遺物には土師皿・擂鉢がある。P 16・17・19はSK 1の東側に並ぶピットで、いずれも直径約 30cm、深さ約 35cm を測る。P 16では土師皿が、P 17では天目茶碗小片が出土した。P 19は長径 60cm、短径 45cm の楕円形のピットで深さは約 40cm を測る。土師皿と擂鉢（6）が出土している。P 20・P 21もSK 1に隣接するもので、ともに直径 40cm の円形で、P 20で深さ約 46cm を測る。土師皿小片が出土した。P 22はトレンチの南端に位置する方形のピットで東西約 110cm、南北約 65cm、深さ約 28cm を測る。硯が出土している。P 24・P 25・P 26は直径約 40cm の円形で、深さ約 40 ～ 50cm を測る。土師皿（8 ～ 10）が出土した。P 27は2つのピットが切り合った遺構の北端で、直径約 70cm の円形をなす。土師皿（11）および擂鉢が出土した。P 28とP 29はSK 2の北にあるピットで、P 29はSK 2に切られた形で検出し、SK 2と同じ土師器片が出土した。P 28は直径約 40cm の円形で、深さ約 30cm を測る。土師皿（12）・土製鈴（25）・炭が出土した。

iii）遺　　物（第8図）

上平寺遺跡出土の土器・陶磁器には、古代から現代に至る時代のものが含まれている。このうちの大部分を占めるのは京極氏が城館を構えた中世のものである。本書における遺物の記述は、各調査区ごとに土器類・土製品・木製品・金属製品・石製品・繊維製品の順で取り上げる。さらに、土器類は材質上大きく土器・陶器・磁器に分けられるが、焼成方法や生産地などから、土師質土器・瓦質土器・国産陶器・輸入陶器に分けることができる。ここでは、中世を中心に主要な資料を提示し、必要に応じて遺構外の出土遺物や中世以外の時期の資料を取り上げた。

1. 土器類（第8図）

T 2からは、土師皿、瓦質土器、国産陶器のうち常滑甕・瀬戸端反皿・瀬戸美濃・擂鉢・天目茶碗・山茶碗など、輸入陶磁器は青磁の小片が2点出土している。

**SK1 出土品**

1・2はともに土師皿で、1は口径約 9.8cm を測る。体部はやや開き気味で、外面には指押さ

え痕が残る。口縁部内外面にタールが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は密、焼成も良好で、白茶色を呈する。14は口径約9.7cmを測り、わずかに外反して開く体部をもつ。胎土・焼成とも良好で、薄白灰色を呈する。

**P2 出土品**

3は土師皿である。口径は14.8cmで、口縁部は横ナデを施し外反させ、体部と口縁部の間に段が作り出される。胎土は密で、焼成も良好。白茶色を呈する。

**P3 出土品**

4は瀬戸美濃の端反皿で底部を欠いている。口径は11.7cmを測る。体部は底部から屈曲しながら外に開く、底部外面を除いて緑灰色の灰釉を施している。胎土は細かい。P 23出土の9と同一個体の可能性もある。

**P4 出土品**

5は瓦質の火鉢底部で、底径約24.2cmを測る。底部からまっすぐ外に開いて立ち上がり、底から約1.5cmのところに、幅約1cm、高さ約0.3cmの降帯がめぐる。全体に白茶色を呈し、底部はすすが付着している。胎土は1mm前後の砂粒を含み、焼成は堅い。

**P12 出土品**

6は土師皿である。口径は約16.3cmで、口縁部はまっすぐ外に開き、やや肥厚する。口縁端部をわずかにつまみ出す。口縁部と体部の間には横ナデによる段がある。また、体部外面には指押さえ痕が残る。胎土は密で、焼成は良好である。薄灰茶色を呈す。

**P14 出土品**

7も土師皿である。口径は約9.1cm を測る。口縁部は横ナデにより外反させ、端部をわずかにつまみだす。粘土塊を肘などで圧して成形したもので、内面は比較的平滑だが、体部外面は指押さえ痕が残り粗雑な仕上げになっている。胎土・焼成とも良好で、白茶色を呈する。

**P19 出土品**

8は瀬戸美濃の擂鉢の胴部で、擂り目原体は10本まで確認できる。内外面にロクロ調整の痕跡を残す。胎土に3mm大の小石を含む。赤色混じりの濃茶褐色を呈する。

**P23 出土品**

9は瀬戸美濃の端反皿である。口径約13cm、高台径約7.4cm、高さ約2.1cm を測る。体部は外反しながら開く。底部を除いて緑灰色の灰釉を施す。

**P24 出土品**

10は土師皿である。口径約16.8cmで、体部からまっすぐ外に開く。口縁部外面は横ナデを施し、端部内面はややくぼむ。胎土は密で、焼成は良好である。全体に白茶色で体部内面は暗灰色を呈する。

**P25 出土品**

11は土師皿である。口径は約12cmで、口縁端部をわずかにつまみだし、口縁部と体部の間には横ナデによる段がある。胎土は密で、焼成はややあまい。全体に白茶色で体部下半の内外面は暗灰色を呈する。

**P26 出土品**

12も土師器で、口径は約8.3cmである。体部はまっすぐ開き、口縁端部でわずかに外反する。

内面および口縁部は横ナデ調整が施されている。胎土・焼成とも良好で、白茶色を呈し、底部外面は黒灰色となる。

**P27 出土品**

13も土師皿で、口径約15.8cmを測る。体部はまっすぐに開き、口縁部でやや受け口状となる。胎土・焼成とも良好で、白茶色を呈する。

**P28 出土品**

14は土師皿で、口径約17.6cmを測る。底部を欠くものの浅い器形で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。体部外面の一部に横ナデ調整痕が見られる。口縁端部をわずかにつまみだす。胎土・焼成とも良好で白茶色を呈し、口縁端部にすすが付着している。

**包含層出土品**

遺構検出面直上の黒色土層から出土した。15～20は土師皿である。15は口径約7.8cmで体部がまっすぐ開く。外面に指押さえ痕が残る粗雑な作りで、色調は白茶色を呈する。16も口径約7cmの小型品である。17は口径約8.6cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がる。焼成は堅く全体に赤茶色を呈するもので、他の土師皿とは様相を異にしている。18は口径約10.4cm、摩耗が激しく調整等はわからない。色調は白茶色を呈し、体部内面は暗灰色である。19は口径約8.9cmを測り、口縁部内外面にタールが付着し、内面では体部まで至る。色調は白茶色である。20は口径約9cm、内外面とも口縁および体部にタールが付着している。色調は白茶色である。19・20ともに灯明皿として使用されたものであろう。 21・22は瀬戸美濃の天目茶碗である。21は口径約11.2cmを測る。体部は丸みを帯び、口縁部はわずかに内湾したあと、端部で大きく外折する。濃赤茶色の釉薬が施されている。胎土は密で、灰白色を呈する。22は口径約12.5cmを測る。体部は丸く口縁部まで内湾しながら立ち上がり、端部で外折する。黒褐色の鉄釉が施されている。胎土は密で、薄茶色を呈する。23・24は山茶碗で、ともに口径約16.2cmを測る。体部はやや内湾しながら開き、口縁端部との境で稜が入り、端部を丸く収める。23の内外面には緑灰色の自然釉がかかる。胎土は細かい。作りが精巧で、灰釉陶器から山茶碗に変わる時期のものと考えられる。京極氏の段階より古い時代の遺物である。

2. 土製品（第41図）

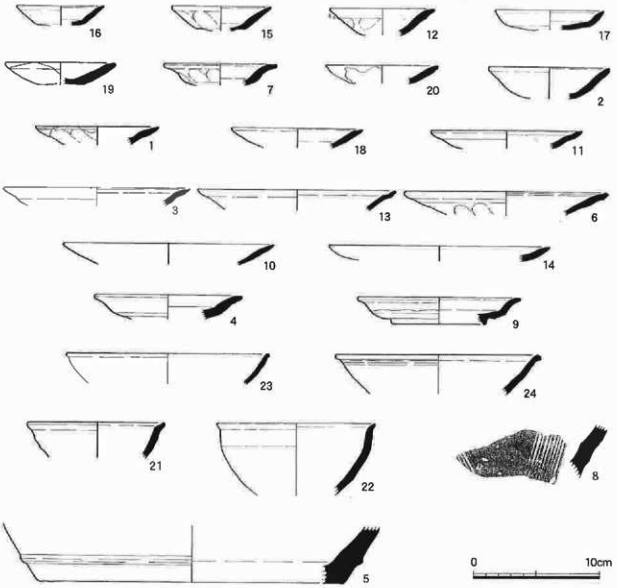
土製品としては、P 28から出土した25の土鈴がある。直径約2.3cmほどの土鈴で、上に紐を通して吊すための穴がある。長さ約2.2cm、幅約0.4cmの長方形の口が切ってあり、中に直径約0.6cmの土の小玉が入っていて、振るとコロコロと鳴る。

3. 金属製品（第41図）

金属製品には、26・27の鉄釘がある。P 3から出土した26は長さ約4.5cm、太い部分で幅約0.8cmを測る。錆とともに小石が付着しているが、断面は方形をなす。27はP 5から出土した。残存する長さ約3cm、現状の太さ約1.2cmで扁食が激しい。断面楕円形を呈する。

4. 石製品（第41図）

28はP 22から出土した硯で、形態は長方硯で側面も垂直になっている。残存するのは2辺のそれぞれ約5.5cmのみで三角形を呈する。厚さは約0.6cmを測る。表面内側の硯面は楕円形または隅丸方形になると考えられる。深さは約0.3cmである。裏面は平坦であるが作りは粗い。石材は粘板岩である。




第8図　T2 出土遺物実測図

## 第２節　Ｔ３の調査

ｉ）層　　序

Ｔ３は、Ｔ２の西側一段上に設定した調査区である。絵図では他の調査区が「市店民屋」部分に該当するのに対し、Ｔ２は「上鵜衆」にあたるものと考えられる。西側尾根上には「浅見」や「黒田」などの家臣団屋敷跡がある。現状は畑地で、調査前の標高は 295.27 ｍを測る。多数のピット・土坑を検出した。柱穴とおもわれるピットは他の調査区のものにくらべて比較的大きいものが多いが、調査面積が狭いために具体的な建物遺構の規模を想定するまでには至らなかった。土層の堆積は、耕土（約 25cm 前後）以下は基本的に茶色土、黒色土、淡黄色土（地山）で、遺構検出面は全体的に南へ傾斜している。北側では、約 50cm で遺構検出面に達するのに対し、南側では 120 ～ 160cm を測る。断面の観察から、遺構は黒色土の上層から掘り込まれており、元の生活面は遺構検出面より高いと考えられるが、遺構の埋土が黒色土であり判断が難しいために、地山面まで掘削した。また、Ｔ２へ落ちる東側では、地山面がさらに傾斜しているために、黄茶色砂礫土によって整地されているのを確認した。

ii）遺　　構（第９図）

1. 土坑

SK1（第 10 図）

調査区の北端で検出した隅丸長方形の土坑で、東西約 280cm、南北約 120cm を測る。深さは遺構検出面より約 33cm で、埋土は上層に茶色土（焼土・小礫混じり）、下層には土坑北側に寄った状態で薄茶色粘質土（小礫混じり）があり、土坑中央付近には最上層と茶色土層の中間に幅 5cm 程の焼土層があり、炭が混じっていた。また、中央付近を中心にして、10 ～ 20cm 大の角礫約 34 点が集積した状態で検出された。火を受けた状態のものもみられた。出土遺物は、土師皿（29 ～ 38）、天目茶碗（39）、青磁、白磁（40）がある。時期は 16 世紀代であるが、白磁片は、制作年代が 12 ～ 13 世紀に遡る資料で伝世品と考えられる。出土遺物の中で異彩を放つ。

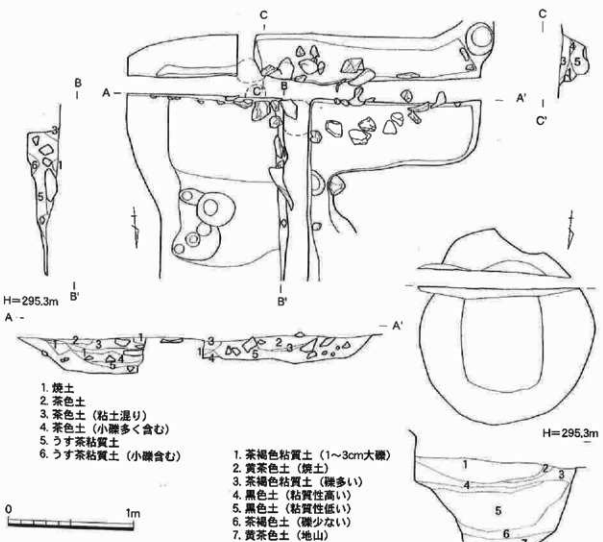
SK2（第 10 図）

調査区の東側端で検出した円形の土坑で、東西約 145cm、南北約 160cm、遺構面からの深さは約 72cm を測る。埋土上層は茶色系の粘質土で上部に炭や焼土が混じる。中層は粘質度の高い黒色土で約 35cm 堆積している。下層は茶褐色土である。出土遺物には土師皿（41）があり、黒色土層から出土した。

SK3

調査区中央やや南寄りで検出した浅い落ち込み状遺構で、東西約 300cm、南北約 170cm を測る。遺構検出面からの深さは北側で約 15cm、南側の落ち込みは消える。埋土は茶色土で、中央付近で焼土の堆積が見られた。また、南東端では、10cm 弱の焼け石が直径 100cm にわたって集積していた。出土遺物には、土師皿（42 ～ 48）、鉄釘（60）がある。焼土の堆積や焼けた礫の存在から、ＳＫ１と類似した性格の遺構と考えられるが、詳細は不明である。

第9図　T3 遺構図




第10図　T3SK1・SK2 実測図

2. その他の遺構

**SX1**

調査区東端の落ち込み状遺構で、北端から中央付近まで続く。北側では焼土や小礫を含む茶色土層で、中央付近では黄茶色の堅く締まった砂礫土層になる。出土遺物は、土師皿、瀬戸陶器、擂鉢、天目茶碗があり、すべて北側より出土した。

**ピット**

ピットは調査区全域で検出した。直径 65 ～ 100cm のものが 12 基前後あり、柱痕が確認できるものもある。

Ｐ１は、ＳＫ１の南にある直径約 90cm の円形土坑の中で検出したピットで、長径約 55cm、短径約 40cm の楕円形をしている。遺構検出面からの深さは約 42cm を測る。鉄釘（61）が出土した。Ｐ２はＰ１から約 250cm 南に位置する。直径約 75cm の円形を呈する。埋土は暗茶褐色土で、中央やや東寄りに直径約 15cm の柱痕を検出した。埋土は黒色土である。遺物は出土しなかった。Ｐ３はＰ４に切られた形で検出したピットで、直径約 70cm 以上の円形を呈する。遺構検出面からの深さは約 50cm を測る。埋土は暗茶褐色土で柱痕は検出されなかった。出土遺物に陶器片がある。Ｐ４は直径約 60cm の円形で、深さは約 32cm を測る。埋土は黒色土で、鉄釘（62）が出土した。Ｐ５はＳＫ３に切られた形で検出したピットで、直径約 50cm の半円形を呈する。深さ約 34cm で埋土は黒色土である。土師皿細片が出土した。Ｐ６はＳＫ３の南に隣接するピットで、直径約 20cm、深さ約 47cm の円形を呈する。埋土は黒色土で、土師皿細片が出土した。Ｐ７はＰ５に並ぶ円形のピットで、炭が出土した。Ｐ８･Ｐ９は南側にあるピットで、ともに直径約 30cm、深さは 23cm・33cm である。埋土は黒色土で、出土遺物には、Ｐ８の土師皿細片と炭、Ｐ９の土師皿細片と鉄釘（63）がある。Ｐ 10 は長径約 50cm、短径約 40cm の楕円形のピットで、埋土は黒色土である。完形の土師皿（55 ～ 57）が重なった状態で出土した。Ｐ 11 は一辺約 60cm 四方の隅丸方形のピットで、埋土は暗茶褐色土である。中央やや南寄りに直径約 25cm の柱痕を検出した。遺物は出土しなかった。

以上、主なピットの概要を記述したが、Ｐ２、Ｐ 11 のように柱痕を検出した遺構があり、Ｐ１～Ｐ３、Ｐ 11 を中心にする直径 65cm 以上の遺構は何らかの掘立柱建物に伴うものと考えられる。

iii）遺　　物（第 11 図）

1. 土器類（第 11 図）

Ｔ３からは、土師皿、瀬戸・擂鉢・天目茶碗等の国産陶器、輸入陶磁器は白磁片と青磁片が出土した。

**SK1 出土品**

29 ～ 38 は土師皿である。このうち 29・30 は、口径が 7.5・8.8cm と小さく、31・32 は 9.9・13.2cm で中型、33 ～ 38 は、14.9 ～ 19.2cm で大型という分類ができる。土師皿の分類については、考察においてあらためて検討する。29・30 は、体部がまっすぐ外に開き先端を細くする。胎土は密で、焼成も良好、白茶色を呈する。31 は、口縁部でやや外にひらいたあと端部をつまみ上げている。色調は薄茶灰色を呈する。32・33・34 は体部が外に開き端部に強い

横ナデを施す。胎土・焼成とも良好で白茶色を呈し、底部内面は黒灰色である。35 ～ 37 も体部が外に開き、口縁端部に横ナデを施す。いずれも胎土は密で、焼成は良好である。色調は白茶色で、体部が黒灰色のものが多い。36 は口縁端部をわずかにつまみだす。38 は口縁端部をわずかに外反させ、外面にゆるやかな段をもつ。

39 は天目茶碗である。口径約 11.6㎝ を測る。体部はわずかに丸みを帯び、口縁端部で大きく外折する。黒茶色の鉄釉が施されている。胎土は密で暗茶灰色を呈する。40 は白磁片で、中国定窯産の牡丹文輪花碗とおもわれる。内面には花の文様が印されている。制作年代は 12 ～ 13 世紀のものと考えられ、他の遺物が 15 世紀後半から 16 世紀前半であることから、当時においても貴重な品であり、永く伝えられた伝世品であったとおもわれる。T 3 が絵図の「上臈衆」屋敷であることから、他の調査区と階層が異なる住人であった可能性がある。

**SK2 出土品**

41 は土師皿である。口径は約 13.1㎝ を測る。体部はまっすぐ開き、口縁部でわずかに外反して端部を丸く収める。口縁部にタールが付着しており、灯明皿として使用されたものであろう。胎土は密で、焼成は良好、白茶色を呈する。

**SK3 出土品**

42 ～ 48 は土師皿である。42 ～ 46 は、口径が 9.6・9.8・11.7・11.7・13.6㎝ で中型品。47・48 は 14.9・16.1㎝ で大型の土師皿である。42 はやや内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部が肥厚している。43 は内湾気味の体部から先端を細く納め、口縁端部をわずかにつまみだす。端部にススが付着する。44 は平らな底部から体部が鋭角に立ち上がる。体部外面に指押さえ痕が残る。口縁部外面にタールが付着する。46 は体部がまっすぐ外に開き、口縁端部に横ナデを施す。42 ～ 47 まで、いずれも胎土は密で、焼成は良好、色調は白茶色を呈する。48 は体部がゆるやかに内湾しながら開き、口縁端部で外につまみ出している。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰茶色を呈する。

**SX1 出土品**

49 ～ 54 は土師皿である。いずれも胎土は密で、焼成は良好である。色調もほとんどが白茶色を呈する。49 は口径約 8㎝ と小型で、外反した体部から口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部をわずかにつまみだす。50・51 は口径 9.5・10㎝ で、50 はまっすぐ開く体部で、口縁端部を横ナデにより細く仕上げる。51 はやや内湾気味に立ち上がる体部をもち口縁端部でわずかに外につまみ出している。色調は薄灰茶色を呈する。52・53 は口径約 16.5㎝ と大型で、ともに口縁端部を外につまみ出す。

54 は山茶碗で、底部のみの破片である。径約 9.8㎝ の高い高台がつく。底部は大きく外に開き、底部内面に灰釉がかかる。胎土は密で、色調は薄灰茶色を呈する。23・24 同様に、山茶碗の初期のものであろう。

**P10 出土品**

55 ～ 57 は土師皿である。55・56 は完形で出土しており、口径は 6.6・7.1㎝ を測る。内面は比較的平滑に仕上げられているが、口縁部の高さは不揃いで、外面に指押さえ痕が残る粗雑な作りである。55 の内面底部には丸く押さえた指痕が残る。57 は口径 14.2㎝ を測る。平らな底部から体部がまっすぐ外に開き、体部と口縁部の間には明瞭な段を作り出している。いずれ

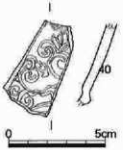
も胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

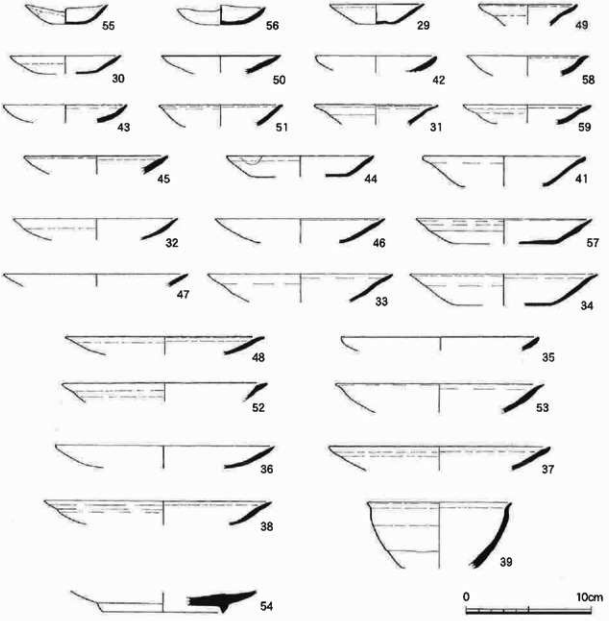
**包含層出土品**

58・59は土師皿である。口径は9.8・10.3cmを測る。58は口縁端部を外につまみ出す。59は端部にタールが付着している。ともに胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

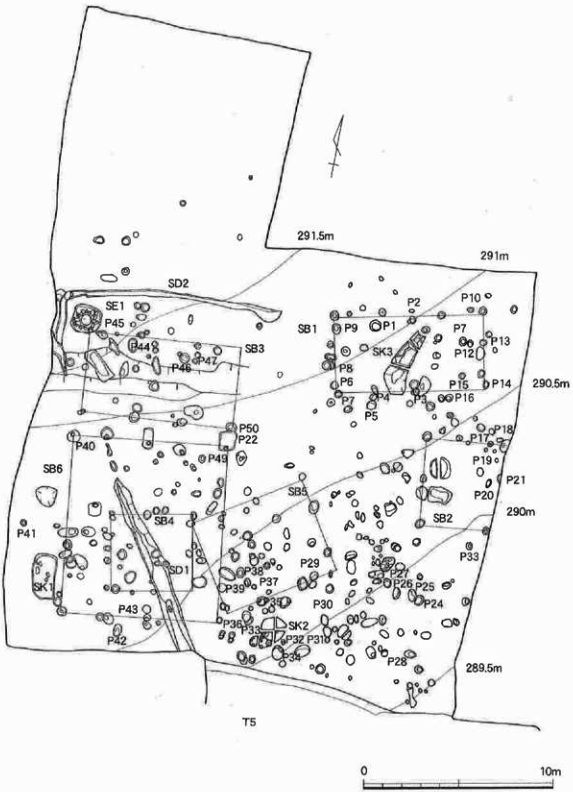
2. 金属製品（第41図）

60～63は鉄釘である。60はＳＫ３から出土した。長さ約7.7cm、ほぼ全体が残っており頭の部分で幅約1.4cm、中央部で約0.7cmを測る。61はＰ１から出土した。長さ約4.8cm、太い部分で約0.7cmを測る。62はＰ４から出土した。長さ約5.3cm、太いところの幅約0.7cmを測る。63はＰ９出土で、長さ約6.3cm、幅約0.5cmを測る。いずれも柱穴と想定される遺構から出土しており、建物との関わりが考えられる。




第11図　T3出土遺物実測図


291.5m
291m
290.5m
290m
289.5m
SD2
SE1
P45
P44
P47
P46
SB3
SB1
P9
P1
P2
P10
P7
P13
P12
SK3
P8
P6
P15
P14
P16
P7
P4
P3
P5
P18
P17
P19
P21
P20
SB2
P33
P27
P26
P25
P24
P28
P50
P22
P40
P49
SB6
SB5
SB4
P41
SK1
SD1
P29
P38
P37
P39
P30
P43
P42
P36
P35
SK2
P32
P31
P34
T5
0
10m

第12図　T4遺構図

## 第３節　Ｔ４の調査

ｉ）概　　序

Ｔ４は、Ｔ２の南に設定した調査区で、調査前の２面の水田面の標高は 291.61・291.04 m を測り、Ｔ２との比高差は約 230cm ある。調査は平成 10 年度に西側半分、翌年に東側をおこなった。絵図の記載では「市店民屋」部分にあたると考えられる。調査区の北半分はわずかにピットを検出しただけだったので、調査を東側に広げなかった。ＳＤ２から南では、多くのピットや土坑、井戸、溝などを検出し、調査区の西側と東側で掘立柱建物を検出した。調査区は北から南および西から東へ傾斜しており。北側では約 40cm で遺構検出面に達するのに対し、南側では 200cm 近く掘削した。上層の堆積は調査区の北端では耕土（約 40cm）直下で地山となり、掘削を受けているようで遺構は見られない。調査区の中間では、耕土（約 20 ～ 25cm）、黄茶色粘質土（礫混じり）、黒色土、淡黄色土（地山）で、黄茶色粘質土は造成時に搬入されたものであろう。調査区南側は耕土、暗茶褐色砂質土、黄茶色土、黒色土、淡黄色土になる。各調査区同様、地山面まで掘削して遺構の検出をおこなった。

ii）遺　　構（第 12 図）

1. 掘立柱建物

SB1（第 13 図）

調査区の北東端で検出した２間（4 m）×３間（8 m）の掘立柱建物で、建物の主軸はＷ 10°Ｓの方位をとる。柱穴の平面形は円形のものが多く、規模は直径約 35 ～ 45cm で、深さは遺構検出面より約 11 ～ 56cm である。埋土は黒色土である。柱穴のうちＰ２から土師皿(64)、瀬戸陶器(65)が、Ｐ３から鉄製品（142）が、Ｐ 13 からは土師皿が出土した。ＳＢ１周辺には、多くのピットが集中しており、時期や規模や軸線を変えて他の掘立柱建物の存在が想定される。

SB2（第 14 図）

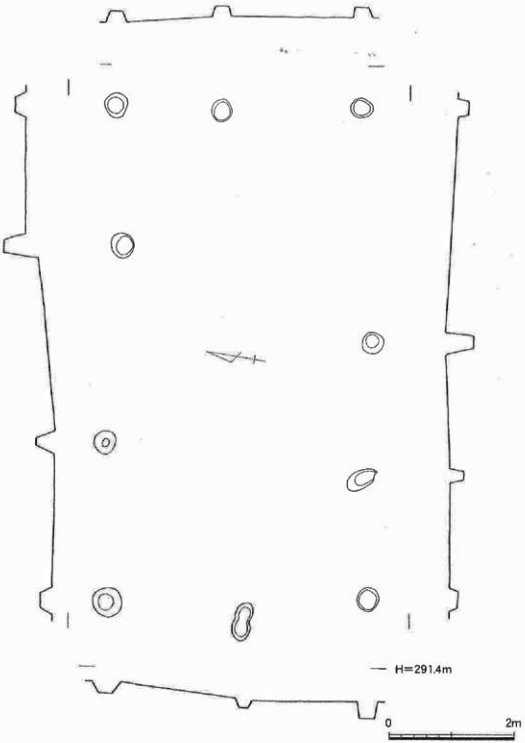
ＳＢ１の南側で検出した２間（4.5 m）×２間以上の掘立柱建物で、建物の主軸はＷ 6°Ｎの方位をとる。柱穴の平面形は円形または楕円形で直径約 20 ～ 70cm、深さは遺構検出面より約 15 ～ 53cm を測る。埋土は黒色土である。柱穴のうちＰ 18 から土師皿 (66 ～ 68)、擂鉢 (69) が出土した。

SB3（第 15 図）

調査区の西側中央付近で検出した２間（4.4 m）×３間（8 m）とおもわれる掘立柱建物である。建物の主軸はＷ 7°Ｓの方位をとる。この建物の北と西側には軸線を揃えるようにして溝ＳＤ２がある。また、建物の北西隅は井戸ＳＥ１によって切られている。柱穴の平面形は円形のものが多く、直径約 35 ～ 50cm を測り、長径が 100cm を越える楕円形のものがある。遺構検出面からの深さは約 5 ～ 58cm を測る。埋土は黒色土である。柱穴のうちＰ 50 から土師皿が出土した。

SB4（第 16 図）

調査区西側の南端で検出した２間（4 m）×３間（6 m）の掘立柱建物で、建物の主軸はＷ

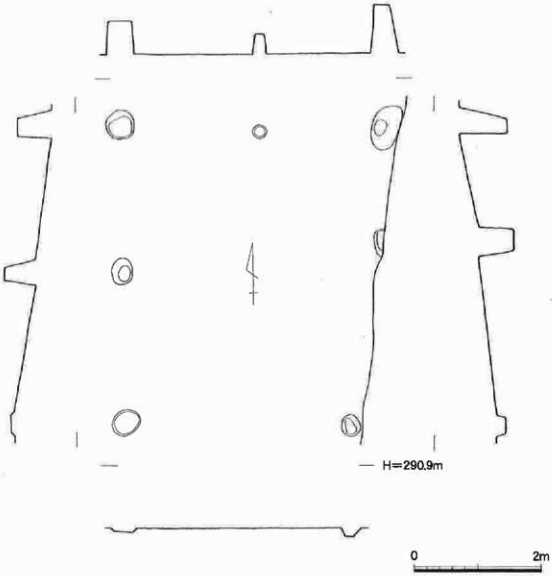



第13図　T4SB1実測図

8°Ｓの方位をとる。柱穴は平面円形で、直径 20 ～ 40cm、深さは遺構検出面より約 10 ～ 35 cm を測る。埋土は黒色土である。

**SB5**（第 17 図）

ＳＢ４の東側に隣接して検出した２間(4.5 m)×３間(6.6 m)と想定できる掘立柱建物である。建物の主軸はW 28°Ｓの方位をとる。柱穴は円形または楕円形で、直径約 20 ～ 50cm、深さは遺構検出面より約５～ 50cm を測る。埋土は黒色土である。ＳＢ４・ＳＢ５周辺は多くのピットが集中しており、実際は組み合うものを認定するのは困難で、あくまでも推定の設定である。




**第14図　T4SB2実測図**

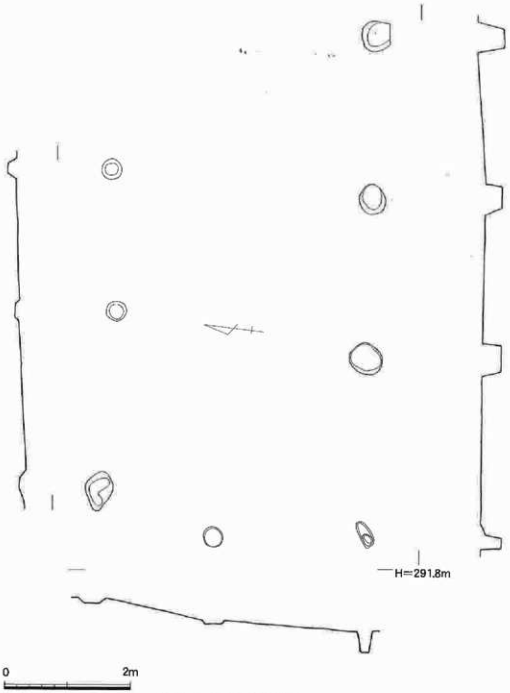
SB6（第19図）

調査区の西側には比較的大きな堀方をもつ柱穴が集中している。ＳＢ６はそれらを同じ掘立柱建物の柱穴と推定して組み合わせたものである。建物の規模は４間以上（8ｍ以上）×２間以上（8ｍ以上）で、大型の建物である。建物の主軸はＷ10°Ｓの方位をとる。東西軸の柱穴は東から順に、堀方は直径約65cmの円形で北西側に直径約20cmの柱痕をもつ、直径約65cmの円形で南端に25cm前後の柱痕をもつ、南北約110cm東西約50cmの長方形の堀方をもち南寄りに直径約20cmの柱痕をもつ、70cm×50cmの楕円形で南寄りに直径約25cmの柱痕をもつ、南北約100cm東西約80cmの長方形で南端に直径約25cmの柱痕をもつものである。南側の１基は東西約100ｍ南北約50cmの楕円形で柱痕は確認できなかった。深さは遺構検出面より32～51cmを測る。埋土は黒色土で柱痕は黒褐色を呈する。出土遺物には土師皿（70・103）がある。

2．溝

SD1

調査区の西側を北西から南東に走る溝で、中心軸の方位は、Ｎ35°Ｗをとる。北西にあるＴ




第15図　T4SB3実測図

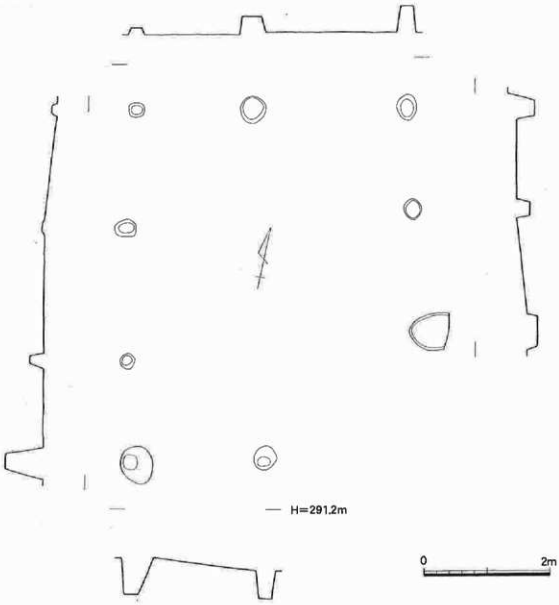
８ＳＤ２から続き、Ｔ４では井戸ＳＥ１付近から始まり、Ｔ４・Ｔ５を縦断する。Ｔ５の下段では向きをやや南に変える。総延長は約51ｍを測る。Ｔ４では長さ16.5ｍ、幅約20～100㎝、深さ約６～40㎝を測る。溝の埋土は茶褐色土で、土師皿（74～77）、擂鉢が出土した。

**SD2**

調査区の西側で検出した区画溝である。ＳＢ３と井戸ＳＥ１を囲むように、くの字状に南と東に延びる。幅約30～40㎝、遺構検出面からの深さは約３～7㎝で、東側で消滅する。

3. 井戸

井戸は、調査区全体で５基を検出した。いずれも石組井戸である。なお、井戸の規模を記述する際は、内法を基本とした。




**第16図　T4SB4実測図**

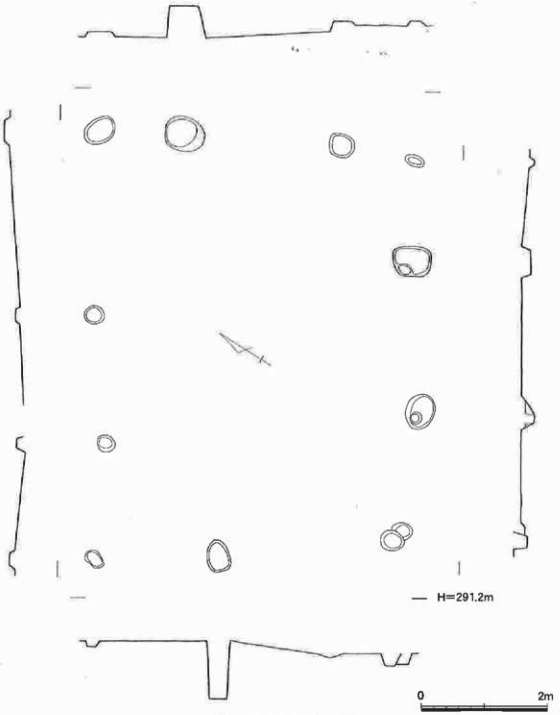
SE1（第18図）

調査区西側の中央、ＳＤ２のコーナー部で検出した石組円形井戸である。井戸本体は径70～75cm、深さ約90cmで底部に井桁などの施設は見られなかった。石は10～35cmの河原石が多く、現状は6～8段積まれている。断面の形状は上部がわずかに広がる円筒形である。井戸内の堆積は、黒色土（10～15cm）、茶褐色土（10cm）、20～50cm大の河原石投棄層（60cm）、茶褐色砂質土(15cm)である。河原石は投げ入れられた状態で5基の井戸すべてに見られた。石には被熱しているものもある。井戸内より土師器(78)、陶器(79)、石臼(144)、炭、竹が出土した。

4. 土坑

SK1

調査区の南西端で検出した隅丸長方形の土坑で、南北約235cm、東西約125cm、深さは遺構検出面より約5～25cmを測る。埋土は黒色土で、中央やや北寄りに20～35cmの礫が6点あり、焼土等は見られなかった。土師皿（71）、耳皿（72）が出土した。




第17図　T4SB5実測図

SK2

調査区中央南端で検出した円形の土坑で、直径約 140cm、遺構面からの深さ約 5cm を測る。埋土は茶褐色土である。周囲に直径 50cm 前後のピットがめぐるが、遺構の性格は不明である。出土遺物は土師皿（73）、擂鉢がある。

SK3

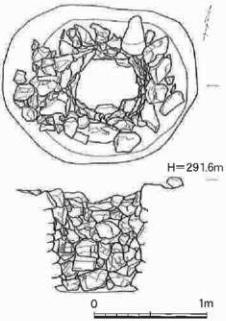
調査区の北東端で検出した不成形の土坑で、南北約 350cm、幅 115cm、遺構検出面からの深さ約 25cm を測る。遺物は出土しなかった。

5. その他の遺構

**ピット**

ピットは北側を除くほぼ全面で検出したが、中央付近はやや疎である。多くのピットの埋土は黒色土で、一部茶褐色土のものがある。

P 1～P 15は、SB 1周辺のピットで、直径30～55cm、深さ10～55cmを測る。P 4以外は円形を呈する。出土遺物は、P 1で天目茶碗（80）。P 4で土師皿（81～83）。P 5で土師皿、天目茶碗、古銭（141）。P 7で土師皿（84）。P 8で土師皿（85～87）。P 9で土師皿。P 10で擂鉢（88）。P 12で土師皿（89・90）P 14で土師皿。P 15で土師皿（91）がある。P 17～P 21・P 23はSB 2周辺のピットで、直径20～40cm深さ50～70cmを測る。P 20以外は円形を呈する。いずれも土師皿（92）が出土している。P 24～P 28は、調査区の南東端に集中するピットで、P 24～P 27は隣り合う位置にある。P 24・P 27・P 28は直径約40cmの円形で、P 25・P 26は南北約60cm、東西約40cmの楕円形で、遺構検出面からの深さは約25～65cmを測る。出土遺物はP 24で土師皿（93～96）、P 25で瀬戸端反皿、P 27で土師皿（97・98）と上師質土器（99）、P 28で土師皿（100）がある。P 29～P 39は、SB 5およびSK 3の周辺に散在するピットで、P 29・P 34～P 38は直径約20～60cmの円形で、P 30・31は長径約50cmの楕円形、P 39は長径約100cmの楕円形を呈する。遺構検出面からの深さは5～20cmと浅く、P 39のみ約64cmを測る。出土遺物にはP 29～P 31で土師皿、P 34で土師皿と炭、P 35で土師皿（101）、P36で瀬戸美濃陶器（102）と炭、P 38で土師皿、P 39で鉄釘（143）がある。



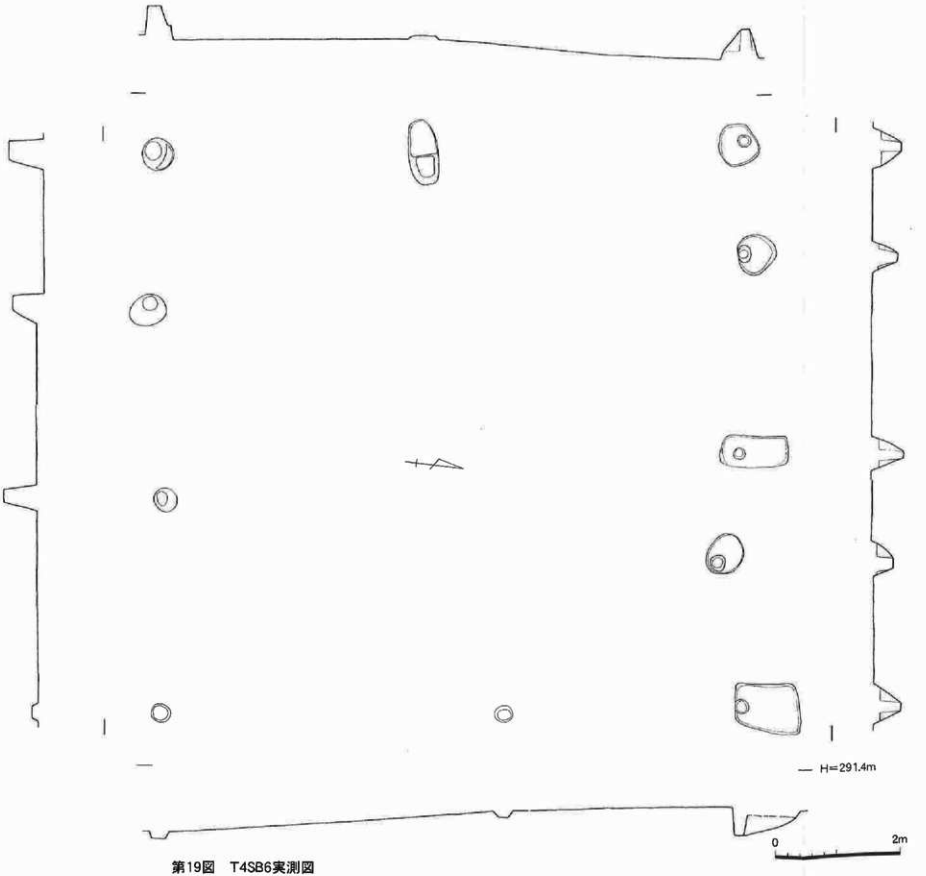
第18図　T4SE1実測図

P 41～43は調査区西側のSB 4・SB 6周辺にあるピットで、P 41・P 43は35cm前後の円形、P 42は南北60cm、東西35cmの楕円形を呈する。深さは15～50cmを測る。出土遺物には、P 41で土師皿、P 42で瀬戸美濃陶器（104）、P 43で瀬戸の壺片（65と同一個体）がある。P 44～P 49はSB 3周辺のピットで、P 44は長径約70cm、短径約50cmの楕円形で、他は直径30～50cmの円形を呈する。遺構検出面からの深さは8～25cmを測る。出土遺物にはP 44で土師皿（105）、P 45で土師皿（106）と擂鉢、P 46で土師皿と炭、P 47で甕、P 48で土師皿と炭化した屋根材とおもわれるもの、P 49で土師皿（107）がある。

iii）遺　　物（第20・21図）

1. 土器類（第20・21図）

T 4からは、土師皿、耳皿、国産陶器のうち瀬戸壺・擂鉢・甕・天目茶碗など、輸入陶磁器には青磁の小片が2点出土している。また、土師皿はほとんどが密な胎土をもち、焼成は良好である。色調は白茶色を呈するものが多い。このため胎土・焼成・色調については異なるものについてのみ記述する。




第19図　T4SB6実測図

**SB1 出土品**

64は土師皿である。口径約8.7cmを測る。器高が高く、体部は丸く立ち上がり、口縁端部を横ナデにより上につまみ出している。内面は白茶灰色、外面は黒灰色を呈す。65は瀬戸の壺で、口径は約11.3cmを測る。口縁部は頸部からやや内傾しながら立ち上がり、先端を丸く収める。内外面とも暗緑色の釉を施す。胎土は1.5mm大の小石をわずかに含むものの密で、色調は茶灰色を呈する。同一個体で接合する破片が、調査区の対角南西端に位置するP43から出土している。瀬戸の壺は16世紀には生産が終わっていることから、15世紀末頃の遺物と考えられる。64・65は柱穴を構成するP2から出土した。

**SB2 出土品**

66～68は土師皿である。66は口径約7cm、器高約1.5cmを測る。やや肥厚した体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は一部横ナデを施す。体部外面には指押さえ痕が残る。67は、口径約14.4cmを測る。体部は直線的に開き、口縁端部を横ナデして強く外反させる。色調は内外面とも口縁部は白茶色、体部は灰黒色を呈する。68は口径約15.5cmを測る。口縁部をわずかに肥厚させて、端部には横ナデを施す。69は瀬戸の擂鉢で小片である。口径約25cmを測る。胎土は良好で、赤みがかった灰色を呈する。いずれもP18からの出土である。

**SB6 出土品**

70は土師皿である。口径約10.6cmを測る。まっすぐ外に開く体部で、口縁部は強い横ナデにより外反させる。内面は茶灰色で、外面と口縁部は白茶色、体部は灰黒色を呈する。柱穴を構成するP22から出土した。

**SK1 出土品**

71は土師皿である。口径約13cmを測る。口縁部を横ナデにより外反させる。72は耳皿である。いちど楕円の皿を作ってから口縁部の両側を押して成形している。

**SK2 出土品**

73は土師皿である。口径約9.8cmを測る。体部は横ナデによりやや外反させ、口縁部をやや肥厚させたのちに端部を上につまみ上げる。

**SD1 出土品**

74～77は土師皿である。74・75は口径約6.5cmと小さく、体部はまっすぐ開いて先端をつまみ出す。76は口径約13.6cm、77は約14.8cmをはかる。ともに口縁部に強いナデを施し、端部は横ナデにより外反させる。

**SE1 出土品**

78は土師皿である。口径約8.6cmを測る。内外面ともにタールが付着し、灯明皿として利用されたものとおもわれる。79は濃い茶色の鉄釉が施された陶器で、器種は水注か。口径約12cmを測る。

**P1 出土品**

80は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径約12.4cmを測る。体部は比較的まっすぐ開き、口縁部でやや立ち上がり、端部でわずかに外折する。明茶色の鉄釉が施されている。胎土は密で、白茶色を呈する。

**P4 出土品**

81 ～ 83 は土師皿である。81・82 は口径約 8.2cm、83 は口径約 9.8cm を測る。いずれも口縁部をわずかに肥厚させて、端部をナデによりつまみ出している。

**P7 出土品**

84 は土師皿である。口径約 8.2cm、器高約 1.4cm を測る。体部はまっすぐ開き、底部中央はやや窪む。作りはやや粗雑である。

**P8 出土品**

85 ～ 87 は土師皿である。口径は順に 10.2・10.6・11.2cm を測る。いずれも口縁部にナデ調整を施し、端部は横ナデにより外反させる。

**P10 出土品**

88 は擂鉢の底部である。底径約 5.9cm を測る。擂り目原体は 10 本以上である。内外面とも赤みがかった灰色で、胎土は 1mm 大の石粒を含む密なもので、黄茶色を呈する。

**P12 出土品**

89・90 は土師皿である。89 は口径約 9.2cm を測る。口縁部をわずかに肥厚させ、先端をナデ調整によりつまみ出す。90 は口径約 17.4cm。口縁部をわずかに肥厚して、端部をつまみ出す。

**P15 出土品**

91 は土師皿である。口径約 10cm を測る。口縁部をわずかに肥厚する。

**P20 出土品**

92 は土師皿である。口径約 10.4cm を測る。口縁部を小さく肥厚し、端部をつまみ出す。

**P24 出土品**

93 ～ 96 は土師皿である。93 は完形で出土した作りの粗雑な小型品で、口径約 7cm を測る。体部外面に指押さえ痕が残る。内面の底部と体部の屈曲部に、ナデ上げの際に生じる「の」の字から跳ね上げた凹線が残る。94 は口径約 10.2cm。口縁部をわずかに肥厚させ、端部をナデて外反させる。95・96 は口径約 16.5cm で、96 は口縁部外面に強い横ナデによる段を作る。端部は外反させる。

**P27 出土品**

97・98 は土師皿である。97 は口径約 8.6cm、器高約 1.9cm を測る。体部から口縁部にかけて肥厚し、口縁端部をつまみ上げる。98 は口径約 14.2cm で、端部はナデで仕上げる。99 は、丸底の土師器の底部で全体に赤茶色を呈する。胎土は密で、焼成はやや甘い。器形は須恵器の坏身に似る。他とは時代が異なる遺物である。

**P28 出土品**

100 は土師皿である。口径約 7cm を測る。体部外面には指押さえ痕が残る作りの粗雑な小型品である。

**P35 出土品**

101 は土師皿である。口径約 9.6cm を測る。口縁端部は横ナデによりわずかに外反させる。

**P36 出土品**

102は瀬戸美濃陶器の底部で低い高台をもつ。高台径約5cmを測る。高台内部には「×」の窯印が線刻されている。暗緑色の釉が内外面に施され、高台部の色調は濃赤茶色である。

**P40 出土品**

103は土師皿である。口径約9.6cmを測る。口縁端部をわずかに外反させてつまみ出す。

**P42 出土品**

104は瀬戸美濃の陶器で、口径約14cmを測る。口縁部でゆるく内湾し、端部は横ナデによりわずかに外折させる。口縁部外面には沈線がまわる。明茶色の鉄釉を施す。胎土は密で、色調は薄茶灰色を呈す。

**P44 出土品**

105は土師皿である。口径約9.8cmを測る。口縁端部内外面にはタールが付着する。

**P45 出土品**

106は土師皿である。口径約10.6cmを測る。口縁端部を大きく外反させる。

**P49 出土品**

107は土師皿である。口径約11cmを測る。口縁端部はわずかに外反させてつまみ出す。

**包含層出土品**

108～138は土師皿である。口径によって大小を仮に分類すると、108～112は口径が6.5～8.6cmで小型、113～127が9.4～13.0cmで中型、128～138が14.0～18.0cmで大型となる。108はほぼ完形で出土した。器壁が厚く口縁部が全体に大きく波打つ。外面は指押さえ痕が明瞭に残る。また、内面底部と体部の屈曲部には指によってナデ上げる際に生じた凹線が残る。小型品の109・110、中型品の113・114・115・117・121の口縁端部にはタールが付着し、紐状の痕跡を残すものがある。灯明皿として使われたものであろう。タールの付着は大型品には見られない。色調はほとんどが白茶色を呈し、わずかに黒灰色のものが混じる。

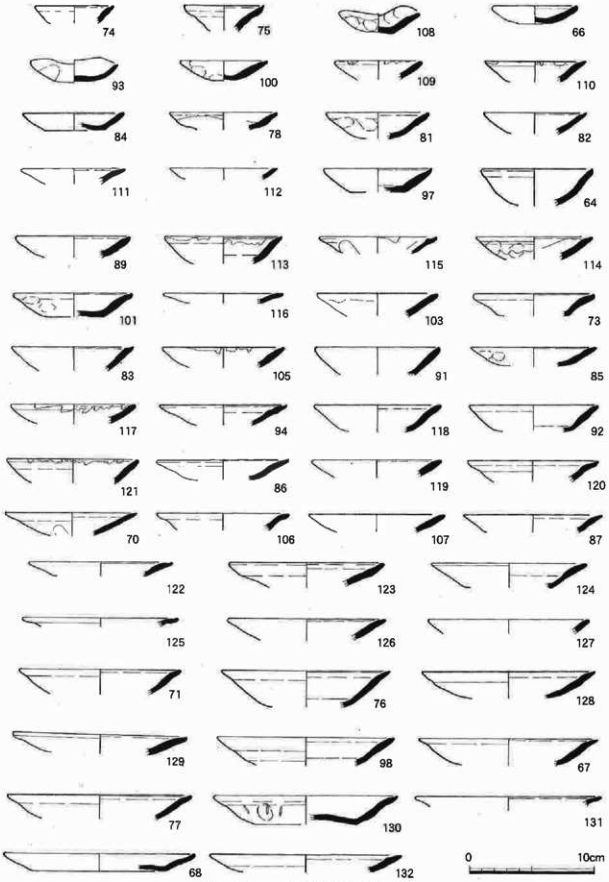
139は瀬戸美濃の天目茶碗の底部で、濃茶色の釉を施す。140は青磁の碗で薄緑色の釉薬がかかる。

2. 金属製品（第41図、図版26）

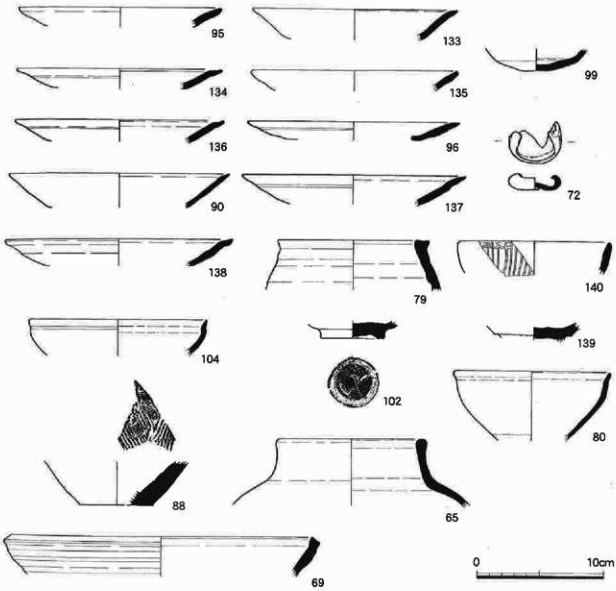
141は北宋銭で「熙寧元寶」である。P5より出土した。142は鉄製品で、途中で折れているが長さ約8cm、幅約1cm、厚さ約0.4cmを測る。同一個体で鉄鏃の柄とおもわれる。SB1の柱穴（P3）から出土した。143は鉄釘でP39から出土した。長さ約5.5cm、幅約1cmで断面は長方形をしている。

3. 石製品（第33図）

144は石臼である。井戸SE1で投棄された多くの石の中から出土した。臼面は平らで、逆の面は中央に向かってやや窪むことから、臼面が上になる下臼であると考えられる。8分割の臼の1区画分（全体の1／8）が出土した。1区画に8本以上の副溝をもつことが確認できる。石材は花崗岩で、石臼の産地として知られる伊吹町内曲谷産のものに近似する。




第20図　T4出土遺物実測図（1）




第21図　T4出土遺物実測図（2）

## 第４節　Ｔ５の調査

ｉ）層　　序

Ｔ５はＴ４の南に続く調査区で、両調査区の間は最大 45cm の段で区切られているにすぎない。Ｔ５は調査前２面の水田で標高は約 289.68 m、288.52 m を測る。遺構検出面も最大高低差約 50cm の上下２段の区画になっており、後世の水田はこれを踏襲している。調査は平成 10 年８・９月に西側半分、平成 11 年３月に東側をおこなった。絵図の「市店民屋」部分にあたる。

調査区西側は、尾根裾を南北にはしる溝ＳＤ１を検出したほか、上段で若干のピット、井戸を検出した。西側上段は中程でさらに２段に分けられる。調査区東側では、掘立柱建物２棟、溝、井戸、土坑のほか多数のピットを検出した。調査区は北から南へ傾斜しており、北側では約 70cm で遺構検出面に達するのに対し、南側では 80 ～ 120cm 掘削した。土層の堆積は基本的に耕土（15 ～ 40cm）、黒色土（50 ～ 100cm）、淡黄色土であるが、西側下段では礫を多く含む青灰色の粘質土層が地山になる。Ｔ２～Ｔ４同様に遺構は黒色土層から掘り込まれているが、淡黄色土層まで掘削して遺構の検出をおこなった。

ii）遺　　構（第 22 図）

1. 掘立柱建物

SB1（第 23 図）

調査区下段南東端で検出した２間（5 m）×２間以上（4 m）の掘立柱建物で、建物の主軸はＷ 18°Ｓの方位をとる。柱穴の平面形は円形で、規模は直径 30 ～ 60cm、遺構検出面よりの深さ 10 ～ 35cm を測る。埋土は黒色土である。遺物は出土していない。

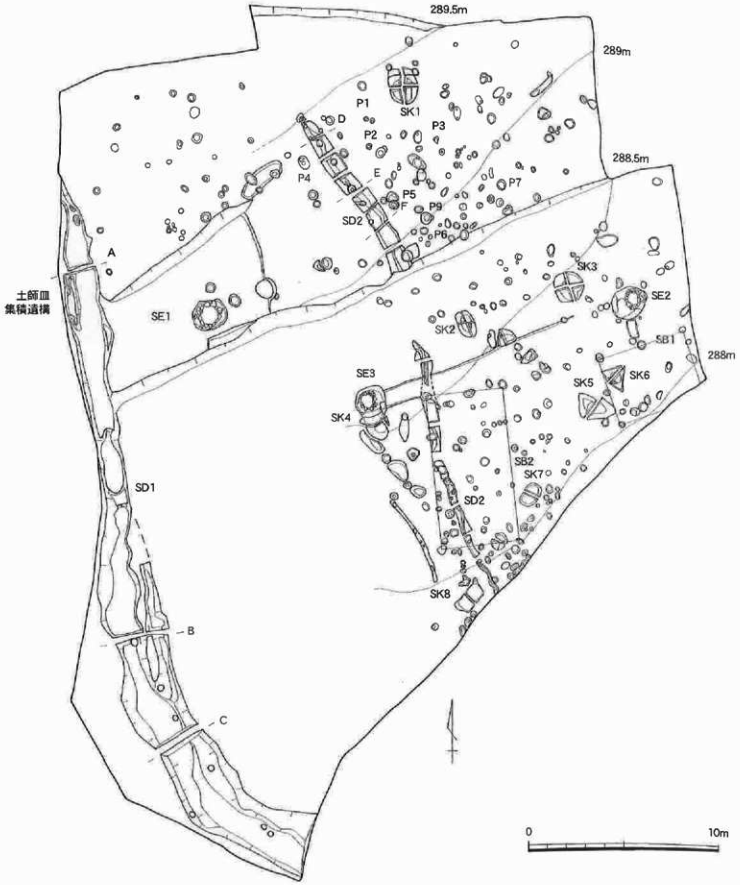
SB2（第 25 図）

ＳＢ３の西側で検出した２間（4 m）×４間（8 m）の掘立柱建物で、建物の主軸はＮ 6°Ｗの方位をとる。柱穴の平面形は円形または楕円形で、規模は直径 20 ～ 55cm、遺構検出面よりの深さ 15 ～ 55cm を測る。埋土は黒色土と暗茶褐色土がある。柱穴を構成するＰ 10 から土師皿（148・149）、Ｐ 11 から土師皿（150）、Ｐ 14 から土師皿（151・152）、Ｐ 17 から土師皿と炭、Ｐ 19 から焼けた壁土が出土した。

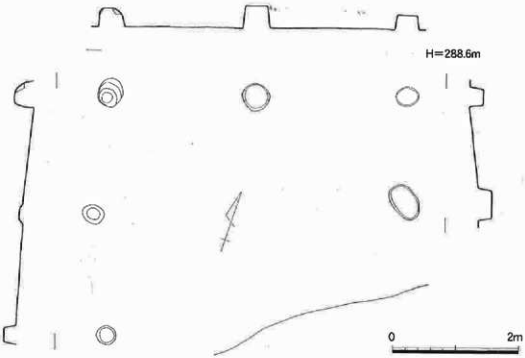
2. 溝

SD1（第 24・26 図）

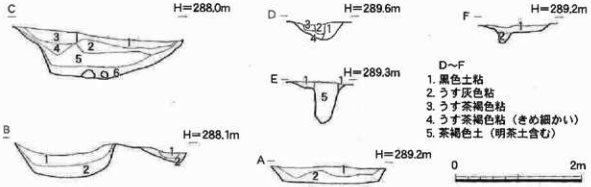
調査地の西端を尾根際に沿って南北に縦断する溝で、中心軸の方位はＮ 12°Ｗをとる。調査区の南西端からゆるやかに東へ向きを変え、Ｔ７の南端では東西方向の溝になる。調査前も、ほぼＳＤ１の流路に沿って水路がもうけられていた。調査区での総延長は約 38 m を測る。北側では幅約 30 ～ 150cm、深さ約 10 ～ 25cm を測る。埋土は茶褐色土（3cm 大の砂利が混じる）、茶色砂利土で、北端から２m の地点から約７m にわたって、土師皿が数カ所に集積している遺構を検出した。土師皿（183 ～ 251）は茶褐色土層下半で検出した。溝底面からの高さは約５～ 25cm を測る。総数 69 枚で３～ 10 枚まとまっている出土した地点が６ヵ所（Ａ～Ｆ）ある。Ａ～Ｄは、集積遺構北側に位置している。Ａは５枚の土師皿と 8cm 大の石がまとまって出土した。口径約 9.4cm の中型品の下に口径約 6.3 ～ 8cm の小型品が割れた状態でまとまって出土した。Ｂは６個体がまとまって出土した。一番上の口径約 9cm の個体以外は、7 ～ 7.8cm の小型


289.5m
289m
288.5m
288m
SK1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P9
D
E
F
SD2
A
土師皿
集積遺構
SE1
SK3
SE2
SK2
SB1
SK6
SK5
SE3
SK4
SB2
SK7
SD2
SD1
SK8
B
C
0
10m

第22図　T5遺構図

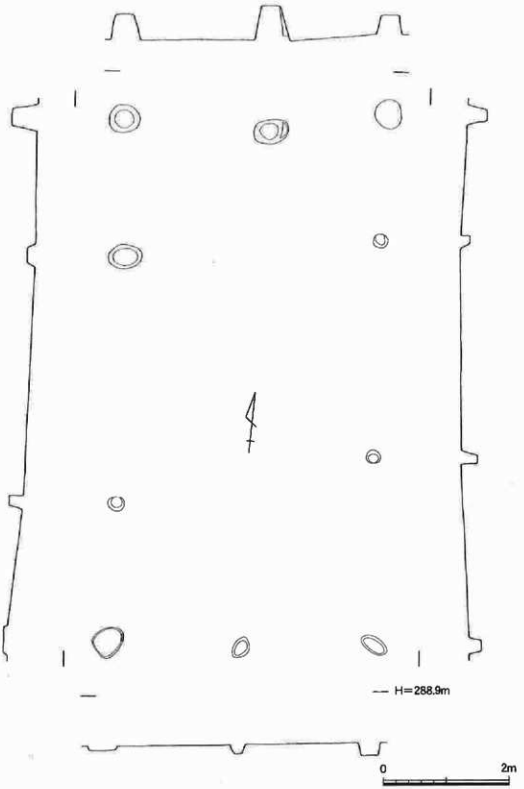



第23図　T5SB1実測図




A～C
1. 茶褐色土（3cm大砂利混り）
2. 砂利土
3. 暗茶褐色土（小石混り）
4. 暗茶褐色土
5. 茶褐色土（小石混り）
6. 灰茶褐色土（小石混り）

第24図　T5SD1・SD2断面図




第25図　T5SB2実測図

品であり、3個体は小片である。Cは6個体がほぼ完形の状態で出土した。出土状況はうつぶせが多く、縦位と仰向けが1点づつある。構成は口径9.5cm 前後の中型品が2点、約7.2cm の小型品が4点である。Dはほぼ完形の7点がうつぶせの状態でまとまって出土した。構成は口径約9.2cm の中型品が2点、口径7.2～8cm の小型品が5点である。E・Fは遺構南側にある。Eは10枚がまとまって出土した。仰向けに5枚重なっているものもある。すべて口径6.8～7.4cm の小型品である。FはEの東側にあり、11枚がうつぶせに重なって出土した。出土状況は上半分が口径約11.2cm の中型品4枚と約13.8cm の大型品1枚、下が口径6.2～7cm の小型品であった。

中型品と小型品を重ねて投棄した状況や、口縁部にタールが付着するものが1点も無いことから、儀式や宴席などで使用された土器を一括して捨てたものと考えられる。

ＳＤ１は中間付近から幅約3m 前後、深さ約50～80cm の規模になる。埋土は茶褐色土、茶色砂利土、茶褐色土、灰茶褐色土（小砂利混じり）である。3層目から土師皿（156～173）、国産陶器のうち常滑大甕（177）・瀬戸陶器（178）・擂鉢（175・176）・天目茶碗（179・180）・瓦質土器（174）、輸入陶器の天目茶碗（181）、その他、時期が異なる須恵器（182）などが出土した。上2層には近世以降の陶磁器が混じる。

SD2（第24図）

Ｔ４ＳＤ１から続く溝で、上段では中心軸をＮ30°Ｗの方位をとり、幅約70～100cm、深さ約25cm 前後を測る。下段でＮ15°Ｗの方位をとり、幅約15～60cm、深さ約7～16cm を測る。出土遺物はほとんどなく、埋土中より土師皿（252）が1点出土した。

3. 井戸

Ｔ５では3基の井戸を検出した。

SE1（第27図）

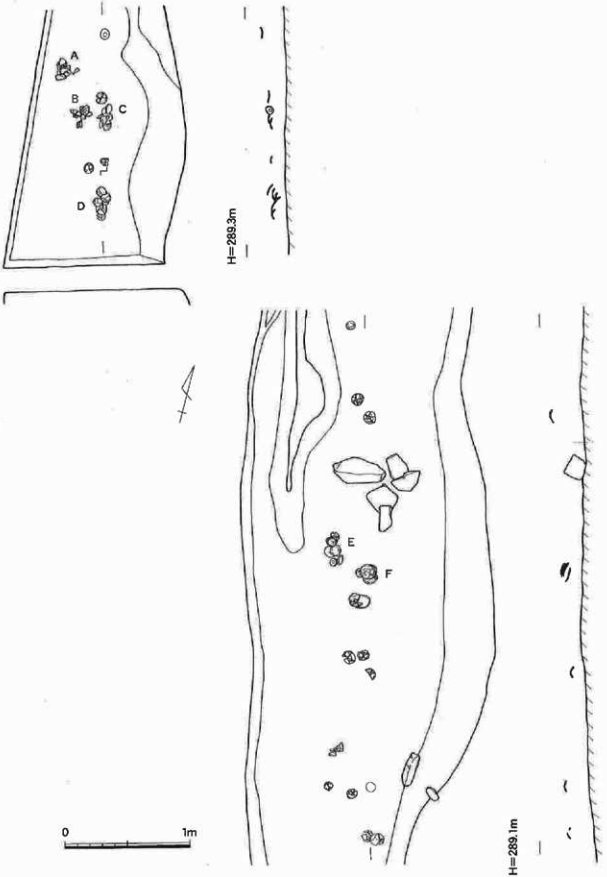
調査区上段西側で検出した石組円形井戸である。堀方は直径約170cm の円形である。井戸は直径90～95cm、深さ約145cm で、底部に構造物は見られない。石は20～40cm の河原石で、検出時は約11段積まれていた。断面の形状は上部と底部がほぼ同じ幅の円筒形を呈する。井戸内にはＴ４ＳＥ１同様に20～50cm 大の石が投げ込まれていた。井戸内から土師皿（253・254）、常滑甕片が出土した。

SE2（第27図）

調査区下段東端で検出した石組円形井戸である。南側にＳＢ１が近接している。井戸は直径約75cm で、深さ約180cm を測る。井戸石組の周りは黄茶色粘質土で突き固めている。その高さは遺構検出面より20～30cm を測り、幅は西側および東側で広くなり約50～80cm を測る。西側ではほとんど見られない。石組は10～40cm の石で組まれており、検出時6～11段積まれていた。断面の状況は下がやや広がる円筒形である。井戸内の埋土は茶褐色土で、40　大の石が含まれる。底部に構造物はなく、黄茶色土（地山）になる。井戸内埋土中より、土師皿（255・256）、石臼（291～293）が出土した。

SE3（第27図）

調査区下段中央で検出した石組円形井戸である。堀方は遺構検出面で東西約160cm、南北約190cm を測り、擂鉢状に約75cm 掘り下げたところから石を組んでいる。井戸は直径70～80




第26図　T5SD1土器出土状況実測図

cm、深さ約115cm で底部に構造物はみられない。石は15～30cm のものが多く、検出時7～9段積まれていた。断面の形状は底部がわずかに広がる円筒形である。井戸上部の堆積は茶褐色土、茶色粘質土（30～40cm 大の石含む）、黒色粘質土（焼土含む）で、井戸本体内には30～40cm 大の石が20～30点入っていた。底部は細かい砂質土である。黒色粘質土中から、土師皿（257）、擂鉢片、漆器椀（277）、木製品（278～288）、炭化した縄、竹片、木片、根、ウメの種などが出土した。漆器椀は擂鉢状の堀方の壁面にうつぶせに張り付いた状態で出土した。

4. 上坑

SK1（第28図）

調査区上段北側で検出した隅丸長方形の土坑で、東西約150cm、南北約195cm を測る。遺構検出面からの深さは約45cm を測る。北側で1段浅い段をもち、他は55°位の角度で掘り下げる。埋土は黒色砂利土、黒色粘質土（約15cm 大の礫混じり）、黒色砂質土、茶褐色砂質土で、粘質土が約25cm ともっとも厚い。出土遺物には土師皿（258～263）、擂鉢、瀬戸陶器がある。遺構の性格は不明である。

SK2（第28図）

調査区下段北側で検出した楕円形の土坑で、ＳＤ２の東に位置する。南北約165cm、東西約100cm、遺構検出面よりの深さ約80cm を測る。埋土は上から黒色砂質土、灰褐色粘質土、黒色粘質土、同砂質土で、上２層は細かい砂利を多く含む。遺物は出土していない。

SK3

調査区下段東側で検出した円形土坑である。直径約160cm、深さ約13cm と浅い。埋土は茶褐色土で、出土遺物には土師皿（264）がある。

SK4

ＳＥ３によって切られた形で検出した土坑で、径約120cm の半円形を呈する。遺構検出面よりの深さ約90cm を測る。埋土は黒色粘質土で、擂鉢（265）、加工痕のある柱状木製品（289）が出土した。

SK5（第28図）

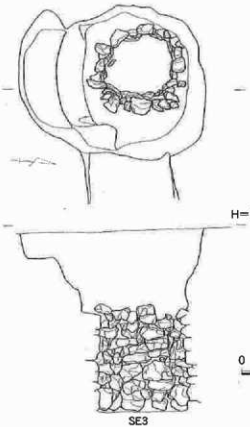
調査区下段南東端で検出した、ＳＫ６と向かいあう平面三角形の土坑である。長辺約220cm、遺構検出面よりの深さ約34cm を測る。埋土は上層が黒色粘質土で、下層は茶色粘質土である。遺物は出土しなかった。

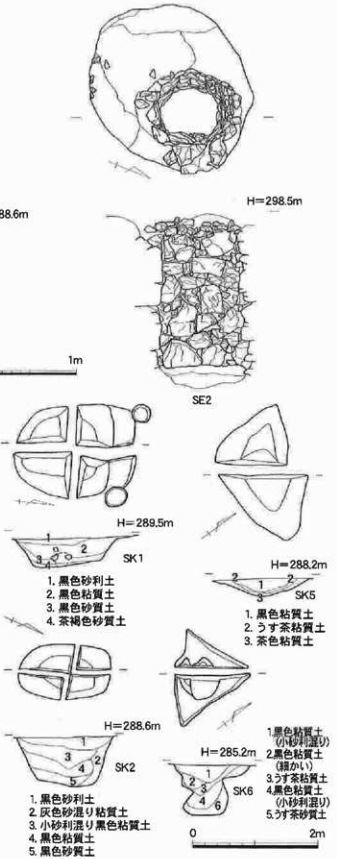
SK6（第28図）

ＳＫ５と向かい合って東側にある平面三角形の土坑である。一辺の長さ約150cm、遺構検出面よりの深さ約70～85cm を測る。断面の観察から、遺構検出面より約20cm 下で直径約50cm にすぼまり、ここからフラスコ状に広がる。埋土は黒色粘質土（砂利混じり）、薄茶色粘質土、黒色粘質土（細かい砂利混じり）、薄茶色砂質土である。ＳＢ３の貯蔵穴かとおもわれるが、遺物が出土しなかったため、詳細は不明である。

SK7・SK8

調査区下段中央南端で検出した土坑で、ＳＫ７は約130cm × 80cm の楕円形土坑で、遺構検出面よりの深さ約30cm を測る。ＳＫ８は長辺約150cm、短辺約80cm の隅丸長方形で、深さは




第27図　T5SE1～3 実測図

第28図　T5SK1・2・5・6 実測図

約25cm である。埋土はいずれも上層は砂利を含む黒色土である。遺物は出土しなかった。類似の土坑が両者の間にあり、地形に沿って並んでいるが遺構の性格は不明である。

5. その他の遺構

**ピット**

ピットは調査区東側で多く検出した。ＳＢ１～２の他に掘立柱建物の柱穴として組み合うものがあると考えられる。埋土は黒色土または茶褐色土である。

Ｐ１～Ｐ９は、調査区上段にある多数のピット群の一部で、円形のものが多く直径25～50cm、深さ30～60cm を測る。出土遺物は、Ｐ１で土師器。Ｐ２で土師器（266）、鉄釘（290）。Ｐ４で土師皿（267）。Ｐ６で土師皿（146・147）。Ｐ５で土師皿（268・269）。Ｐ９で土師皿（145）がある。

Ｐ13・Ｐ15・Ｐ16は、下段のピット群の一部で、規模は直径約40cm、深さ約30cm を測る。出土遺物は、Ｐ13で土師皿（270）。Ｐ15で土師皿（271）、瀬戸陶器（272）。Ｐ20で土師皿（274・275）がある。

ii）遺　　物（第29～33図）

1. 土器類（第29～31図）

Ｔ５からは、須恵器、土師皿、瓦質土器、国産陶器のうち常滑甕・瀬戸陶器・擂鉢・天目茶碗・近世以降の陶磁器、輸入陶磁器には天目茶碗・青磁などが出土している。また、土師皿はほとんどが密な胎土をもち、焼成は良好である。色調は白茶色を呈するものが多い。このため胎土・焼成・色調については異なるものについてのみ記述する。

**SB2 出土品**

148～152は土師皿である。148・149は口径約15.1cm、16.3cm を測る。ともにまっすぐ外に開く体部をもち口縁部を横ナデする。特に149は強くナデたあと外反させている。柱穴を構成するＰ10から出土した。150は口径約11cm で口縁部に横ナデを施す。Ｐ11からの出土である。151・152はともに小片で、口径約10.3cm、12.6cm を測る。151は口縁端部を強くナデて短く外反させる。152は口縁部をナデて外反させる。Ｐ14から出土した。

**SD1 出土品**

ＳＤ１北側で検出した土師皿集積遺構の出土品は後述し、ここでは、その他の埋土中より出土した遺物を取り上げる。なお、時代的に中世以降の遺物については除いた。

156～173は土師皿である。口径により仮分類すると、156～164は口径が5.9～8.8cm で小型、165～169が口径9.0～11.4cm で中型、170～173が口径12.8～15.6cm で大型に分けられる。小型品はいずれも作りが粗雑で体部に指押さえ痕が残る。また、口縁部をやや肥厚させるものが多い。158・160はほぼ完形で出土した。口縁に高低差があり、作りの粗雑なものである。160には底部と体部の屈曲部内面に指ナデによる凹線が残る。162は口縁端部内外にタールが付着する。164は底部を窪ませ、口縁端部は大きく外反する。他の小型品とはやや器形を異にする。165は体部に指押さえ痕が残る。口縁端部を上につまみ出す。166・167・168は口縁部をわずかに肥厚させて外反する。168は口縁部にタールが付着する。169・172は口縁部を強くなでて大きく外反させる。171は口縁先端を四角く面取りしている。173は端

部をナデでつまみ出す。

174は瓦質火鉢の脚である。中央に下部がくびれた足をもち、両側が横に張り出している。胎土は密で、焼成は良好である。薄赤茶色を呈する。175・176は擂鉢である。175は口縁部で色調は薄赤茶色を呈する。176は底部で、底径約9.4cmを測る。擂り目原体は13本以上を数える。177は常滑の甕である。口縁部を幅広い帯状に成形している。茶灰色を呈する。16世紀前半のものであろう。178は瀬戸美濃の端反皿である。口径約12.8cmの口縁部で、緑灰色の灰釉が施されている。口縁部内面にタールが付着する。T2P23出土の9と近似している。179～181は天目茶碗である。179は口縁部で口径約14cmを測る。濃黒茶色の鉄釉が施されている。180は底部で、高台径約4.4cmを測る。内面には鈍い茶色の釉薬が施されている。181も高台で径約4.6cmを測る。底部内面には青味がかった緑色の釉が施されている。輸入品とおもわれる。180・181は、高台の縁を丁寧に打ち欠いており、破損後の二次加工がみられる。「めんこ」のようなものに利用した可能性がある。182は須恵器甕の頸部である。外面には薄緑色の自然釉がかかる。

**SD1土師皿集積遺構出土品**

183～251は土師皿でSD1の北側で約7mにわたって、致力所づつまとまって出土した。総数は69点で、口径による分類は以下の通りである。

| | | |
|---|---|---|
| ①7cm未満 | 7点（10.1%） | |
| ②7～7.5cm未満 | 34点（49.3%） | |
| ③7.5～8cm未満 | 5点（7.3%） | |
| ④8～8.5cm未満 | 2点（2.9%） | ①～④ 48点（69.6%） |
| ⑤8.5～9cm未満 | 1点（1.4%） | |
| ⑥9～9.5cm未満 | 10点（14.5%） | |
| ⑦9.5～10cm未満 | 1点（1.4%） | |
| ⑧10～10.5cm未満 | 2点（2.9%） | |
| ⑨11～11.5cm未満 | 6点（8.8%） | |
| ⑩11.5cm | 1点（1.4%） | ⑤～⑩ 21点（30.4%） |

これを見ると、①～④の小型品が69.6%で最も多く、その大半を②が占めていることがわかる。さらに、②の約37%は口径約7.2cmのもので、規格性が認められる。⑤～⑩が中型品である。11.5cm以上の大型品は見られない。ここでは、土器の調整状況から8.5cmを小型と中型の境にした。

小型品（183～229）のほとんどは、作りが粗雑で、口縁部が波打っているものが多い。器高は、約1.3～1.8cmを測る。薄手のものが多いが、口縁部を小さく肥厚させるものもある。また、内面は比較的平滑に仕上げられているが、外面には指押さえ痕が明瞭に残る。口縁端部はナデによりわずかに上へつまみ出すものが多いが、191・194・198・200・201・203のように調整せず外に開くものもある。218はつぶれた煎餅状をしており、口縁平面形も円形にならない。197・221は口縁部の一端が大きく立ち上がり箕のような形をなす。210・214・216は底部内面に指押さえ痕が残る。185は口径約6.4cmと最小の部類に入るが、器形の作りは丁寧である。188・189・192・225は、底部内面と体部の屈曲部にナデ跡とはね上げが確認でき

る。192 は底部中央を指で窪めている。193 は口縁部を外反させ、先端を上につまみ出す。

中型品（230 ～ 251）は、外面の指押さえ痕を横ナデにより消している。口縁端部は強いナデによりわずかに外反させるものが多い。口縁部を小さく肥厚させる。器高は、約 1.4 ～ 2.0cm を測る。246 は底部と体部の屈曲部にナデによる明瞭な凹線とはね上げ痕が残る。247 は同屈曲部に指押さえ痕が残る。248 は強いナデにより口縁部と体部の間に段が生じている。

**SD2 出土品**

252 は土師皿である。口径約 7.7cm を測る。端部をナデて外反させている。

**SE1 出土品**

253・254 は土師皿である。253 は口径約 9.4cm を測る。器形はまっすぐ外に開く。254 は口径約 11.8cm で、口縁端部がナデにより外反する。どちらも端部にタールが付着する。井戸中にあったためか表面が腐食している。

**SE2 出土品**

255・256 は土師皿である。255 は口径約 8.3cm を測る。口縁部を肥厚させている。256 は口径約 15.4cm を測る。口縁端部はナデにより外反させる。

**SE3 出土品**

257 は土師皿である。大型の精緻な作りで口径約は約 14.7cm を測る。口縁端部は強くナデて長く外反させている。

**SK1 出土品**

258 ～ 263 は土師皿である。258 ～ 260 は作りが粗雑な小型品で、口径 6.4 ～ 7.2cm、器高 1.3cm を測る。外面には指押さえ痕が残る。261・262 は、ともに口径約 11.2cm を測る。261 は口縁端部をナデによりつまみ出す。262 は内湾気味に立ち上がる。色調は薄赤茶色を呈する。263 はまっすぐ開く体部で、口縁部をナデてやや外反させる。

**SK3 出土品**

264 は土師皿である。口径約 15cm を測り、口縁部をやや外反させる。

**SK4 出土品**

265 は瀬戸美濃の擂鉢体部である。1 ～ 3mm の小石をわずかに含む密な胎土で、色調は赤茶色である。わずかに擂り目が認められる。

**P2 出土品**

266 は土師皿である。口径約 9.4cm を測る。口縁部はナデてわずかにつまみ出す。内面にはタールが付着している。灯明皿として使用されたものと考えられる。

**P4 出土品**

267 は土師皿である。口径約 14.6cm を測る。口縁部をやや肥厚させ、端部をなでて外反させる。

**P5 出土品**

268・269 は土師皿である。口径はともに約 10cm を測る。口縁部を強くナデて外反させる。

**P6 出土品**

146・147 は土師皿である。ともに小片で口径約 8.6cm、約 10.4cm を測る。147 は口縁部に横ナデを施しわずかに外反させる。

**P9 出土品**

145は土師器である。口径約13.5cmを測る。まっすぐ外に開き、口縁部はナデによりつまみ出す。

**P13 出土品**

270は小型の土師皿で、口径約6.2cmを測る。体部外面に指押さえ痕が残る。

**P15 出土品**

271は土師皿である。口径約13.6cmを測る。口縁部を大きく外反させる。272は瀬戸美濃の端反皿である。口径約12cmを測り、薄緑色の釉が施されている。

**P16 出土品**

273は土師皿の小片である。口径約18.1cmを測る。口縁部をナデて外反させる。

**P20 出土品**

274・275は土師皿である。口径は約13.0cm、約16.4cmを測る。

**P21 出土品**

276は擂鉢の底部である。底径約8.7cmで、小片でわずかに擂り目が確認できる。底部には糸切り痕が残る。

**P22 出土品**

153～155は土師皿である。いずれも小片で、口径は順に約8cm、約13cm、約14cmを測る。153は口縁端部にタールが付着しており、灯明皿として使用されたものとおもわれる。口縁端部を上につまみ出す。154・155は口縁部を横ナデにより外反させている。

2. 木製品（第32図）

Ｔ５の調査では、ＳＥ３の黒色粘質土中から木製遺物が出土した。また、切り合い関係にあるＳＫ４からも１点出土している。

**SE3 出土品**

277は漆器の椀である。内面は赤色、外面は黒色で３面に赤で文様が描かれているが、剥離がはげしく判然としない。高台の痕跡があり、高台径約8cmを測る。材質は欅である。

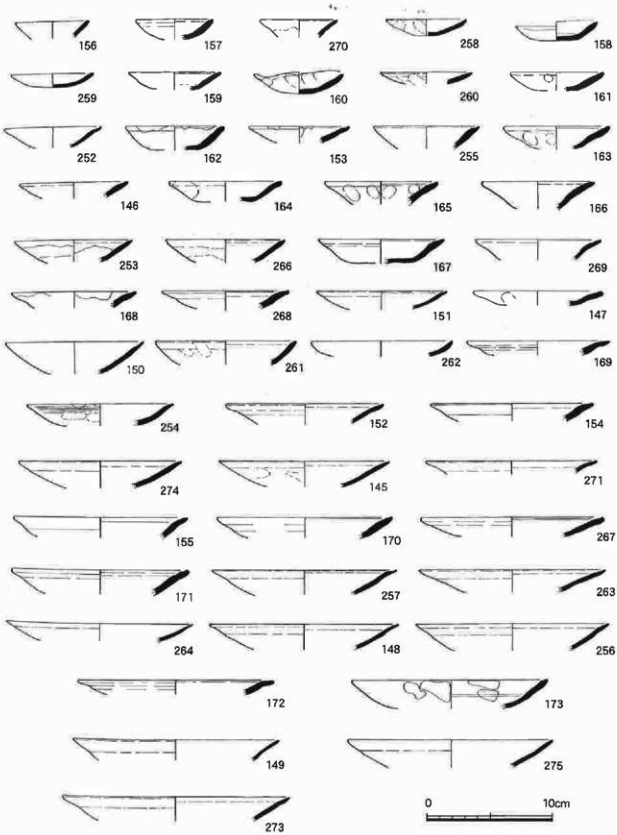
278～280は、形状や素材から同一個体または、同種のもので在る可能性が高いが、その性格や用途については不明である。278は残存部で長さ約5.3cm、幅約2.7cm、厚さ約1.5cmを測る。2ないし3枚の板を合わせ、樹皮状のもので2カ所を止めている。コーナーは丸く収める。279は残存部の長さ約12cm、幅3cm、厚さ0.7cmを測る。278同様樹皮状の留め具が残っている。中央やや下に幅0.8cmの切り込みがある。280は残存長約8.4cm、幅3.5cm、厚さ0.7cmで、樹皮の留め具が取り付けられていたとおもわれる穴がうがたれている。コーナーは丸く仕上げる。281は、直径1.7～2.0cm、長さ約4.2cmの円筒形をしており、中央部に幅約0.4cm、深さ約0.1cmの溝を全周させている。編み具の駒かとおもわれる。282～284は杭状の木製品である。285～288は建築部材の一部とおもわれるもので、いずれも反面または全面が焼けている。幅約4～5cm、厚さ2～3cmを測る。286にはほぞ穴のような切れ込みがある。

**SK4 出土品**

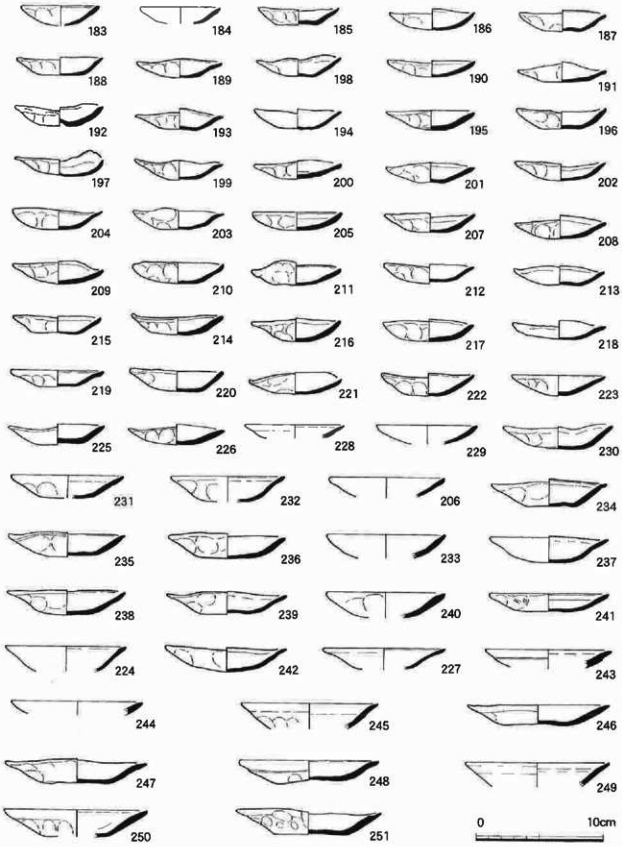
289は円筒形の木製品で、両端に刃物による加工痕が見られる。残存長約20cm、直径11.5～12.5cmを測る。性格は不明である。

3. 金属製品（第41図）

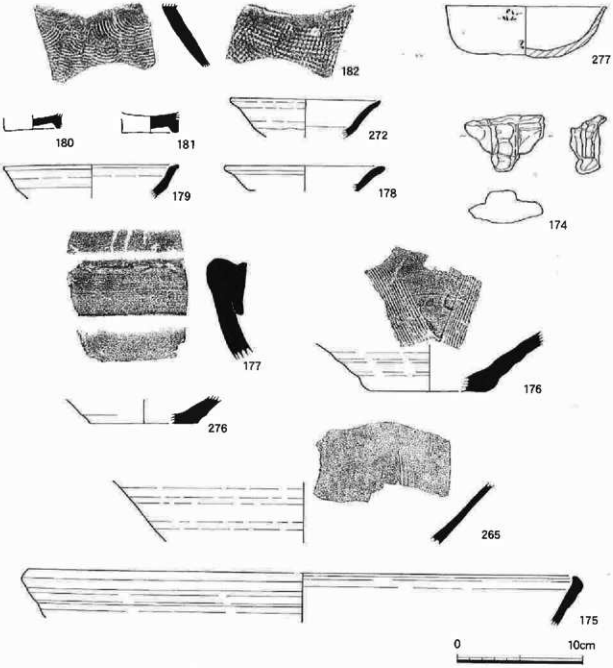
290は鉄釘である。Ｐ２から出土した。Ｕの字に曲がっているが、長さ約3.5cm、幅約0.4cmを測り、断面は円形である。




第29図　T5出土遺物実測図（土器類1）




第30図　T5出土遺物実測図（土器類2：集積遺構出土品）



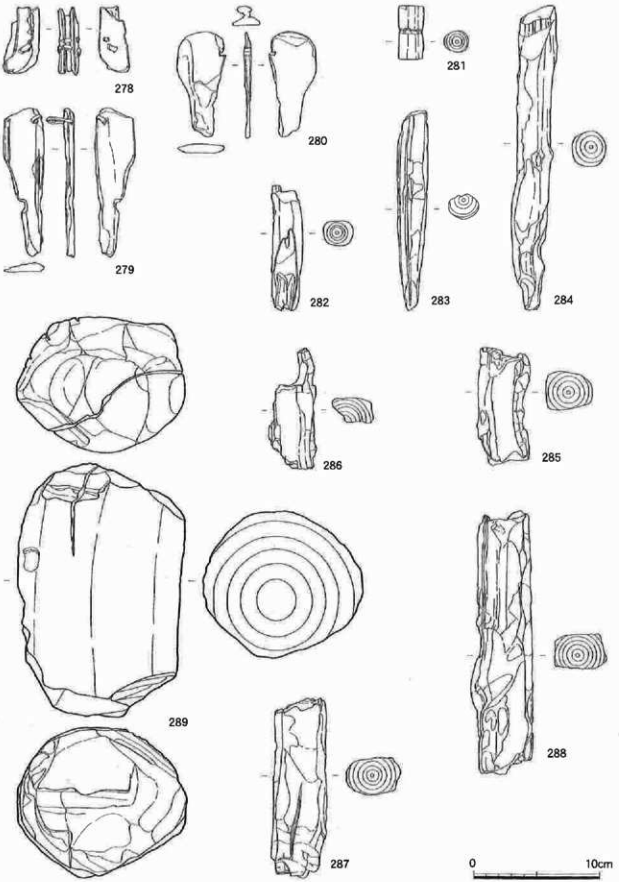

第31図　T5出土遺物実測図（土器類3）

4. 石製品（第33図）

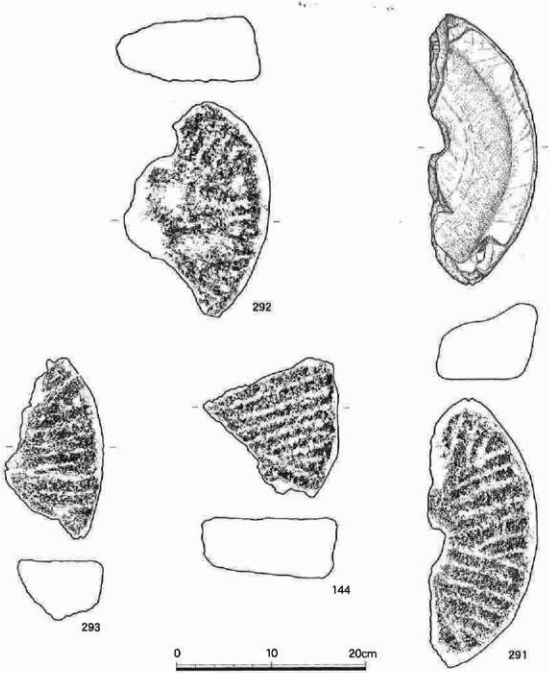
291 ～ 293は石臼である。いずれもＳＥ２の井戸内から出土した。291は上臼で、上面には深さ約3cm の浅い皿状のくぼみがあり、四角い供給口の一部が残る。下面は明瞭に臼の目がわかり、4区画分が確認できる。全体では8分割の臼であろう。1区画の副溝は6本を数える。石材は花崗岩で、浅いくぼみ、四角い供給口、石質などから伊吹町産の曲谷臼であると判断できる。292は、下臼とおもわれるが摩耗がはげしく明確ではない。293も摩耗した小片である。いずれも石材から曲谷臼と考えられる。

5. 繊維製品

ＳＥ３の黒色粘質土中から炭化した縄が出土している。長さはともに約6.5cm、幅0.8 ～ 1cmを測る。図化しなかった。




第32図　T5出土遺物実測図（木製品）




第33図　出土石臼実測図

## 第5節　T6の調査

i）層　　序

T6は調査地域の南端に設定した調査区である。調査日程の都合で、T5との間にT7を設定している。また、T6から約50m南に行くと旧道北国脇往還に至るが、この間は試掘調査の結果、遺構を確認しなかった。調査前の水田面の標高は約285.63mを測る。本調査区も絵図の「市店民家」に該当する。

遺構は調査区中央で南北に走る溝を検出したほか、方形の土坑を1基確認したのみで、出土遺物は皆無であった。土層の堆積は耕土（20～25cm）、黒色土（60～100cm）、淡黄色土（地山）である。調査の結果から、T7まで濃密に分布する中世遺構が、T7SD1を境にT6まで及んでいないことが判明した。

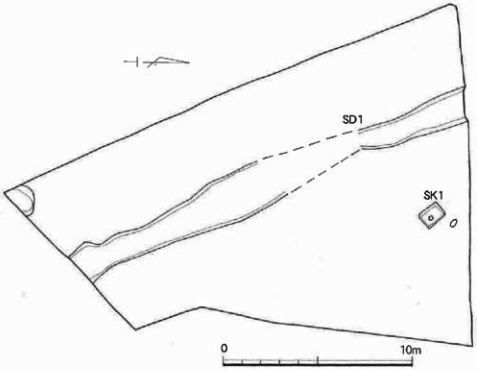
ii）遺　　構（第34図）

**SD1**

南北にはしる溝で、中心軸はN 26° Wをとる。幅約110～240cm、深さ約3～18cmを測る。埋土は茶褐色土である。

**SK1**

SD1の東側で検出した、南北110cm、東西100cmの方形の土坑で、直径約20cmの円形柱痕を検出した。北側の水田では遺構を検出しておらず規模や性格は不明である。




第34図　T6遺構図

## 第6節　Ｔ７の調査

ｉ）層　　序

Ｔ７は、Ｔ５の南に設定した調査区で、調査前の水田面の標高は約 287.05 ｍを測る。絵図の記載では「市店民家」部分にあたると考えられる。調査区のほぼ全面で遺構を検出したが、西端はやや疎である。掘立柱建物１棟の他に、井戸、溝、土坑、ピット、焼土などを検出した。溝ＳＤ１はＴ５で検出した溝ＳＤ１が大きく東へ振れた部分である。南側の溝の肩を確認するためにサブトレンチ（ＳＴ１）を設けた。調査区は北西から南東へ大きく傾斜している。北側では約 40㎝ で遺構面に達するのに対し、南東端では約 150㎝ を測る。上層の堆積は、調査区北端で耕土（約 30㎝）、茶褐色土（約 10㎝）、明黄色土（地山）で、南東側では耕土（20 ～ 25㎝）、茶褐色土、黒色土（50 ～ 120㎝）、暗茶色土となる。

ii）遺　　構（第 35 図）

1. 掘立柱建物

SB1（第 36 図）

調査区中央北側で検出した１間（3.6 ｍ）×３間（9 ｍ）の掘立柱建物で、建物の主軸はＷ 10°Ｓの方位をとる。柱穴は平面円形と楕円形があり、直径 30 ～ 75㎝、遺構検出面よりの深さ 10 ～ 65㎝ を測る。埋土は黒色土である。柱穴を構成するＰ 9、Ｐ 11 から炭が出土した。Ｐ７からは擂鉢片が出土している。

2. 溝

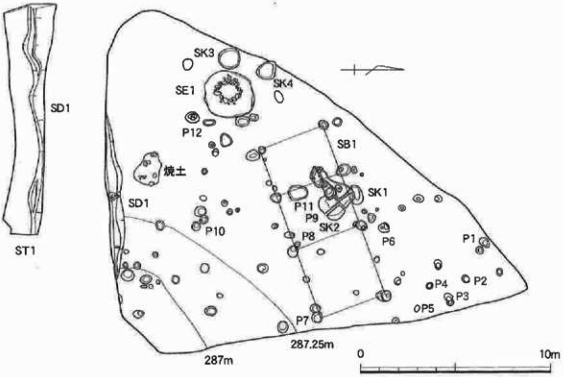
SD1

調査区南端とサブトレンチ（ＳＴ１）で確認した堀状の溝である。ほぼ東西方位をとる。Ｔ５で南北にはしるＳＤ１が、Ｔ５の南端で東に向きを変えてＴ７の南端をかすめる。検出した部分の上端の幅は約 400 ～ 520㎝ を測る。溝の底部は検出していない。肩から擂鉢状に落ち、Ｔ７南端で検出した深さ約 70㎝、ＳＴ１で約 60㎝ を測る。埋土は、暗茶褐色土、茶褐色砂質土（砂利混じり）である。遺物は出土していない。

3. 井戸

SE1（第 37 図）

調査区西寄りで検出した石組円形井戸である。堀方平面は東西約 260㎝、南北約 250㎝ を測る。井戸本体は直径 80 ～ 100㎝、深さは約 270㎝ を測る。底に直径約 35㎝、高さ約 20㎝ の桶を設置し、周りを 20 ～ 25㎝ 大の石で補強している。井戸を構成している石は 15 ～ 30㎝ のものが多く、現状で 15 段前後積まれている。断面の形状は中央付近がわずかにふくらむ円筒形をしている。井戸内の堆積は、遺構検出面より約 160㎝ までが茶色砂土と 20 ～ 70㎝ 大の石で充填されている。下層は茶褐色の泥層で水が出て、石がさらに大きくなる。最下層は黄茶褐色砂利土、青灰色の細砂利であった。井戸中に投棄されていた石は 190 点を数える。一部被熱したものや、平らで礎石をおもわせるものもある。出土遺物は土師皿の小片がある。また、底部の桶については危険を伴うために取り出さなかった。




第35図　T7遺構図

4. 土坑

SK1

ＳＫ１はＳＫ２に切られた形で検出した土坑で、長径約 100cm、遺構検出面よりの深さ約 18 cm を測る。埋土は薄茶褐色土である。出土遺物には土師皿（294）がある。

SK2

約 185 × 130cm の楕円形土坑で、遺構検出面よりの深さは約 6cm を測る。埋土は明茶褐色土である。北側でＳＫ１を切り、西側には焼土がつまったＰ９・Ｐ 11 がある。出土遺物には土師皿（295）、常滑甕がある。遺構の性格はわからない。

SK3

ＳＥ１の北西側には直径 100 ～ 120cm の土坑ＳＫ３・ＳＫ４がある。遺構検出面からの深さは約 16cm・約 38cm を測る。ＳＫ３からは土師皿（296）、常滑甕（297）が出土した。

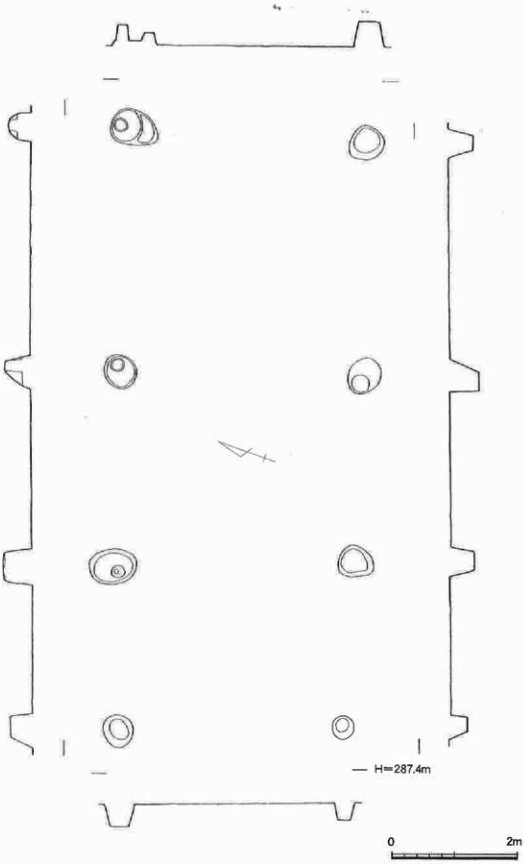
5. その他の遺構

焼土

ＳＤ１の北側に焼土が集中している個所が見られた。赤褐色の焼け土が、厚さ約 20cm の茶色土および黒色土層の上部および内部に散在していた。範囲は東西約 170cm、南北約 140cm である。土師皿（298・299）、瀬戸美濃陶器、擂鉢、天目茶碗、砥石（305）が出土した。

ピット

遺物が出土したピットは調査区北側に集中している。Ｐ１～Ｐ８は平面円形で、直径 30 ～ 50cm、遺構検出面よりの深さ 35 ～ 45cm を測る。出土遺物は、Ｐ１で土師皿、炭、Ｐ３で土師皿、Ｐ５で瓦質土器（300）、Ｐ６で土師皿（301・302）、Ｐ８で土師皿（303）がある。Ｐ 10 は調査区中央付近の円形ピットで、直径約 35cm、遺構検出面よりの深さ約 58cm を測る。




第36図　T7SB1実測図

土師皿（304）が出土した。Ｐ12はＳＥ１の南にあるピットで、直径約40cm、深さ約45cmを測る。土師皿が出土した。ピットの埋土は茶色土である。

ｉ）遺　　物（第38図）

1. 土器類（第38図）

Ｔ７からは、土師皿、瓦質土器、国産陶器のうち瀬戸美濃陶器・常滑甕・擂鉢・天目茶碗が出土している。このうち土師皿は、ほとんどが密な胎土をもち、焼成は良好である。色調は白茶色を呈するものが多い。このため胎土・焼成・色調については異なるものについてのみ記述する。

**SK1 出土品**

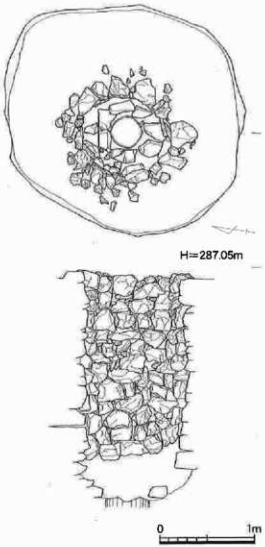
294は土師皿である。口径約10.3cmを測る。口縁端部を横ナデにより外へ屈曲させる。端部にタールが付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

**SK2 出土品**

295は土師皿である。口径約16cmを測る。口縁部をナデにより外反させる。

**SK3 出土品**

296は土師皿である。口径約11cmを測る。体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がる浅い器形をもつ。口縁端部にタールが付着し、灯明皿として使用されたものであろう。297は常滑甕の底部である。底径約14.8cmを測る。底部には砂が付着し、粘土が大きく外にはみ出している。内面には緑色の自然釉が付着している。胎土は2mm大の小石をわずかに含む密なもので、色調は淡茶褐色を呈する。



第37図　T7SE1実測図

**焼土出土品**

298・299は土師皿である。298は口径約9.3cmを測る。口縁部をわずかに肥厚させている。端部にはタールが付着する。299は口径約12.8cmで、口縁部はナデにより外反させている。

**P5 出土品**

300は瓦質の土器である。器種は蓮瓶で、産地は奈良であると考えられる。脚の部分にあたり底径は約11.7cmを測る。胎土は密で、焼成は良好、薄灰色を呈する。底部から約3.5cm上に巴文に似た文様が押されている。

**P6 出土品**

301・302は土師皿である。301は口径約9.8cmを測る。302は口径約17cmを測る。口縁部を強くナデて端部を外反させている。

**P8 出土品**

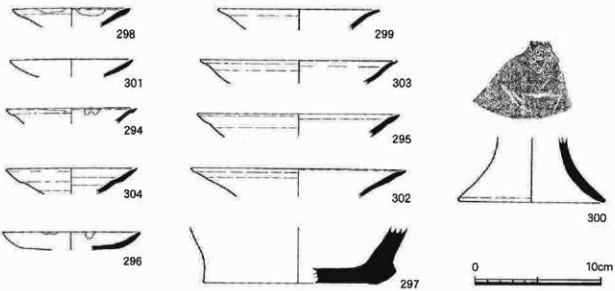
303 は土師皿である。口径約 15.3cm を測る。口縁部を強くナデて外反させる。

**P10 出土品**

304 は土師皿である。口径約 10.5cm を測る。体部に強い横ナデを施す。

2. 石製品（第 41 図）

305 は砥石である。残存長約 5cm、幅約 4cm、厚さ約 2.7cm を測る。3 面に磨り跡が残り、中砥と考えられる。白色の石材である。




**第38図　T7出土遺物実測図**

## 第７節　Ｔ８の調査

ｉ）層　　序

Ｔ８はＴ３の南側に設定した調査区で、調査前は山林で地表面の標高は約 293.2 mを測る。絵図の「上腸衆」の南側にあたるものとおもわれる。遺構は調査区を南北に縦断する溝と、全面で多数のピットを確認した。基本層序は、調査区北側で表土（15 ～ 20cm）、茶褐色砂質土（20cm）、黒色砂質土（20cm）、茶色砂質土（20cm）で暗茶色粘質土の遺構検出面になる。中央付近でもほぼ同じ層序で、調査区南端では表土（20cm）、茶色砂礫土（40cm）、茶褐色粘質土（25cm）、暗茶色粘質土（30cm）となる。遺構検出面は、北から南へ向けて傾斜しており、その比高差は約 300cm である。

ii）遺　　構（第 39 図）

1. 溝

SD1

調査区を南北に縦断する溝で、幅約 30 ～ 65cm、深さは遺構検出面より約 10 ～ 20cm を測る。溝の主軸はＮ 18° Ｗの方位をとる。埋土は茶褐色土の単層で、南側では 10 ～ 30cm の礫が堆積

している。土師皿の細片が出土した。

SD2

調査区の中央やや南寄りでＳＤ１から東に分かれる小溝で、幅約 20 ～ 50cm、深さは約 40 cm 前後を測る。遺物は出土していない。

2. その他の遺構

ピット

ピットは調査区全面で検出した。Ｐ１～Ｐ７は北側の調査区で検出したピットの一部である。円形または楕円形を呈し、直径約 40 ～ 60cm、遺構検出面よりの深さ約 25 ～ 55cm を測る。出土遺物は、Ｐ１で土師皿と擂鉢（306）、Ｐ２～４で土師皿（308・307）、Ｐ５で土師皿と擂鉢（309）、Ｐ７で土師皿（310）がある。Ｐ８～Ｐ 18 は調査区の南半分で検出したピットで、平面円形を呈する。直径約 20 ～ 50cm、遺構検出面よりの深さ約 20 ～ 45cm をはかる。出土遺物は土師皿（311 ～ 316）で、Ｐ 10 から擂鉢片（315）が出土している。

iii）遺　　物（第 40 図）

1. 土器類（第 40 図）

Ｔ８からは、土師皿、擂鉢が出土している。土師皿は、ほとんどが密な胎土をもち、焼成は良好である。色調は白茶色を呈するものが多い。このため胎土・焼成・色調については異なるものについてのみ記述する。

P1 出土品

306 は瀬戸の擂鉢の底部である。底径約 10.9cm を測る。擂り目は確認できない。胎土は密で、茶褐色を呈し、全体にススが付着する。

P3 出土品

307・308 は土師皿である。口径約 6.2cm と 6.6cm を測る。いずれも薄手で、作りの粗雑な小型品である。308 は底部中央を指により窪ませる。

P5 出土品

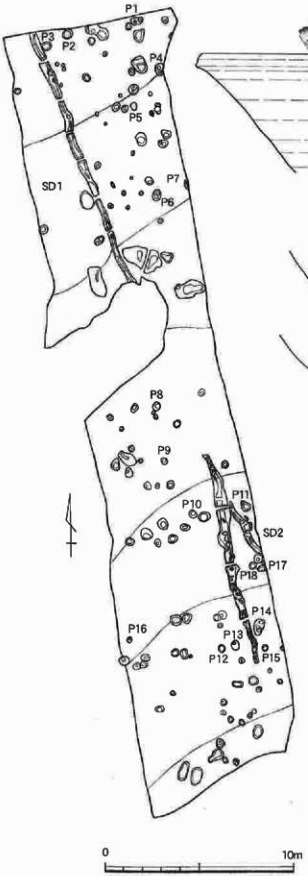
309 は瀬戸の擂鉢である。口径約 30cm を測る。擂り目原体は８本まで確認できる。胎土は 5mm 大の小石を含むものの密で、赤茶褐色を呈する。

P7 出土品

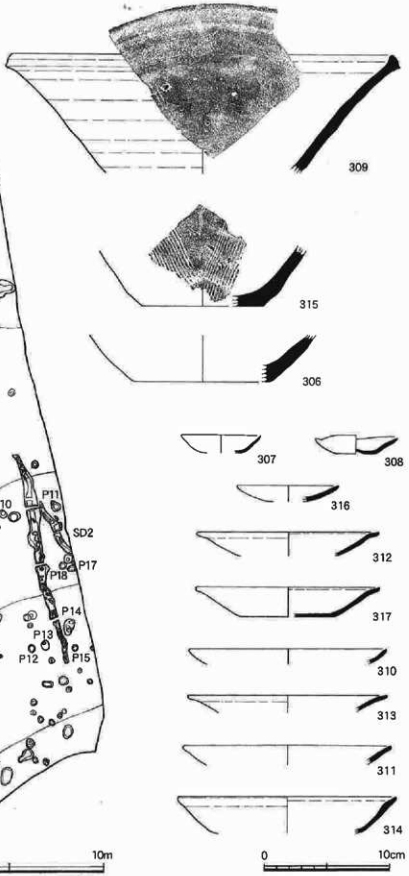
310 は土師皿で、口径約 15.7cm を測る。口縁部が内湾する器形で、色調は橙色を呈する。

P8 ～ 13 出土品

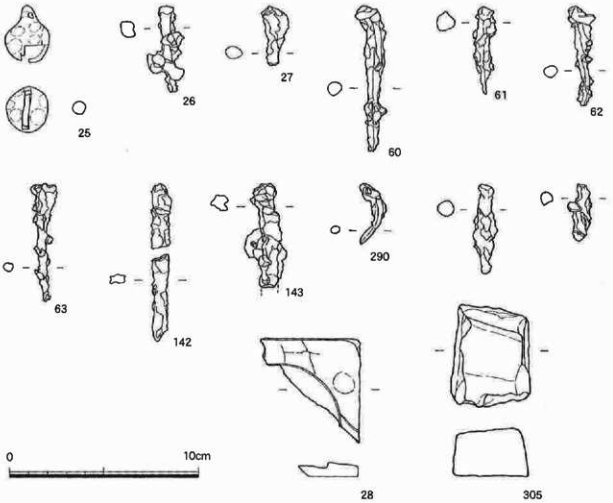
311 は土師皿である。口径約 16.5cm を測る。312 ～ 314 も土師皿でＰ９から出土した。口径は順に約 14.5・15.8・19.3cm である。312・313 は、口縁部をナデにより大きく外反させている。314 は器高の深い個体である。315 は擂鉢の底部である。底径約 9.5cm を測る。擂り目が２個所確認できる。擂り目原体は 13 本まで確認できる。胎土は密で、色調は明茶褐色を呈する。316・317 は土師皿である。316 は口径約 8.2cm を測る。作りの粗雑な小型品である。317 は口径約 14.7cm を測る。口縁部をナデにより外反させる。




第39図　T8遺構図




第40図　T8出土遺物実測図




第41図　土製品・釘・石製品実測図

# 第4章　まとめ

上平寺城跡遺跡群は、守護大名の居館と山城、家臣団屋敷、城下町がまとまって残り、全国的にみても第1級の遺跡であるとの評価をえてきた。

現況が山林や畑地で、地表面で遺構の状態を観察できる上平寺館・上平寺城・高殿地区（上平寺南館）の各遺跡に比べ、今回調査をおこなった城下町部分は、後世の開墾により水田化しており、地表面での遺構の確認はできなかった。近世の比較的早い時期の作といわれる『上平寺城絵図』（伊吹町役場蔵）は、居館部分や山城・重臣屋敷地の記載が現況とほぼ合致していることから、かなり信憑性の高い資料と考えられており、今回の調査地の該当部分である「市店民屋」についても、城下町的な遺構の存在が推定されていた。しかし、近年ようやく研究や調査の成果が蓄積されてきた上平寺城跡遺跡群のなかで、城下部分については散発的な試掘調査がおこなわれただけでまったく不明であった。

開発に伴う調査、記録保存という不本意な形ではあったが、今回の調査で検出された遺構や遺物は、城下遺構を示す貴重な資料であり、これらについて若干触れ、調査成果から考えられることを述べてまとめにかえたい。

**遺　物**

出土した土器・陶磁器の総数は約934片で、このうち図化できたのは約300点を数える。中世に属するものが全体の98％を占め、産地別にみると、素焼きの皿・耳皿といった土師質土器、常滑焼・瀬戸美濃焼・瓦質土器の国産陶磁と、青磁・白磁および一部の天目茶碗の輸入陶磁に分けることができる。中心になる時期は京極氏時代に一致する15世紀末から16世紀初頭の遺物である。

調査区全体から出土した土器の総体を第1表で示した。各調査区別でもほとんど同じ割合で出土しており、上平寺城跡遺跡群における、いわゆる外堀より外の城下部分の様相を示す資料になるものと考えられる。

最も多いのが土師質土器で全体の82％を占める。時期的には15世紀末～16世紀前半代で捉えられるとおもわれる。色調は白茶色が多く、焼成はややあまい。第3表は、比較的残りの良い資料を採り上げて口径を基準に集計したものである。5mm ごとの集計で、とびぬけて多いのが① 7cm 以上～ 7.5cm 未満で、次に多いのが

**第1表　上平寺遺跡出土土器組成表**

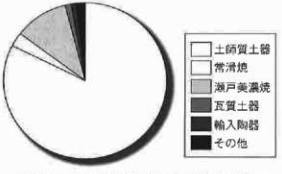
| | | | |
|---|---|---|---|
| 国産陶磁 | 土師質土器 | 皿 | 769片 (82.0%) |
| | | 耳　皿 | 1片 (0.1%) |
| | | 計 | 770片 (82.0%) |
| | 常滑焼 | 甕 | 27片 (3.0%) |
| | 瀬戸美濃焼 | 端反皿 | 6片 (0.6%) |
| | | 天目茶碗 | 28片 (3.0%) |
| | | 碗 | 3片 (0.3%) |
| | | 擂　鉢 | 37片 (4.0%) |
| | | 壺 | 14片 (1.0%) |
| | | 灰釉碗 | 4片 (0.4%) |
| | | 山茶碗 | 1片 (0.1%) |
| | | その他 | 7片 (0.7%) |
| | | 計 | 100片 (11.0%) |
| | 瓦質土器 | 火　鉢 | 10片 (1.0%) |
| | | 羣　瓶 | 1片 (0.1%) |
| | | 計 | 11片 (1.0%) |
| | | 小　計 | 908片 (97.0%) |
| 輸入陶磁 | 青　磁 | | 7片 (0.7%) |
| | 白　磁 | | 1片 (0.1%) |
| | 天目茶碗 | | 1片 (0.1%) |
| | | 小　計 | 9片 (1.0%) |
| その他 | 須恵器 | | 3片 (0.3%) |
| | 土師器 | | 2片 (0.2%) |
| | 近世陶磁 | | 12片 (1.0%) |
| | | 小　計 | 17片 (2.0%) |
| 合　計 | | | 934片 |

② 9cm 以上～ 9.5cm 未満となる。しかし、これは①のサイズが全体の半数を占めるＴ５ＳＤ１の土師皿集積遺構出土数を含んでいるためで、仮にこの特殊な遺構分を除くと第４表になる。ここでは、① 7cm 以上～ 7.5cm 未満、② 8.5cm 以上～ 9cm 未満、③ 14.5cm 以上～ 15cm 未満の３ヶ所にピークがみられる。①は作りが雑で、口縁部が波打っているものが多い。薄手で、内面は比較的平滑に仕上げ、体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。② 8.5cm 以上～ 9.5cm 未満は中型品とみられるもので、若干の大小がみられる。口縁部を横ナデにより外反させ、端部を小さく肥厚させる、内面底部と体部の屈曲部にナデ上げる際に生じた凹線がわずかに認められるなどの特徴がある。これらは、16 世紀前半の京都の土師皿の影響を受けて作られているものとおもわれる。③は大型品で、製作技法は②と同様である。

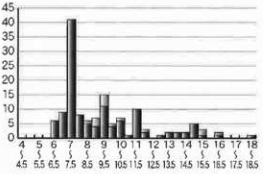
第５表は、平成 12 年度に県教育委員会が調査した上平寺南館遺跡で出土した土師質皿の集計表である。ほとんどが家臣団屋敷に付属する土塁の盛土中から出土したものである。ここでは① 6.5cm 以上～ 7cm 以上、② 9cm 以上～ 9.5cm 未満、③ 13cm 以上～ 13.5cm 未満にピークがみられる。

今回の調査および、上平寺南館遺跡の調査から、小中型品については、6.5cm 以上～ 7.5cm 未満、8.5cm 以上～ 9.5cm 未満という二つの法量が捉えられる。大型品は個体数が少なく若干の大小がみられるが、13cm 以上～ 15cm 未満あたりが中心である。

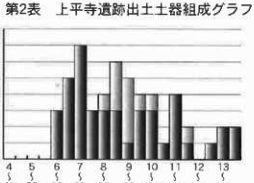
これら多量の土師皿の用途については、灯明皿と酒杯、大きいものは盛り皿などが考えられる。タールの付着などにより明らかに灯明皿として使用されていたものは第４表のとおりである（色のうすい部分）。8cm 以上～ 10.5cm 未満に多くが集中し、11.5cm 以上～ 12cm 未満、15cm 以上～ 16.5cm 未満にも若干みられる。特に 8.5cm 以上～ 9.5cm 未満と、個体数は少ないものの 15cm 以上～ 16.5cm 未満では、半数以上にタールが付着しており、灯明皿に利用される土師



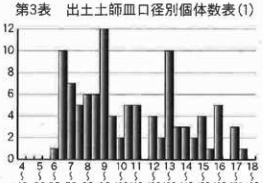

第2表　上平寺遺跡出土土器組成グラフ




第3表　出土土師皿口径別個体数表(1)




第4表　出土土師皿口径別個体数表(2)




第5表　上平寺南館遺跡出土土師皿口径別個体数表

皿の規格性がうかがえる。いずれにしても、土師皿は、武家の儀式や宴会で不可欠なものであり、京極氏の権勢をあらわす器である。今回、城下町部分で大量に出土したことは、上平寺全体の都市的消費生活を示しているものといえる。

甕は常滑焼、擂鉢は瀬戸美濃系のものがほとんどを占める。天目茶碗はT８以外全てのトレンチで出土した。T５SD１から出土した181は輸入品で、中国河南地方のものであろう。輸入陶磁は出土品総数の１%を占めるに過ぎない。青磁は全て細片で図化しうるものはほとんどなかった。白磁はT３で出土した伝世品と見られる１点（40）だけで、絵図の「上腸乗」屋敷の一部と考えられるT３が、他のトレンチとは違う特殊性もつ可能性を示す資料である。

その他の遺物としては、漆器椀・釘・鉄鎌・古銭・石臼・硯・砥石がある。釘は全体で10点出土している。調査面積からすると少ないが、数点出土している焼けた壁土とともに建物の構造を考えるうえで貴重な資料である。石臼については、黒雲母が連なる花崗岩の石質、上臼の皿の窪みが浅く供給口が長方形であるなどの特徴から、伊吹町曲谷産のものと考えられる。曲谷では鎌倉時代末から南北朝時代にかけて板碑や宝篋印塔を作っており、以後連綿として石材加工に取り組んでいる。曲谷産石臼は小谷城（湖北町・浅井町）や菩提山城（岐阜県垂井町）で確認されている。筆者はかつて、近江において石臼が城館や有力集落に普及したのは遅くても1570年代であろうと考えた。今回の調査で、５点以上の資料が出土したが、上平寺城下の廃絶が1523年であることを考えると、16世紀前半には普及していた可能性がある。ただし、石臼は全て井戸内からの出土で、これを埋めるために投げ込まれたと考えられる石に混じって出土しており時期が下ることも考えられたが、平成12年度末に京極氏館跡庭園でも上臼を採集したことから、石臼の普及を16世紀前半に遡ってもよいと考える。

**遺　構**

今回の発掘調査で確認した遺構は下記のとおりである。

T2　SK1～3、ピット群

T3　SK1～3、ピット群

T4　SB1（2間×3間）、SB2（2間×2間以上）、SB3（2間×3間）、SB4（2間×2間）、SB5（2間カ×3間）、SB6（4間以上×1間以上）
SD1・2、SE1、SK1～3、ピット群

T5　SB1（2間×2間）、SB2（4間×3間）、SD1・2、SE1～3、SK1～8、ピット群

T7　SB1（1間×3間）、SD1、SE1、SK1～4、焼土、ピット群

T8　SD1・2、ピット群

調査地は、T２調査前の標高約293.94ｍからT６の標高約285.63ｍまで、比高差約831cmを測る扇状地扇頂部の棚田である。検出した遺構面の地区割りも現状の水田より50～100cm下で階段状に並ぶ6段の削平地で、ひとつひとつが屋敷空間であるとおもわれる。各トレンチともに多くのピットを確認し、平成11年6月におこなった現地説明会では約17棟の掘立柱建物を報告したが、図面等を精査した結果、本報告ではとりあえず9棟を記載した。T２やT３でも建物跡を構成するとおもわれるピットがあるが判然としないために割愛した。また、T４・T５についても同様である。

遺構の状況や出土遺物から、Ｔ３は『絵図』の記載の「上鵜梁」（屋敷）に該当すると考えられる。柱穴の平面は円形または楕円形で直径が65～100cm を測る大型のものが12基前後あり、柱痕を確認できるものもある。Ｔ４で一部同様の柱穴を確認しているが、総じて他のトレンチのものより大規模である。また、唯一出土した伝世品とみられる白磁もここから検出しており、この調査区の住人が他の調査区と異なる階層に属す可能性も考えられる。

Ｔ２・Ｔ４・Ｔ５・Ｔ７は、『絵図』の「大手道」に対して並ぶ短冊形地割の屋敷地で、遺構を検出しなかったＴ４の上段は、後世の開墾により削平を受けているものと考えられる。

建物遺構は全て掘立柱建物で、礎石を用いたものはない。溝や土坑にも石を用いた遺構はまったくみられなかった。平成12年度に調査した上平寺南館遺跡（高殿地区）の若宮氏屋敷と推定される削平地では、門または築地跡と考えられる石垣遺構および、建物礎石の一部を確認していることから、京極氏館や重臣屋敷などでは礎石建物が検出される可能性が高く、城下部分と建造物の構造にちがいがあるものと推定される。

今回検出した掘立柱建物の主軸の方位は、Ｗ6°～10°Ｓの方位を示すＴ４のＳＢ１～４と、Ｎ18°～28°Ｗを示すＴ４のＳＢ５、Ｔ５のＳＢ１、Ｔ７のＳＢ１に分けることができる。方位に幅が大きいことから、ここではすくなくとも二時期以上が存在するという指摘に留めたい。

井戸は全体で５基検出した。規模や作りは同じで、Ｔ７のＳＥ１のみ深く、底に桶が埋め込まれていた。屋敷区画ひとつに１基が付属しているようである。上坑には、一部共通点がみられるものがある。例えば、①Ｔ３のＳＫ１・3、Ｔ４のＳＫ１のように230cm 以上×120cm 以上の隅丸長方形の土坑で、焼土や礫が入っているもの。②Ｔ５のＳＫ１やＳＫ7・8のように少し規模の小さい隅丸長方形で粘質の黒色土が入っているもの。③Ｔ５のＳＫ5・6のように平面三角形で、深く掘り込まれ、特にＳＫ６のように断面フラスコ状に掘られているものなどである。①は、屋外で火を使う施設、②は屋敷に付属するトイレ遺構、③は貯蔵穴などの用途が推定できそうだが、詳細は不明である。

Ｔ５およびＴ７で検出したＳＤ１は、西側の重臣屋敷がある尾根の落ち際を南北に流れたあと、Ｔ７で東西方向に向きを変え、幅約５ｍの堀状になる。これより南では遺構を検出しなかったことから、屋敷地部分の南端を区画する堀であった可能性が考えられる。

以上のように、今回の調査で上平寺城下の地割や屋敷構成がうかがえる遺構が出土したことで、『絵図』に描かれた城下町の存在を裏付ける結果を得られた。今後、今回の調査区以外の広がりを確認することによって、さらに明らかになるものと考えられる。

上平寺城下町は、京極高清が一族の内紛を収め、北近江を改めてまとめた西暦1500年前後に、伊吹山南麓の上平寺に居館を構築したのにともない形成された。近江においては、六角氏の観音寺城の城下町石寺（安土町）が、16世紀に形成され（文献上の初見は天文18(1549)年）、北近江浅井氏の小谷城下町は、上平寺城下に続くもので、今回の検出遺構は、近江における最古級の城下遺構であり、全国的な視野でみても、中世都市研究の重要な資料になるとおもわれる。

# 第2部　寺　林　遺　跡

# 第１章　遺跡の環境

**周辺の遺跡**

寺林遺跡は、第１部で取り上げた上半寺遺跡の南側に位置しており、遺跡周辺の地形は第１部第１章で述べたとおりである。また、同章では町内の遺跡の概要についても紹介しているので、ここでは、寺林遺跡の中心である古代に焦点を当てて遺跡周辺の歴史的環境について概観してみたい。

寺林遺跡がある伊吹山西南麓（伊吹山南麓扇状地および山東盆地）の遺跡群で、奈良時代から平安時代の重要な遺跡としては、伊吹町の高番遺跡、山東町の北方田中遺跡、西代遺跡、上向川遺跡、菅江遺跡などがある。また、県境を挟んで東に位置する関ケ原盆地には不破関跡（岐阜県不破郡関ケ原町）がある。寺林遺跡から北方田中遺跡まで直線距離で約6km、不破関跡までは約4kmを測る。高番遺跡は、平成２～３年度にかけてほ場整備事業に伴う調査を伊吹町教育委員会でおこなった。遺構は不規則なピットと土坑、自然流路を確認したのみであるが、8世紀末から９世紀初めを中心とする土師器と須恵器が出土した。北方田中遺跡は、昭和59年度に県営ほ場整備に伴う調査が県教育委員会・(財)県文化財保護協会によって実施されており、奈良時代末の掘立柱建物11棟、平安時代の掘立柱建物14棟や溝、四脚門跡などが検出されている。建物の配置や大型の掘り形をもつ建物遺構、円面硯や木簡などの遺物から、この地方の郷長の役所・屋敷跡と推定されている。西代遺跡は、昭和63年度に県営ほ場整備に伴う調査が山東町教育委員会によって実施されており、明瞭な遺構は検出されなかったものの、古墳時代前期から平安時代にかけての遺物が出土している。なかでも須恵器は、同地域内の菅江遺跡のもので需要と供給の関係が見られた。また、当遺跡でも円面硯が出土しており、南西約300mに位置する北方田中遺跡との関連性が注目されている。上向川遺跡は、昭和61年に県営ほ場整備に伴う調査が山東町教育委員会によって実施され、奈良時代から平安時代の掘立柱建物12棟が検出されている。菅江遺跡は菅江土砂採取事業に伴う調査が山東町教育委員会により実施されており、奈良時代の須恵器窯１基、灰原が２カ所検出されている。このような窯跡が横山丘陵の東側に広がっているようだ。

不破関は、北陸道の愛発関（越前）、東海道の鈴鹿関（伊勢）と並んで、東山道の要衝地に築かれた律令三関の一つである。昭和49年から52年にかけて不破関跡調査委員会が結成され、５次にわたる発掘調査が実施された。関城は、西の藤古川と北・東・南の土塁に囲まれた面積約10㌶の台形状で、東山道が関の南三分の一付近を東西に通ることが確認された。不破関の造営は壬申の乱（672）が一つの契機であったという説がとられている。発掘調査の結果、外郭土塁の構築や内郭の整備は８世紀中葉であると考えられている。また、『関ケ原町史』には、不破関から北へ抜けるルート上にある「小関」（関ケ原町小関）の存在が、東山道の防衛とともに重要であることが述べられている。小関からさらに北東へ1.5km行くと、壬申の乱の際に戦場となった玉倉部邑（関ケ原町玉）がある。近江朝軍は、伊吹山麓の寺林・藤川方面から、大海人軍の側面を衝こうとして撃退されている。このことは、関ケ原・小関・玉から藤川・寺林、さらに浅井・木之本へ至る、中世以降整備された旧道（江戸期から近代にかけて北国海道、北国脇往還などと呼ばれる）が、古代においても重要な役割を果たしていたことが伺える。

## 北国脇往還（北国海道）の概要

遺跡が所在する寺林集落は、北国脇往還の存在を抜きに語ることはできない。ここで、若干この旧道についてまとめてみたい。時代的背景は、今回の調査から遙かに後世ではあるが、遺跡の地理的な立地を考える上で有益であると考える。

中山道関ケ原宿で分岐し伊吹町を経由して北陸に通じるこの街道は、木之本宿で、中山道烏居本宿から分岐して米原・長浜経由で北上してきた北国街道に合流する。この街道は東海地方と北陸地方を最短距離で結び、古くから盛んに利用されてきた。古代においても重要であった可能性があることは前述したとおりである。現在、一般に「北国脇往還」の名称が用いられ、脇道のように見られがちであるが、『東浅井郡志』にも「名は北国脇往還といふと雖も実は北国街道（米原・長浜経由）よりも顕著なる交通路線たりしなり」と記されている。現在、旧道をほぼ踏襲する広域農道（町道藤川相撲庭線）は、伊勢湾・東海地方と若狭湾・北陸地方を結ぶ最短ルートとして、昼夜頻繁に長距離トラックが行き交う。

また、北国脇往還には、江戸時代の五街道同様一里塚があり、人馬継ぎ立てが行われ、御定人馬賃銭が規定されていた。さらに、北陸・湖西の大名行列も多く通過したことから、本陣・脇本陣が置かれ、助郷も指定されていた。伊吹町内には春照宿と、寺林を含む藤川宿が置かれていた。

藤川宿を発し北へ向かう北国脇往還は、寺林集落の中を東西に通過する。『上平寺城絵図』には、下端に越前街道（北国脇往還の前身）が描かれており、16 世紀前半に京極氏の城館が上平寺にあったころ、寺林は街道に沿った町屋的な集落であったと思われる。明治 5 年の記録では全 35 戸のうち、茶店 3、酒屋 3、造酒屋 1、紺屋 2、油屋 1、古物商 1、炭薪問屋 2、医師 3 となっており、村の半数が商いに取り組んでいる。このことから、寺林が藤川の宿場町の一角を為していたことが伺える。

このように、本地域は、東海と北陸を結ぶ要衝であり、東国と畿内を結ぶ東山道（中山道）にも近いなど、東西交通の要衝として重要な位置を担っているのである。

〈参考文献〉


滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会『寺林遺跡』 中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書 1-3

伊吹町教育委員会『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅰ』 伊吹町文化財調査報告書第 4 集

滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会「坂田郡山東町東良遺跡（北方山中遺跡）」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ Ⅱ－6』

山東町教育委員会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書　西代遺跡』山東町埋蔵文化財調査報告書

同　『上向川遺跡発掘調査報告書』山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

同　『菅江遺跡発掘調査報告書』山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

伊吹町史編さん委員会『伊吹町史　通史編上』伊吹町

関ケ原町『関ケ原町史　通史編上巻』

# 第２章　発掘調査の経過

## 第１節　調査に至る経過

寺林遺跡の調査も、特定地方道路町道寺林上平寺線改良工事に伴うものである。工事の概要については、第１部第２章第１節でふれたのでここでは省略する。

工事対象地区周辺では中山間地域総合整備事業に伴うほ場整備が計画されていた。試掘調査はこの事業に伴い、(財)滋賀県文化財保護協会によって実施された。現況は棚田状の水田が広がっており、切り土の規模が非常に大きく広範囲にわたるため、遺構の広がりおよび深さを確認するために、切り土部分において試掘調査が実施された。その結果は次章に述べるとおりであるが、2ｍ×3ｍ規模のトレンチを153ヵ所設定され、その内切り土部分58ヵ所においてピット等の遺構および遺構面が検出された。

この試掘調査の範囲内に、町道改良工事区域が入ることから、今回の調査では、この結果に基づいて調査個所を設定した。

なお、第１部で報告した上平寺遺跡は、約200ｍ北側に位置する。

発掘調査対象面積は、約2,860㎡（平成９年度610㎡、10年度520㎡、平成11～12年度1,730㎡）である。調査区の番号をつけるにあたっては、調査の順番に応じて数字で示すこととした。また、各遺構番号は、各調査区ごとで完結することとした。

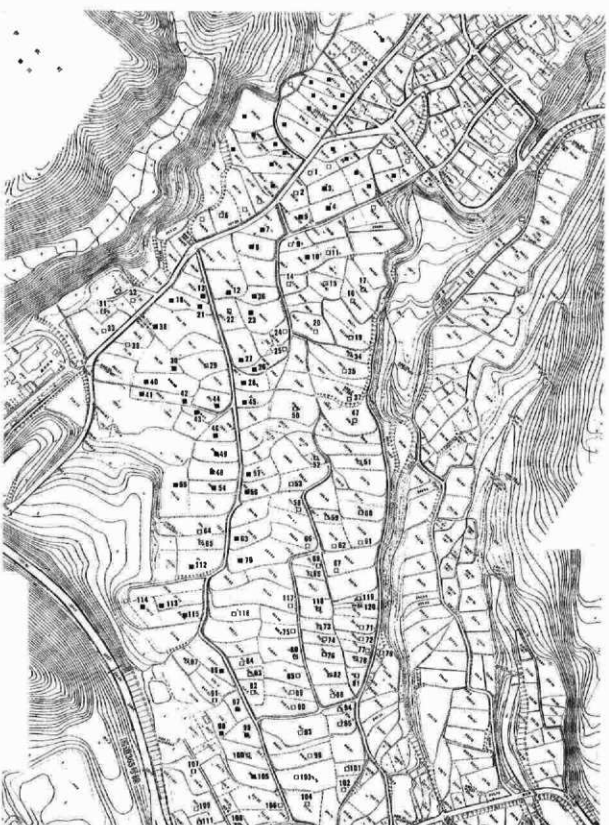
調査は、重機により耕作土と床土以下に分けて遺構面直上まで除去したのち、作業員による遺構の検出と遺構内の掘削、遺物の検出をおこない、写真撮影と実測図の作成により記録した。発掘調査期間は、平成９年度は平成10年２月４日～３月31日。平成10年度は平成10年４月３日～５月14日。平成11年度は、平成11年12月９日～平成12年３月28日。平成12年度は、平成12年４月６日～６月７日である。

## 第２節　試掘調査の結果

ここで記述する試掘結果については、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『寺林遺跡』(2000年３月刊行）の「第３章　試掘調査の結果」を引用する。

調査の結果、基本層序として暗褐色土（耕作上）の下層に茶褐色土が堆積し、次いで暗黒褐色土、淡黄色上が確認された。遺構は、平面および断面の観察により暗黒褐色土層から切り込んでいることが確認できた。このことにより、暗黒褐色土層上面において遺構面が存在している可能性が高いと判断できた。Ｔ３、５、７、８、12、13、18、21、23、26、27、28、29、30、36、38、40、41、42、43、44、45、46、48、49、53、55、56、57、63、70、86、98、99、112、120の36ヶ所で遺構および遺構が存在すると思われる面を検出した。これらのトレンチは、調査対象地域の町道予定地西側を中心に広がりを見せている。(以上引用)

また、上平寺遺跡調査に伴う試掘調査では、今回の発掘調査区Ｔ11、12において遺構および遺構面が検出されている。




**第42図　試掘調査ピット配置図**
（『寺林遺跡』2000に加筆）

第43図　発掘調査区位置図(1:3,000)
(『寺林遺跡』2000に加筆)

太字が今回の調査区
細字は県調査区

# 第３章　発掘調査の結果

## 第１節　Ｔ１の調査

ｉ）層　　序

Ｔ１は、町道の南側に設定した調査区である。この調査区の東西には、中山間総合整備事業に伴い同時進行的に実施されていた（財）県文化財保護協会の発掘調査区Ｔ２、Ｔ５がある（滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会『寺林遺跡』2000 参照＝以下県の各調査区は「県調査区Ｔ○」と記す）。

調査前の地表面の標高は 266.70 ｍを測る。遺構は、大型のピット３基をはじめとして若干のピットを検出している。調査区の東側は、大きく掘り込まれており溝状を呈する。検出面は淡黄色砂礫土（地山）である。基本層序は、耕作土（15 ～ 25㎝）、茶色土、黒色土、淡黄色土である。

ii）遺　　構（第 44 図）

1. 溝

SD1

調査区東側を占める溝状遺構で、調査区内での最大幅約８ｍを測る。南東に位置する県調査区Ｔ３の砂礫土層に続き、藤古川に向かって落ちている。遺構検出面よりの深さは 20 ～ 40㎝を測る。中央付近の斜面にＰ３があるほか、調査区東端で６基のピットが集中していた。埋土は溝の北側で茶褐色土、淡黄色砂礫土（地山）。南側で黒色土、淡黄色砂礫土（地山）である。遺物は出土しなかった。

2. その他の遺構

P1

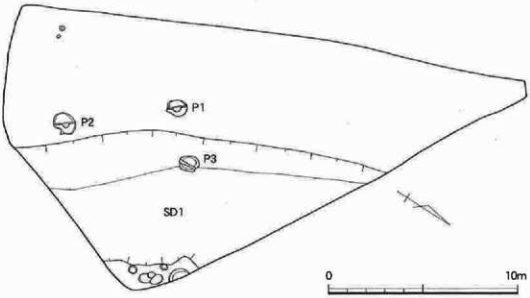
調査区の中央付近で検出した大型のピットである。東側にはＰ３がある。長軸約 100㎝、短軸が約 85㎝ を測る楕円形を呈している。深さは、遺構検出面より約 67㎝ を測る。中央付近に直径約 30㎝ の円形の柱痕を検出した。堀方の埋土は、上から細かい砂混じりの黒色土、黒色土、黒茶色土である。底部近くに直径 30㎝ 大の石が置かれていた。遺物は出土していない。

P2

Ｐ１の南約５ｍのところで検出したピットで、東側はＳＤ１の肩になる。直径約 120㎝ を測る円形をしている。遺構検出面よりの深さは約 42㎝ を測る。中央に直径約 45㎝ の円形の柱痕を検出した。堀方の埋土は、上から細かい砂混じりの黒色土、黒色土、黒茶色土である。遺物は出土していない。

P3

Ｐ１の東側約２ｍで検出したピットで、ＳＤ１の落ち際に位置している。長軸約 105㎝、短軸が約 80㎝の楕円形を呈している。遺構検出面よりの深さは約20㎝を測る。Ｐ１の検出面からは深さ約 30 ㎝を測り、元は落ち込みの埋土上に掘り込まれた柱穴と考えられる。埋土は黒茶色土である。




第44図　T1遺構図

iii）遺　　物（第48図）

寺林遺跡出土の土器類には、古代から近世に至る時代のものが含まれている。このうち大部分を占めるのは、古代に属す土師器・須恵器である。本書における遺物の記述は、各調査区ごとに土器類・金属製品・石製品の順で取り上げる。

1. 土器類（第48図）

T１では、包含層で須恵器が１点出土している。１は須恵器坏の底部断片である。底径約7.5㎝を測る。平底で体部屈曲部より少し内側に入ったところに、断面台形の低い高台が貼り付けられている。

## 第２節　T２の調査

i）層　　序

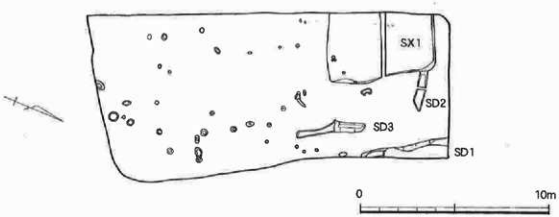
T２は、T１の南に設定した調査区である。東側には県調査区T３・T４がある。調査前の地表面の標高は約266.13ｍを測る。遺構は方形の落ち込み状遺構、T１のSD１から続く溝の肩部、その他の溝とピット群を検出している。基本層序は、調査区全体に耕土が約30㎝ あり、黒色土（約30～40㎝）、淡黄茶色土（地山）である。調査区の南端では、耕土、黒色土、茶褐色土の順となる。地形の傾きは北側から南側に向けて低くなっている。北側と南側の高低差は約45㎝を測る。

ii）遺　　構（第45図）

1. 溝

SD1

調査区の北東端で検出した溝である。T１のSD１から県調査区T３へ続く溝の西側の肩にあたる。幅約20～110㎝で、遺構検出面よりの深さ約20～30㎝を測る。埋土は拳大の礫を含む茶褐色砂礫土である。出土遺物は土師皿（2）がある。




第45図　T2遺構図

**SD2**

ＳＤ１の西側に位置する溝で、ＳＸ１に切られた形で検出した。幅約 40 ～ 50cm で、遺構検出面よりの深さ約５～ 15cm を測る。埋土は茶灰色土である。

**SD3**

ＳＤ１の南側で検出した南北溝で、幅約 30 ～ 50cm、深さ約 10cm を測る。埋土は茶灰色土である。位置・形状・埋土からＳＤ２から続く溝とおもわれる。

2. その他の遺構

**SX1**

調査区北西で検出した方形の浅い落ち込み状遺構である。南北約 525cm、東西約 370cm で、西側については調査区の外に続いているため不明である。遺構検出面よりの深さは約２～ 15cm を測る。埋土は黄褐色土である。遺構内南東で直径約８～ 15cm の５ヶ所のピットを検出した。いずれも浅く、柱穴とおもわれるものはなかった。出土遺物は、須恵器片４点があるが、いずれも小片のため図化し得なかった。遺構の性格は不明である。

**ピット群**

ピットは、調査区の中央付近から南側で検出した。ほとんどのピットの埋土は、暗黒褐色土である。平面円形を呈するものが多く、直径約 15 ～ 50cm を測り、30cm 前後のものが多い。遺構検出面よりの深さは５～ 15cm を測る。

ⅲ）遺　　物（第 48 図）

1. 土器類（第 48 図）

Ｔ２からは、須恵器と土師皿が出土している。図化できたのは２点である。

**SD1 出土品**

２は土師皿である。口径約 11.3cm を測る。胎土は密で、焼成は良好である。薄白茶色を呈する。中世に属す遺物である。

**包含層出土品**

３は須恵器の坏身である。口縁部の破片で、口径約 14cm を測る。端部をナデてわずかに外反させる。

## 第3節　T3の調査

i）層　　序

T3は、T2の南に設定した調査区である。この調査区の北東には県調査区T4がある。調査前の地表面の標高は265.07mを測る。遺構は、掘立柱建物2棟、土坑およびピットを検出している。基本層序は、調査区全体に耕作土（約30cm）、黄茶色土（約5～30cm）、黒色土（約15～25cm）、淡黄色土（地山）である。地形の傾きは北側から南側に向けて低くなっている。北側と南側では約55cmの高低差を測る。

ii）遺　　構（第46図）

1. 掘立柱建物

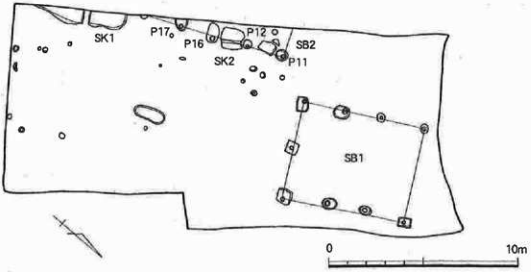
SB1（第47図）

調査区の北側で検出した2間（6.3m）×3間（4.7m）の掘立柱建物で、建物の主軸はN30°Wの方位をとる。検出された柱穴の堀方の平面プランは、長軸65～80cm、短軸50～65cmの隅丸方形と、長径65～80cm、短径50～70cmの楕円形および直径45cmの円形である。遺構検出面よりの深さは12～30cmを測る。柱痕は、直径25～35cmの円形を呈する。埋土は、基本的に上層が黒色砂質土、下が茶色粘質土である。

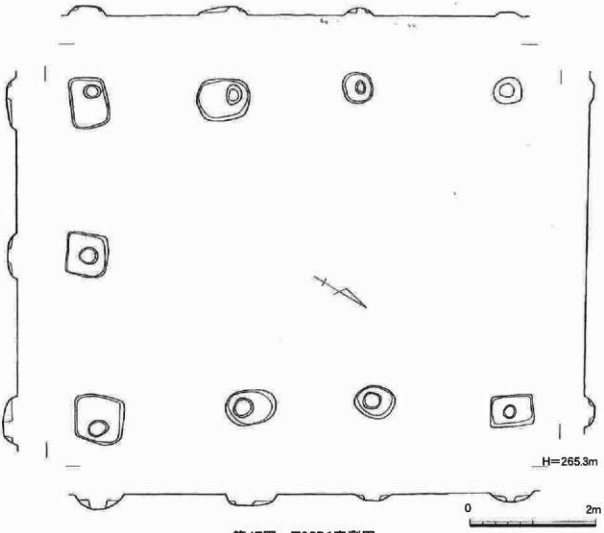
SB2

調査区の西側で検出した1間以上×3間以上とおもわれる掘立柱建物で、建物の主軸はN24°Wの方位をとる。検出された柱穴の堀方の平面プランは、直径45～60cmの円形を呈するものが主体である。遺構検出面よりの深さは20～35cmを測る。柱痕は、直径15～25cmの円形を呈する。埋土は、基本的に上層が薄茶色土、下が黒色土である。

出土遺物は土師器の坏・皿（7）と壺片、須恵器の坏（4～6・8・9）がある。




第46図　T3遺構図




**第47図　T3SB1実測図**

2. 土坑

SK1

調査区の南西で検出した南北に長い土坑である。最大幅約 90cm で、遺構検出面よりの深さは 35cm 前後を測る。西側については調査区の外に続いているため不明である。埋土は黒褐色土である。土師器の甕（10）の破片が多く出土したほか鉄製品（18）が出土した。

SK2

ＳＢ２に切られた形で検出した長軸 120cm、短軸 110cm の隅丸方形を呈する土坑である。深さ約 20cm を測る。埋土は茶褐色土である。

出土遺物は、土師器の皿（11）と甕片、須恵器の坏（12～14）がある。

ⅲ）遺　　物（第 48 図）

1. 土器類（第 48 図）

**SB1 出土品**

4は須恵器の坏身である。底部の破片で、高台は付かない。底径は約 8.7cm を測る。底部外

面はナデ調整を施し、内面は方向を定めずナデが施されている。P 11からの出土である。5・6は須恵器の坏蓋である。5はつまみ部の断片で、中央が外側に張り出した扁平な形状をしている。色調は橙茶褐色を呈する。6も天井部の断片で、5同様のつまみをもつ。天井部からやや丸みを帯びて口縁部に至る。P 12から出土した。7は土師器の皿である。口縁部の小片で、口径約19.5cm、器高約1.1cmを測る。口縁端部はナデにより小さく外反させる。また、口縁部内側に斜めの暗文を施している。2mm大の小石をわずかに含むものの胎土は密で、焼成も良好である。色調は赤茶色を呈する。8は須恵器の坏蓋である。口径約20.2cmを測る。つまみ部を欠く破片である。比較的平坦な天井部からなだらかに口縁部に至り、端部を丸くおさめる。全体にやや摩耗している。9は須恵器の坏身で、口縁部の小片である。口径約14cmを測る。口縁端部をナデて尖らせる。7～9はP 17から出土した。

**SK1 出土品**

10は土師器の甕である。口径約25.8cmを測る。くの字状にくびれる頸部を持ち、口縁部でわずかに内湾し、端部を面取りしている。調整は、口縁部を横ナデ、体部内面は全体に斜め方向のハケを施す。外面は横ハケのあとに、斜めハケが施されている。胎土、焼成とも良好で、薄茶褐色を呈する。口縁部内面にススが付着する。

**SK2 出土品**

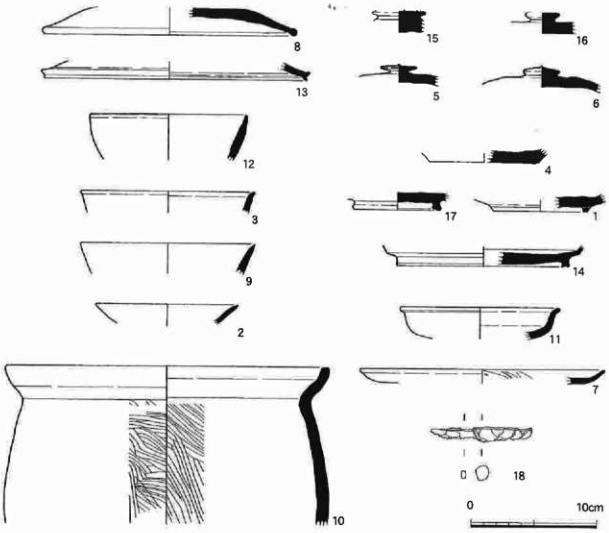
11は土師器の皿である。口径は約12.6cmを測る。体部は、底部から丸く内湾しながら立ち上がり、口縁端部で大きく外反させる。内面は横ナデが施されている。13は須恵器の坏蓋である。口縁部の小片で、口径は約20cmを測る。端部を上下につまみ出している。14は須恵器の坏身である。体部を欠き、高台径約13.6cmを測る。高台から少し張り出したところで、屈曲して体部が立ち上がる。屈曲部には明瞭な稜が生じている。底部外面はヘラ削りを施し、内面はナデ調整で仕上げる。高台の接地面は、わずかに内外へ張り出している。おそらく外反する体部を持つものとおもわれ、「さはり」のような金属器をまねた可能性がある。

**包含層出土品**

15・16は須恵器の坏蓋である。ともにつまみ部分のみを残している。15は大きく扁平なもので、径約4.3cmを測る。17は坏身の底部で、高台は外側で接地する。

2. 金属製品（第48図）

18は鉄製品で、長さ約8cm、幅約0.8cm、厚さ0.2～0.3mmを測る。刀子とおもわれる。SK 1から出土した。

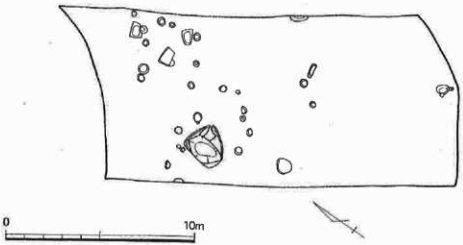



**第48図　T1～3出土遺物実測図**

## 第４節　Ｔ４の調査（第 49 図）

Ｔ４は、Ｔ３より水田２枚をはさんで南に位置する調査区である。Ｔ３との間の水田は、県調査区Ｔ６･Ｔ７である。南には隣接して県調査区Ｔ９がある。調査前の地表面の標高は 262.64 mを測る。遺構はピットと風倒木痕を検出したのみである。基本層序は、調査区北側では耕作土（約 30㎝）、直下に茶褐色土（遺構検出面）があるが、南側では暗灰色土（約 60㎝）、黒色土（約 25㎝）、茶褐色土（遺構検出面）である。遺構検出面は、北から南に向けて傾斜しており、その比高差は約 100㎝ である。

遺物は出土しなかった。



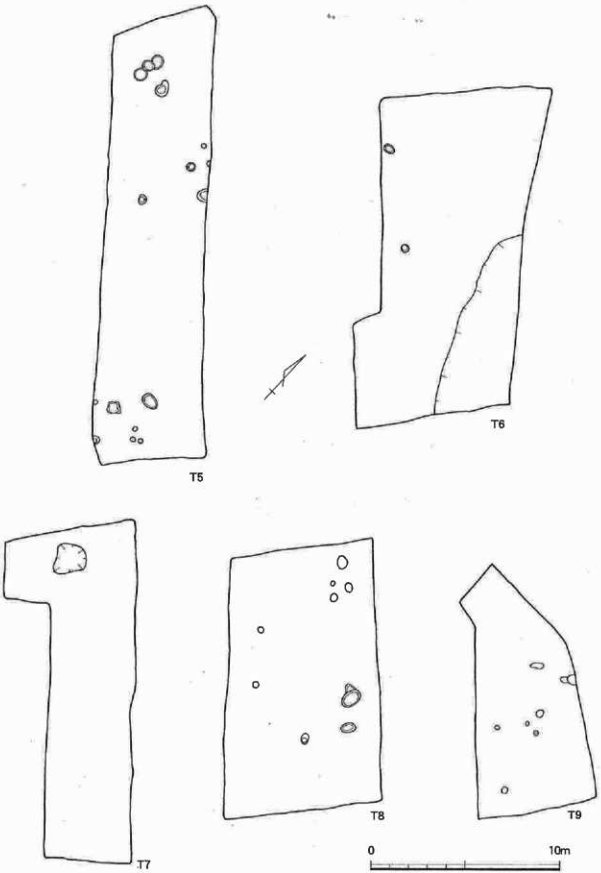

第49図　T4遺構図

## 第5節　T5からT10の調査（第50図）

T5からT10は、調査対象範囲の南端から発掘調査を進めた一連の調査区である。いずれの調査区も北から南へ向いて傾斜しており、北側では耕土直下で遺構面または遺構面とおもわれる層を検出した。

T5は、全調査区域の南端に設定した調査区である。調査前の地表面の標高は253.52mを測る。遺構は若干のピットを検出したのみである。基本層序は調査区全体に約15～25cmの耕土があり、北側では直下に黄茶色土の遺構面となる。南側は茶褐色土（約8cm）、黒色土（約55cm）、茶褐色土（約8cm）、茶色土（約13cm）、黄茶色土（遺構面）となる。調査区南北の比高差は約65cmである。T6は、T5の北に接して設定した調査区で、調査前の地表面の標高は254.25mを測る。南東端は傾斜して砂礫土が堆積している。南西壁面での基本層序は、耕土（約20cm）、茶褐色土（約10cm）、黒色土（約40cm）、暗茶色土（約15cm）、黄茶色土（遺構面）で、地形は南東に傾斜している。T7では、不成形の落ち込み以外に遺構を検出しなかった。調査前の地表面の標高は254.96mである。中央および南西壁面での基本層序は、耕土、茶褐色土、黒色土である。調査区南北の比高差は約70cmと大きい。T8は、T7の北に接して設定した調査区で、調査前の標高は256.3mを測る。遺構は若干のピットを検出したのみである。調査区南東壁面での基本層序は、耕土（約15cm）、茶褐色土（約15cm）、黒色土（約35cm）、暗茶色土（約15cm）、黄茶色土（遺構面）で、調査区南北の比高差は約60cmである。T9は、T8の北に水田1枚をはさんで設定した調査区である。遺構は若干のピットを検出したのみである。南東壁面での基本層序は、耕土、茶褐色土、黒色土、黄茶色土である。T10は、県調査区T10の南に隣接して設定した調査区で、地形は大きく傾斜しており、遺構は検出しなかった。

遺物は、いずれの調査区からも出土しなかった。各調査区で検出したピットの性格や、調査区域の北側で検出した掘立柱建物群との関連については、不明といわざるを得ない。




第50図　T5～T9遺構図

## 第6節　T 11 の調査

i）層　　序

T 11 は町道の北側に設定した調査区である。調査前の地表面の標高は 268.64 mを測る。遺構は、3 木の溝とピットを検出している。溝からは、土師器・須恵器を中心に多量の遺物が出土した。約 30 ～ 50cm の耕土の下層は、淡黄色土（遺構面）である。地形の傾きは北側から南側に向けて低くなっている。北側と南側では約 60cm の比高差を測る。

ii）遺　　構（第 52 図）

1. 溝

**SD1**（第 51 図）

調査区の中央で検出した南北溝である。幅約 75 ～ 250cm を測る。遺構検出面よりの深さは、北側で約 10 ～ 20cm、中央付近から南側で 30cm 前後で、断面形は浅い皿状を呈している。北側でＳＤ２が合流している。Ｎ 30°Ｗの方位をとる。埋土は黒色土で、全体に 5 ～ 30cm 大の礫が多く混じる。土師器甕片、須恵器坏身（19 ～ 28）と壺（29）の他、須恵器の甕片多数、灰釉陶器（30・31）、瀬戸美濃端反皿、近世陶器などが出土した。

**SD2**

調査区北側でＳＤ１に合流する溝で、幅約 60 ～ 100cm を測る。合流点付近で２本に分かれている。遺構検出面よりの深さ約 10cm 前後を測る。Ｎ 5°Ｅの方位をとる。断面形は浅い皿状で、埋土は暗茶褐色土である。狭い溝ながら多くの遺物が出土した。出土遺物には須恵器の坏（33 ～ 44）や壺、土師器がある。土師器の多くは細片で、表面が摩耗している。

**SD3**（第 51 図）

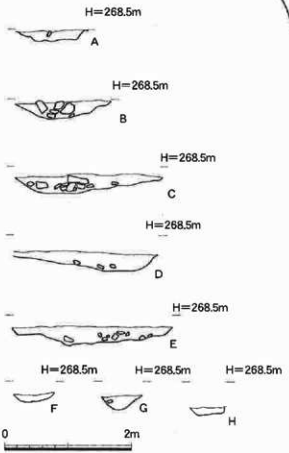
調査区中央付近から南側で、ＳＤ１に並行して検出した溝である。幅約 50 ～ 100cm を測る。遺構検出面よりの深さは約 10 ～ 30cm である。方位はＮ 29°Ｗをとる。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色土である。土師器坏・皿・甕（46 ～ 51）、須恵器坏（52 ～ 62）や壺など、多量の遺物が出土した。

iii）遺　　物（第 53・54 図）

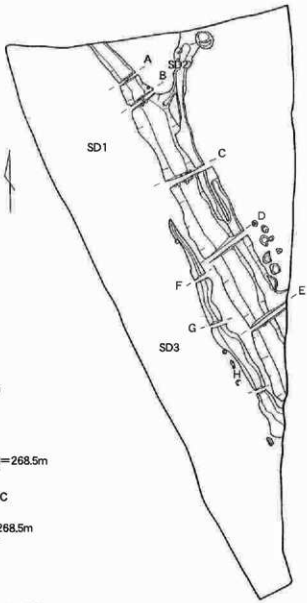
1. 土器類（第 53・54 図）

**SD1 出土品**

19 ～ 28 は須恵器の坏身である。このうち、19 ～ 21 は口縁部の破片で、19 は底部屈曲部から外に開いて立ち上がる短い体部をもつ。口径約 15cm を測り、ローリングを受けている。20 は口径約 15.4cm、21 は 16.9cm を測る。ともに口縁端部を強くナデている。22 ～ 28 は底部の断片である。22 は底径約 7.3cm を測り、断面逆台形の低い高台が底部と体部の屈曲部近くに付けられている。底部外面に回転ヘラ削り痕が残る。23 は底径約 8.3cm で、断面逆台形の低い高台が屈曲部の際に張り付けられている。屈曲部の内外に強いナデを施している。底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。24・25 は底径約 8.4・8.8cm で、断面半円形の低い高台が付く。26




第51図　T11SD1・SD3断面図




第52図　T11遺構図

は底径約 10.6cm を測る。断面台形の高い高台が直立した形で付けられている。27 は底径約 8.8cm で、断面台形の高い高台が外側へハの字型に開いて付く。28 は底径約 11.6cm で、断面方形の低い高台が付くもので、体部は少し張り出してから屈曲して外に開く。29 は須恵器壺の口縁部で、口径約 18.9cm を測る。口縁部は外反しながら外上方に開く。口縁端部を面取りし、わずかに上下につまみ出している。30・31 は灰釉陶器の底部である。ハの字型に開き、内側と底がくぼんだ張り付け高台をもつ。体部は丸く内湾しながら立ち上がる。おそらく器形は長首瓶であろう。体部外面はヘラ削り、内面はヘラ削り後、ナデ調整が施されている。32 は瀬戸美濃の端反皿である。口径約 12.5cm を測る。緑灰色の灰釉が施されている。

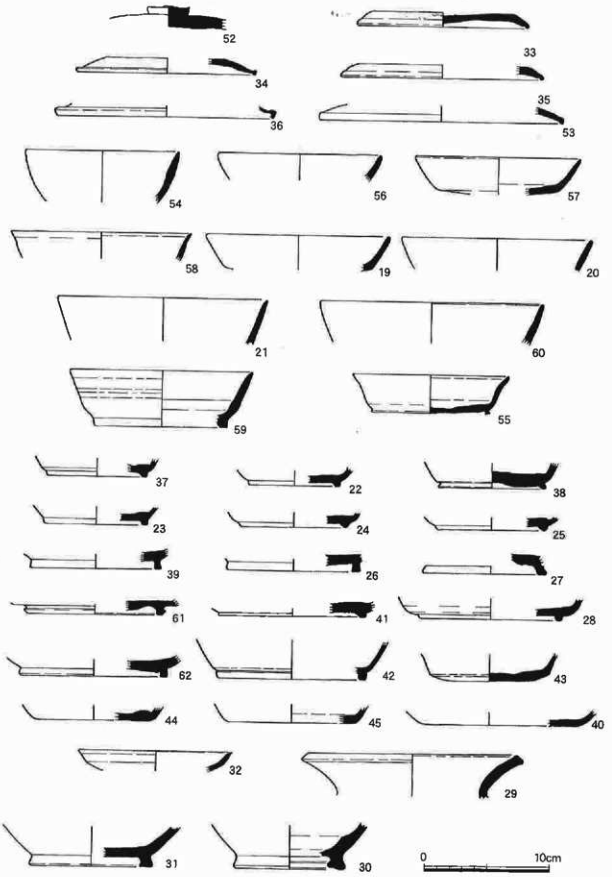
**SD2 出土品**

33 ～ 36 は須恵器の坏蓋である。33 はつまみ部が剥離している。口径約 13.8cm で低く平坦な器形をしている。天井部がやや窪みながらまっすぐ口縁部に至る。口縁部で屈曲して外に開いて下がる。端部は、断面三角形に垂下する。34 もつまみ部周辺を欠く。口径約 14.6cm を測る。天井部は低く平坦で、口縁部は外下方へのび、やや水平になったあと端部をわずかにつまみ出す。35・36 は口縁部の小片である。口径約 16.3・17.4cm を測る。35 は口縁部が下方に延びたあと、端部を下につまみ出している。36 は、端部をくの字型に折り返されている。37 ～ 44 は須恵器の坏身である。このうち 37 ～ 42 は高台を持つもので、42 以外はいずれも体部を欠く。37 は、底径約 7.9cm を測り、断面逆台形の低い高台が付く。体部は高台付近から屈曲して立ち上がる。38 は底径約 8.6cm で、外側へハの字型に開いた低い高台が付いている。底部がやや厚く凹凸が激しい。39 は底径約 10.4cm で、断面方形の高い高台が付いている。40 は底径約 11cm を測り、張り付け高台の痕跡が残る。42 は底径約 12cm を測る。断面方形の高台から、外に開いて立ち上がる体部をもつ。43・44 は無台の坏身で、43 は底径約 9.0cm を測る。丸い底部から体部がやや外反して立ち上がる。44・45 は底径約 9.2・10.3cm を測る。

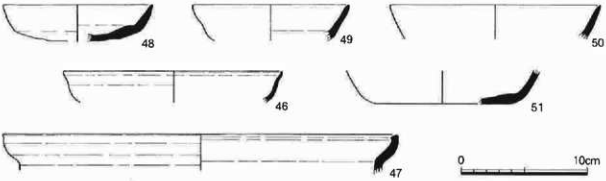
**SD3 出土品**

46 は土師器の皿である。口径約 17.6cm を測る。口縁端部をナデ調整により内湾気味につまみ出している。47 は土師器の甕である。口径約 31.7cm を測る。口縁部のみの破片で、わずかに内湾して、端部を面取りしている。48 ～ 51 は土師器の坏身である。いずれも須恵器を模倣した器形をもち、色調は白茶色を呈する。48 は口径約 12cm を測る。丸い底部から、体部が外に開いて立ち上がる。口縁端部は強くナデる。49 は口径約 12.6cm で底部から屈曲して立ち上がる体部をもつ。50・51 は、おそらく同一個体で、50 は口径約 16.8cm の口縁部、51 は底径約 11cm の底部である。

52・53 は須恵器の坏蓋である。52 はつまみ部および天井部の断片である。つまみはくびれのない扁平な形状をしており、中央がやや上部に張り出す。胎土は 1mm 大の小石を多く含み、濃茶灰色を呈する。53 は口縁部の断片で、口径約 19.8cm を測る。端部を丸く下方につまみ出している。54 ～ 62 は須恵器の坏身である。54 は口径約 12.4cm を測る体部断片である。口縁部先端に強いナデを施す。55 は口径約 12.8cm、器高約 3.2cm を測る。中央がやや外側に張り出す底部から、屈曲部を経て斜め上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。断面方形の小さな高台がやや開き気味に付いている。56 は口径約 13.3cm を測る口縁部である。57 は高台を持たないもので、口径は約 13.4cm、を測る。体部は外にまっすぐ開いて口縁端部を尖らせる。58 は




第53図　T11出土遺物実測図（1）




第54図　T11出土遺物実測図（2）

口径約 14.6cm を測る。口縁端部をナデによりやや外反させる。59 は、口径約 14.7cm、器高は約 4.5cm を測る。断面台形の大きめの高台から外に開いて立ち上がり、口縁部でわずかに外反させている。60 は口径約 18cm の大型の坏である。61・62 は坏身の底部で、底径は約 10.8cm・11.7cm を測る。61 の高台は、接地部で内外に折り返されている。

## 第7節　T12 の調査

ⅰ）層　　序

T12 は、T11 の北側に設定した調査区で、調査前の地表面の標高は約 270.20 ～ 271.59m を測る。調査前は 3 面の水田で、遺構検出面は上下 2 段になっている。遺構は、下段で掘立柱建物 3 棟、土坑、落ち込み状遺構（竪穴住居か）、ピットなどを検出している。上段では竪穴住居 1 棟、上坑を検出した。竪穴住居からは多量の遺物が出土した。約 10 ～ 20cm の耕土の下層は黒色土（20 ～ 60cm）、黄茶色土（遺構検出面）となる。地形は北側から南側に向けて低くなっている。下段では最大比高差約 120cm、上段では約 80cm を測る。

ⅱ）遺　　構（第 55 図）

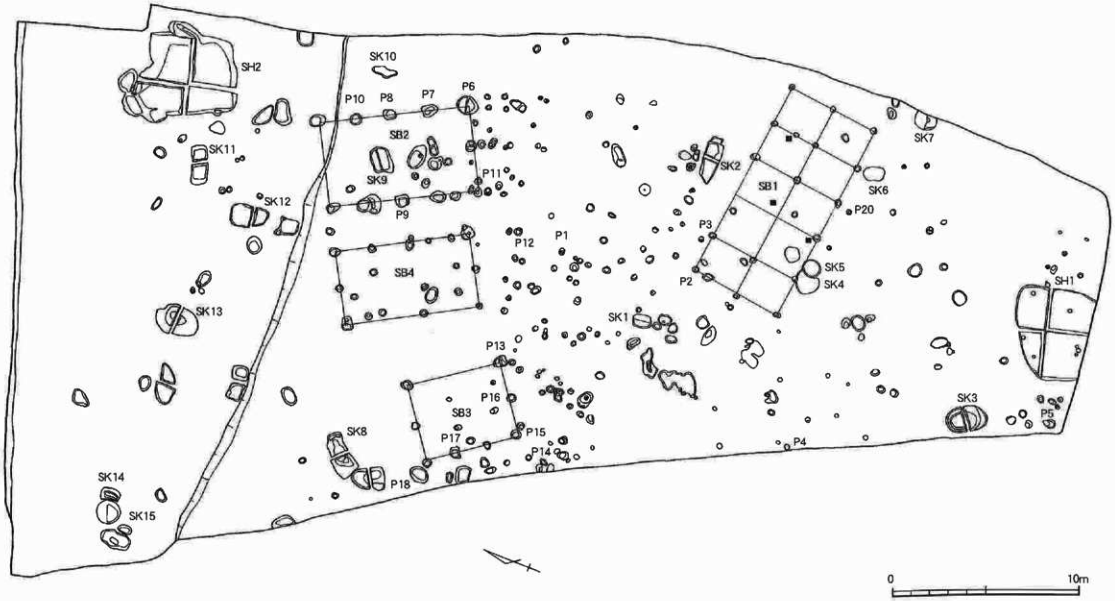
1. 掘立柱建物

SB1（第 56 図）

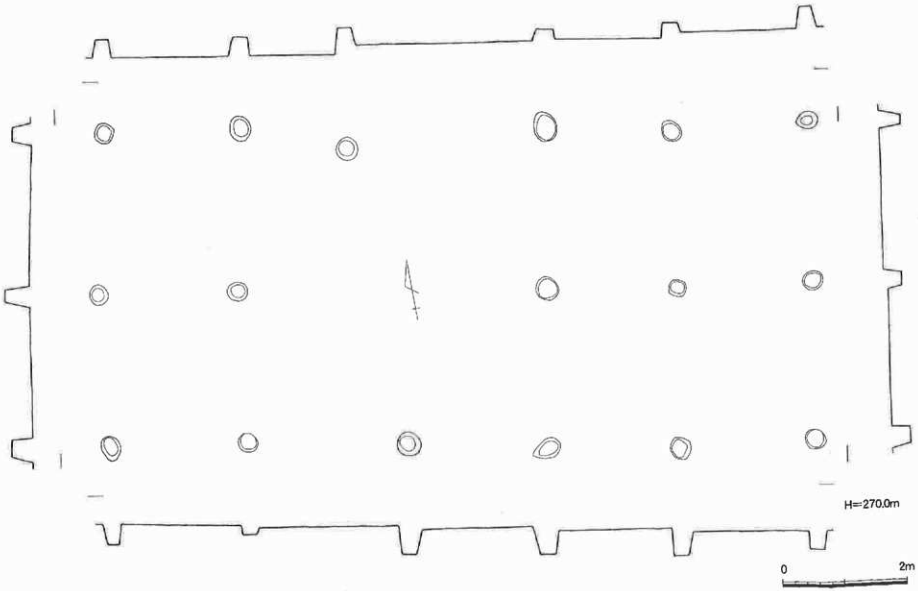
調査区の下段の中央やや南寄りで検出した 2 間（4.8 m）× 5 間（11 m）とおもわれる総柱の掘立柱建物である。建物の主軸はN 80° W の方位をとる。検出された柱穴は平面円形で、直径 25 ～ 45cm を測る。遺構検出面よりの深さは 15 ～ 45cm を測る。埋土は黒色土である。遺物は、柱穴を構成するＰ 2・Ｐ 3 より須恵器の壺片が出土した。

SB2（第 57 図）

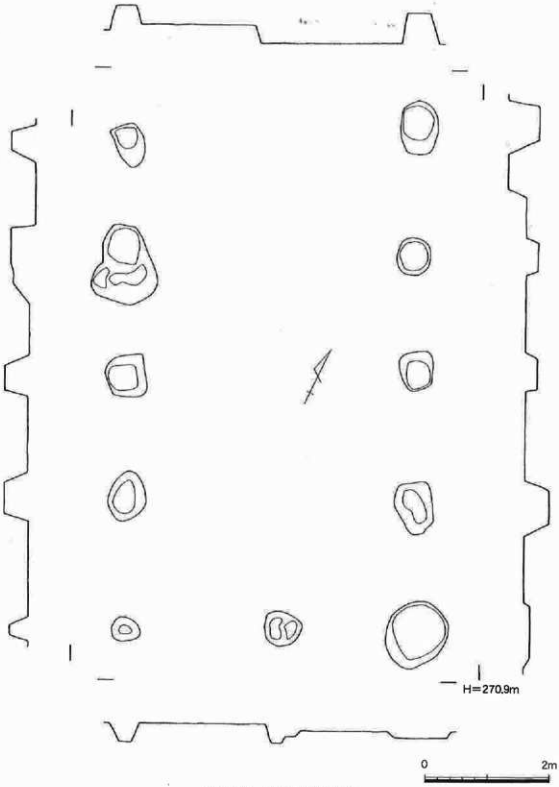
調査区の下段北側で検出した 2 間（4.5 m）× 4 間（8 m）の掘立柱建物で、建物の主軸はN 27° W の方位をとる。検出された柱穴堀方の平面プランは、長軸 80cm、短軸 60cm の隅丸方形と、長径 70 ～ 90cm、短径約 50cm の楕円形を呈する。遺構検出面よりの深さは 20 ～ 40cm を測る。柱痕は検出されなかった。埋土は黒色土で底部のみ黒灰色土である。遺物は、柱穴Ｐ 7 から土師器甕片、須恵器(63)、Ｐ 8 から土師器甕(65)、須恵器坏(66)など、P10 から土師器などが出土した。


SH2
SK10
P10
P8
P7
P6
SB2
SK11
SK9
P11
SK12
P9
SB4
SK13
P12
P1
SK2
SB1
SK6
SK7
P20
P3
SK5
SK4
P2
SH1
SK1
P13
P16
SB3
P17
P15
P14
SK8
P18
P4
SK3
P5
SK14
SK15
0
10m

第55図　T12遺構図



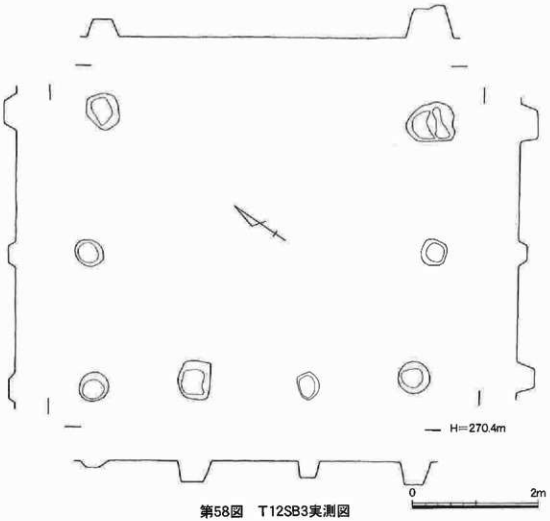

第56図　T12SB1実測図




第57図　T12SB2実測図

SB3（第58図）

調査区下段北西側で検出した2間(4 m)×3間(5 m)の掘立柱建物で、建物の主軸はN 36°Wの方位をとる。検出された柱穴は平面円形で、直径35～70cmを測る。遺構検出面よりの深さは10～30cmを測る。埋土は黒色土である。出土遺物には、土師器と須恵器の甕がある。




第58図　T12SB3実測図

2. 竪穴住居（第60・61図）

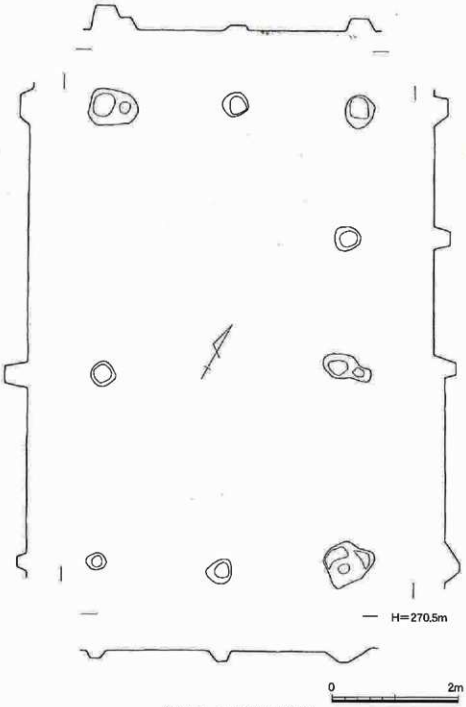
SH1（第60図）

調査区の南の端で検出した竪穴住居かと思われる落ち込み状の遺構である。平面形は隅丸台形を呈し、長径約500cmを測る。遺構検出面よりの深さは約20cmで、埋土は上から黒色土、茶色土である。10～20cm大のピットを6基検出した。

SH2（第61図）

調査区上段の東端で検出した竪穴住居である。平面形は隅丸方形で、東西・南北とも約450cmを測る。北および西側では長軸が約120cmと150cmの3つの楕円形土坑を切る形で検出した。遺構検出面よりの深さは北側で約45cm、南側では約25cmである。埋土は、上層が小石混じりの黒色土（20～25cm）、黄茶色砂混じりの黒色土（15cm前後）、黄茶色土（地山）で、山側で一部焼土が混じっていた。また、東側壁面で黄色粘土および焼土の堆積がみられ、かまどの痕跡と考えられる。さらに、ここから外へ北東方向に溝が延びており、煙道の役割を担っていたものであろう。煙道は最大幅70cm、深さ約26cmで、埋土は茶褐色土であった。

床面では柱穴となるようなピットは検出しなかった。また、床面の南東部で須恵器の坏片や土師器の壺片が集中して出土した。




第59図　T12SB4実測図

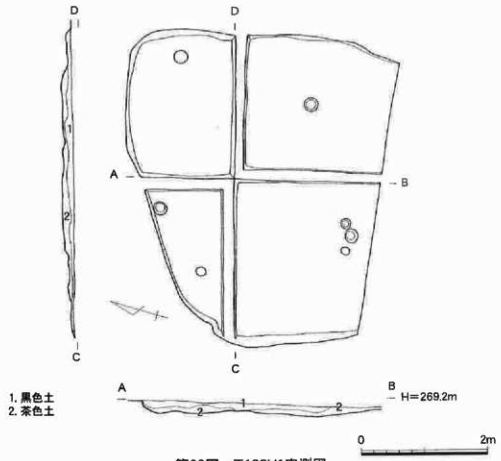
3. 土坑

**SK1**

調査区下段中央付近で検出した隅丸長方形の土坑で、ＳＢ１の西側に位置する。長辺 100cm、短辺 65cm、遺構面よりの深さは約 5cm を測る。埋土は上から粘質の黒色土、茶褐色土である。土師器片が出土した。

**SK2**（第 62 図）

SB1 の北で検出した土坑で長方形を呈する。長辺 220cm、短辺 90cm で、遺構検出面よりの深さ約 36cm を測る。埋土は上から黒色土、茶褐色土、黄褐色土である。遺物は出土していない。




第60図　T12SH1実測図

SK3（第62図）

調査区下段南西隅で検出した楕円形の土坑で、長径210cm、短径140cm、遺構検出面よりの深さ約22cmを測る。遺構内部は2段になっており、長径150cmの楕円形を呈する。埋土は上から黒褐色土、黒色土、薄茶色土で黄色土が混在する。遺物は出土していない。

SK4

ＳＢ１の南西端で検出した円形の土坑で、ＳＫ５に切られた形で検出した。直径約120cm、遺構検出面よりの深さ約13cmを測る。埋土は茶褐色土で、遺物は出土しなかった。

SK5

直径90cmの円形土坑で、遺構面よりの深さ約35cmを測る。埋土は上から黒色土、茶褐色土、黄色土で、中央付近に柱痕を検出した。遺物は出土しなかった。

SK6

ＳＢ１の南側で検出した楕円形の土坑で、長径110cm、短径80cm、遺構検出面よりの深さ約15cmを測る。埋土は上から粘質黒色土、砂質黒色土である。これは、ＳＫ７とも共通する。遺物は出土しなかった。

SK7（第62図）

調査区下段の東側壁面で検出した隅丸方形の土坑で、一辺約110cm、遺構検出面よりの深さ

約 50cm を測る。埋土で上層 30cm 大の石を検出した。遺物は出土しなかった。

SK8

調査区下段北西端で検出した隅丸方形の土坑で、長辺約 240cm、短辺約 100cm、遺構検出面よりの深さ約 36cm を測る。埋土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

SK9

ＳＢ２の中央で検出した土坑で、一辺 120cm の隅丸方形を呈する。遺構検出面よりの深さ約 10cm で、埋土は上から黒色土、茶色土である。

SK10

ＳＢ２の東側で検出した不正形の落ち込み状遺構である。遺構検出面よりの深さ約 10cm を測る。土師器片が出土している。

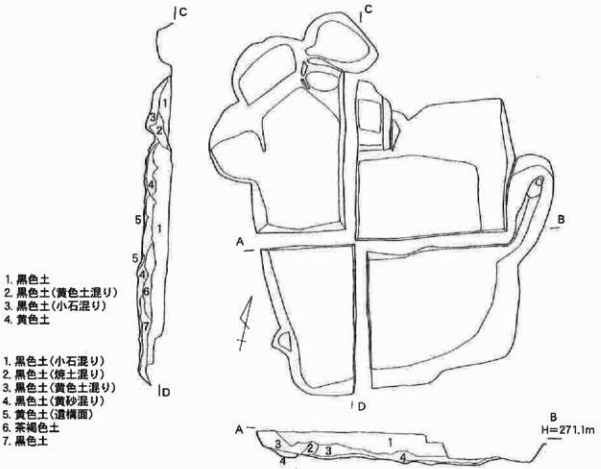
**その他の土坑**

調査区下段にはＳＫ 11 ～ 15 などの土坑が点在している。平面形は隅丸方形・楕円形・円形を呈す。遺構検出面よりの深さは 30 ～ 60cm で、埋土は上から黒色土、黄色土である。土師器および須恵器の小片がわずかに出土した。

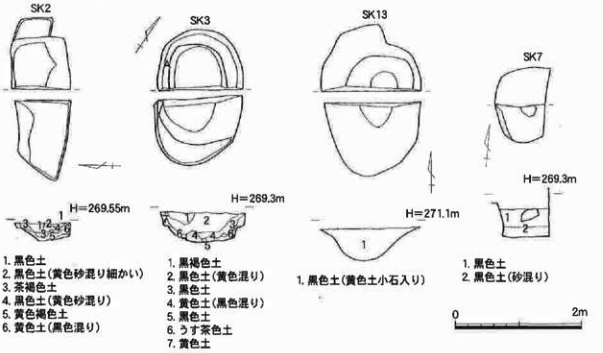
4. その他の遺構

**ピット群**

ピット群は、調査区下段の中央付近から北側を中心に、掘立柱建物ＳＢ１～３周辺で多く検出した。Ｐ１は直径約 35cm、深さは遺構検出面より約 23cm を測る。埋土は黒色土で、土師器小片が出土している。Ｐ４は直径約 25cm、遺構面よりの深さ約 12cm を測る。埋土は茶褐色で、須恵器壺片が出土した。Ｐ５は調査区下段南西端で検出したピットで、長径約 60cm、幅約 40cm、深さ約 30cm を測る。埋土は黒色土で、土師器甕および須恵器坏身の小片が出土した。Ｐ６はＳＢ２の南で検出した。直径約 80cm、深さ約 15cm を測る。埋土は黒色土である。土師器甕片が数点出土した。Ｐ 11・Ｐ 12 はＳＢ２の南側で検出した。直径約 40cm、遺構面よりの深さはともに約 25cm を測る。埋土は黒色土である。土師器片（101）が出土している。Ｐ 16・Ｐ 18 はＳＢ３の近くで検出したもので、Ｐ 16 は長径約 40cm、Ｐ 18 は約 100cm の楕円形を呈する。Ｐ 16 からは土師器甕の小片が出土した。Ｐ 18 の出土品には、土師器皿（102）と坏（103）がある。Ｐ 20 は、ＳＢ１の南側で検出したピットで、直径約 20cm、深さは遺構面より約 20cm を測る。埋土は黒色土である。出土品には滑石（112）がある。




第61図　T12 SH2 実測図




第62図　T12 土坑実測図

i）遺　　物（第63～66図）

1. 土器類（第64～66図）

**SB2 出土品**

63は須恵器の坏蓋である。口縁部の破片で口径約15.3cmを測る。口縁部は外下方にのび、端部を下へ屈曲させる。外面には濃い緑色の釉が付着している。P7から出土した。64は土師器の碗である。口径約19cmで、口縁端部を屈曲させる。内外面とも丁寧にナデ調整を施す。65は土師器の甕である。小型の甕で口径約16.3cmを測る。丸い体部から口縁部がやや外反しながら立ち上がり、端部はナデ調整によりわずかに内湾させる。器壁は薄く内外とも指痕が残る。調整は体部外面に粗い縦位のハケのあと、ナデ調整を施す。内面はナデでわずかに粘土紐の痕跡が残る。口縁部外面は指押さえ後ナデ調整、内面は粗い横ハケを施す。66は須恵器坏身の底部で、高台径約12.8cmを測る。高台は高くわずかに外に開く。64～66はP8から出土した。

**SH2 出土品**

67～85は上師器の甕である。いずれもくの字状にくびれる頸部を持つ。67は口径約10.4cmの小型の甕で、口縁端部はナデにより尖らせる。外面は摩耗がはげしく調整は明らかでないが、頸部には連続して指押えを施している。体部内面は斜め方向のハケを施す。68は口径約15.4cmを測る。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、先端をナデにより尖らせる。口縁部は内外面ともにナデ調整、体部外面は縦位に近い斜めハケのあと一部ナデを施し、内面は横位に近い斜めハケ調整をしている。69は口径約16.3cmを測る。口縁部はまっすぐ外に開き、端部を丸くおさめる。口縁外部はナデ、内部は横ハケのあとナデを施し、体部外面は斜め方向のナデ、内面は横ハケ後ナデ調整を施す。70は口径約17.6cm、まっすぐ開く口縁を持つ。ナデ調整を施す。

71～85は、すべて内湾して立ち上がる口縁部をもつ。71は口縁部の破片で、口径約19.2cmを測る。端部は丸くおさめる。72はあまり胴部の張らない形態で、口縁端部をわずかに面取りする。口径約21.9cmを測る。口縁外面は横ナデ、内面は横位ハケ後にナデ調整を施す。体部は内外面ともに斜め方向のナデを施す。体部内面にススが付着する。73も同様の調整を施しており同一個体であろう。74は口径約23.2cmを測る。口縁端部を面取りする。体部外面に斜め方向のハケを施す。75は胴部の張らない形態で、口縁端部は内と外からのナデにより明瞭に面取りしている。口縁部は横ナデ調整、体部外面は斜め方向のナデを施す。76は口縁部で口径約25cmを測る。口縁端部を面取りする。77は端部を丸くおさめ、全体に摩耗がはげしく、体部内面に縦位のハケを施す。口径約25.2cmを測る。78は張りのほとんどない胴部を持つ。口縁端部は面取りし、口径は約25.6cmを測る。体部外面は摩耗がはげしく、内面は斜め方向のナデ、口縁内面は横ハケのあとナデる。79は口径約26.1cm、口縁端部は内と外からのナデにより明瞭に面取りされる。胴部はほとんど張りを持たない。体部内外面ともに斜め方向のハケ調整を施す。80は口径約27.2cmで、口縁端部を丸くおさめる。体部は内外面とも斜め方向のハケで調整し、指頭圧痕が残る。口縁部内面は斜めハケのあとナデを施す。81は口径約27.3cmで、ほとんど張りを持たない体部を持つ。摩耗がはげしく調整は確認できない。82は口径約28.1cmを測る。大きく内湾する口縁部で、端部は明瞭な面を持ち、内面はわずかにつまみ出す。口

縁部は横ハケのあとナデ、体部は斜め方向のハケを施す。83は胴部の張らない形態で口径約28.4cmを測る。口縁端部を面取りし、内側をわずかにつまみ出す。体部内面は縦位ハケのあとナデを施す。84も胴部がほとんど張らない形態をしている。口径約28.7cmを測る。摩耗がはげしく調整は確認できない。85は口径約30.8cm、口縁端部を面取りし、この面に2本の沈線がまわる。調整は体部が横ハケのあと縦ハケ、口縁部外面はナデ、内面は横ハケのあとナデ調整を施す。86は土師器の坏で、口径約13cmを測る。器形は須恵器を模倣している。

87・88は須恵器の碗である。87は口径約13.5cm、内湾して立ち上がる口縁部で、端部を肥厚させる。88は口径約14.9cm、内湾して丸い体部を持ち、端部を丸くおさめる。全体に丁寧なロクロによるナデを施す。89～91は須恵器の坏蓋である。89はつまみ部のみの破片で径約2.5cmを測る。90・91は天井部を欠く。90は口径約16.2cm、まっすぐ外に開き端部を丸く下方につまみ出している。外面に濃い緑色の自然釉が付着する。91は口径約17cmを測る。体部が外下方に開き、端部は断面三角形に垂下する。外面はロクロケズリのあとナデを施す。92～100は須恵器の坏身である。92～95は高台の付かないもので、92は底径約7.2cmを測る。焼成があまく薄茶灰色を呈す。全体にロクロナデを施す。93は底径約8cmで、摩耗がはげしいが、底部外面はロクロケズリのあとナデを施す。94は高さ約3cm、口径約12.3cm、底径約8.4cmを測る。体部は屈曲部を経て斜め上方にまっすぐ立ち上がる。焼成はややあまく薄茶色を呈する。調整は、体部および底部内面はロクロナデ、底部外面はヘラ削り痕が残る。95は高さ約3.9cm、口径約14cm、底径約8cmを測る。やや丸みを帯びた底部から、斜め上方にまっすぐ開く体部を持つ。焼成がややあまく薄茶灰色を呈す。92と同一個体か。96は口径約9.8cmの小型の坏身で底部を欠く。体部はまっすぐ立ち上がる。97は口径約11.4cmで、口縁端部でやや外反する。98は口径約12.3cm、口縁端部でわずかに外反する。99は、高さ約3.3cm、口径約13.5cm、底径約10.6cmを測る。低い高台を貼り付け、体部は外に開いてまっすぐ立ち上がる。ロクロナデ調整を施し、底部はケズリのあとナデる。100は高さ約4.4cm、口径約13.8cm、底径約9.6cmを測る。低い高台が貼り付く。

**P12 出土品**

101は土師器の坏身で、底径約8.5cmを測る。全体に摩耗がはげしい。

**P18 出土品**

102は土師皿で、口径約7.7cmを測る。103は口径約13.1cmで体部が外に開いて立ち上がり、口縁部先端を丸くおさめる。

**包含層出土品**

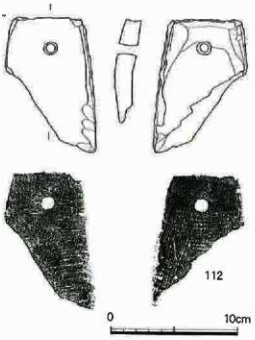
104は土師器の坏身底部である。底径約11.5cmを測る。全体に摩耗している。105は甑の把手である。断面楕円形の棒状を呈している。全体に摩耗しているが、外面は縦ハケ、内面にはわずかに横ハケが認められる。106は須恵器盤の脚部である。断面円形の棒状を呈する。107・108は土師器の甕である。口径約13.4cmを測る。張りの少ない胴部を持ち、口縁部は外に開いて立ち上がり先端でわずかに内湾する。口縁部の調整は横ナデ、体部外面は斜め方向の細かいハケ、内面はハケののちナデ調整を施す。108は口径約17.3cm、口縁部は頸部で大きく屈曲したあと立ち上がる。口縁部は横ナデ、体部は斜めハケを施す。109・110は須恵器坏の高台部

で、109は高台径約11.8cmを測る。110は高台径約13cmで細く高い高台が付く。ここから少し張り出して屈曲する。111は山茶碗である。高台径約7cmで、幅の広い低い高台を貼り付けている。底部には明瞭に糸切り痕が残る。底部内面には濃い緑色の釉がかかる。

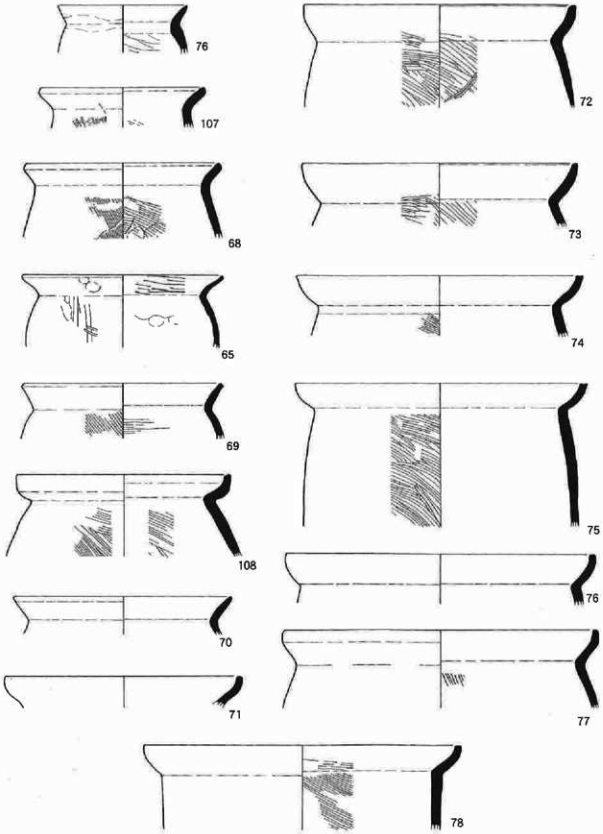
2. 石製品（第63図）

**P20 出土品**

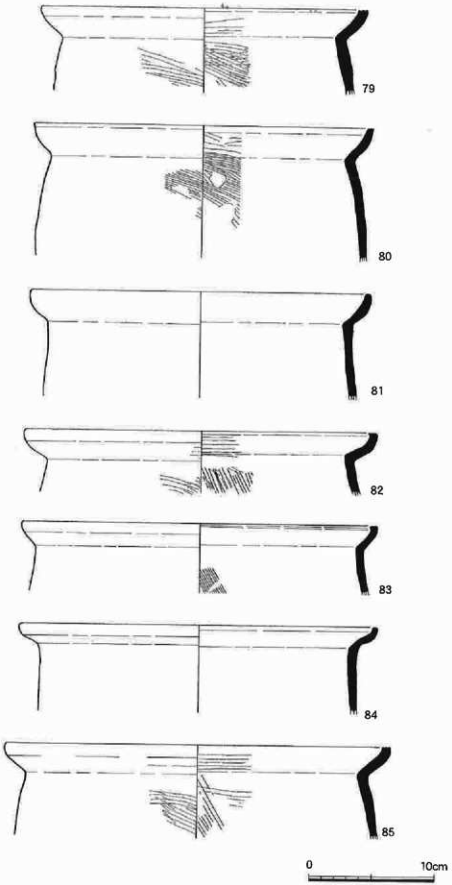
112は滑石製の温石である。上端に直径約1cmの小孔を穿つ。体部はゆるやかな曲面を持つ。表面には横方向のケズリ痕と縦位の細かいミガキ痕が残る。



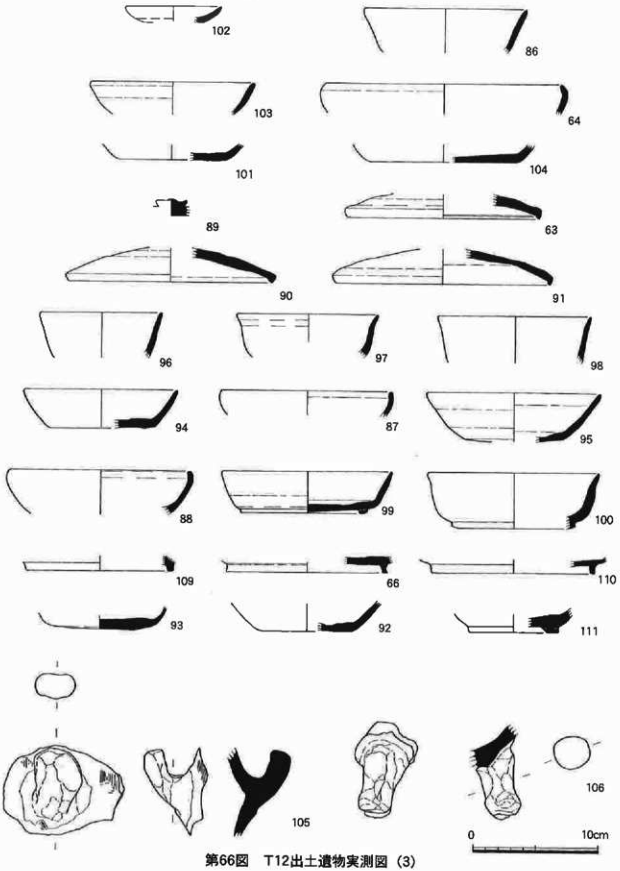

第63図　温石実測図




第64図　T12出土遺物実測図（1）




第65図　T12出土遺物実測図（2）




第66図　T12出土遺物実測図（3）

# 第4章　まとめ

今回の寺林遺跡の調査では、同じ遺跡内で隣接して滋賀県教育委員会が調査をしており、既に調査報告書（『寺林遺跡』2000.3）が刊行されている。報告では、調査区北端では、15～16世紀の上平寺館に伴う時期の遺構が検出されており。これより南では、方形の堀方をもつ掘立柱建物を主体とする遺構が検出され、出土遺物から概ね奈良時代後半から平安時代前半代のものと推定されている。

今回の調査区は、県教育委員会の調査区と混在するＴ１～４と、県教育委員会調査区から南へ展開するＴ５～10、北へ延びるＴ11・12に分けることができる。このうちＴ５～10については、遺構面を構成する黄茶色土を確認したものの、わずかなピットのほかに明瞭な遺構を検出しなかったことから、遺跡はここまで広がらないものと考えられる。

さて、今回検出した主な遺構は以下の通りである。

Ｔ１　ＳＤ１、Ｐ１～３

Ｔ２　ＳＤ１～３、ＳＸ１、ピット群

Ｔ３　ＳＢ１（2間×3間）、ＳＢ２（1間以上×3間以上）、ＳＫ１・２

Ｔ11　ＳＤ１～３

Ｔ12　ＳＢ１（2間×5間）、ＳＢ２（2間×3間）、ＳＢ３（2間×3間）、ＳＢ４（2間×3間）、ＳＨ１・２、ＳＫ１～10、ピット群

県教育委員会の調査区にはさまれたＴ３では、方形の掘方をもつ掘立柱建物ＳＢ１・２を検出した。これらの主軸の方位はＮ30°Ｗ、Ｎ24°Ｗで、県教育委員会調査で検出された奈良時代後半から平安時代前半期の掘立柱建の方位とほぼ一致する。また、北端の調査区Ｔ12で検出したＳＢ２・３・４も、方形または楕円形の堀方をもち、主軸の方位がＮ27°Ｗ、Ｎ36°Ｗ、Ｎ28°Ｗを指すことから、当該時期の集落がここまで広がっていたことが指摘できる。さらに、Ｔ12では竪穴住居跡を検出した。当初、掘立柱建物を主体とした集落と捉えられてきた当遺跡で、竪穴住居が混在していたことが確認できた。Ｔ11で検出した溝ＳＤ１～３とＴ１のＳＤ１は一連のもので、藤古川の谷へ流れ込む。Ｔ11の溝では当該時期の多量の土師器・須恵器を検出している。

また、出土遺物の中には、Ｔ３で出土したような暗文をもつ土器や、金属器の「さはり」を模倣した須恵器など、一般の集落ではあまりみられない遺物が含まれている点が注目される。

Ｔ12で検出したＳＢ１とＳＢ３は、直径25～45cmの平面円形の柱穴をもつものである。このトレンチに比較的近い位置にある県教育委員会の調査区Ｔ１・２では、同様の柱穴をもつ建物遺構が検出されており、15～16世紀の上平寺館に関連する施設の存在が指摘された。今回の調査では、柱穴内から奈良時代後半から平安時代前半代の須恵器や土師器が検出されていることから若干の疑問点は残るものの、周辺からは中世に属すと思われる温石や、わずかに当該時期の遺物も検出しており、調査区北端で旧道北国脇往還にも近いことから、中世の遺構である可能性は否定できない。

『寺林遺跡』では、藤古川の扇状地上で、古代耕作地には適さなかったであろうこの地におい

て、集落が営まれた要因を解く鍵に「交通の要衝」であることをあげている。ここでは、少し古代交通路との関係にふれてまとめにかえたい。

伊吹町内で、奈良時代後半から平安時代前半代の遺物を検出した遺跡には高番遺跡がある。しかし、溝状遺構への二次堆積による出土で遺跡の詳細は不明である。寺林遺跡の調査が、この時期の集落跡の調査としては町内ではじめての例となった。

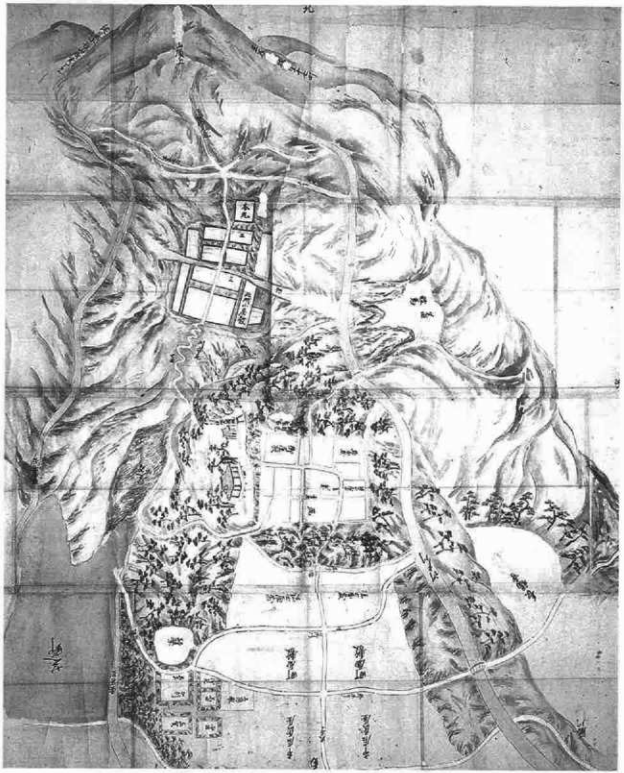
寺林遺跡から、直線距離で約4㎞南東に古代の「不破関跡」（岐阜県関ヶ原町）がある。愛発関・鈴鹿関とともに律令制下で国家的に最も重要視された「三関」のひとつである。不破関の創設時期については、文献史料によれば白鳳元年（672）または白鳳二年である。しかし、史料的には信憑性などに問題があり、その成立は壬申の乱（672）を一つの契機に関が設置されたとする説がとられている。昭和49年から昭和52年まで都合五次にわたっておこなわれた発掘調査では、関域が想定され、建物跡の存在が確認されている。検出された遺構や遺物から、外郭上塁の築造が八世紀中葉頃であり、内郭から出土する軒瓦は平城宮所用瓦など国の支援を示すもので、その時期は八世紀中葉を過ぎた頃である。ただし、七世紀末から八世紀初頭の軒丸瓦が存在することから、国の整備に先立って、瓦葺き建物が存在していたことが指摘されている。また、ここから北に抜けるルート上に「小関」の存在が指摘されている。東山道の関とともに北陸へのルートの防衛は、重要な課題であり、寺林遺跡はその経路上に位置しているものと考えられる。

さて、町内にのこる興味深い伝承を二つ紹介したい。姉川最上流部にある曲谷集落の起し又で、壬申の乱に敗れた中臣連金の一隊が立て籠もったというものである。近江朝の右大臣中臣連金は浅井町の田根で斬られている。中臣連金の一隊は北に逃れる途中、大海人側に捕らえられたとも考えられる。壬申の乱の際には、不破を中心に伊吹山南麓に大軍が駐留したと考えられており、ここから山麓を回って越に向かった部隊もある。

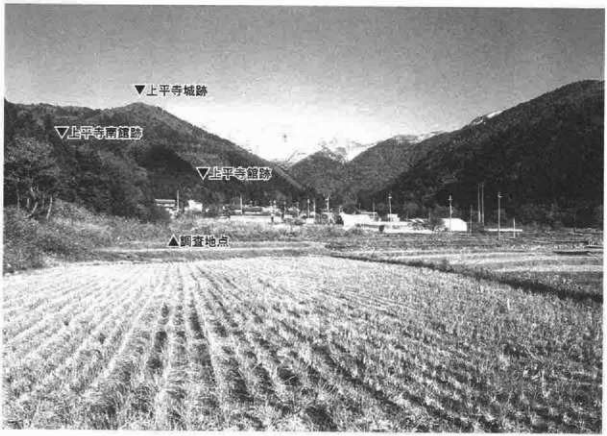
また、寺林の西に位置する大清水には環境庁全国名水百選で有名な泉神社湧水がある。泉神社の由緒を記した「神饌弊帛料供進指定に関する伺書」（村社泉神社氏子中：明治初年）には、「皇統三八代天智天皇ノ御宇近江国ニ武ヲ講ゼシメ給ヒシ時平野（寺林と大清水の間の原野を指す）等ノ平原地ヲ以テ軍馬操練ノ地トシテ多クノ牧士ヲ置キ給シ」という記述がある。寺林を含む伊吹山麓が、古代軍事上の重要地として捉えられていたことをうかがわせる伝承である。

上記のような事項が、奈良時代後半から平安時代前半に寺林遺跡が成立した要因のひとつだと考えることができないだろうか。今後、周辺地域の調査結果によって、遺跡の性格がより明確になることを期待したい。

# 図　　版



上平寺城絵図（伊吹町役場所蔵）

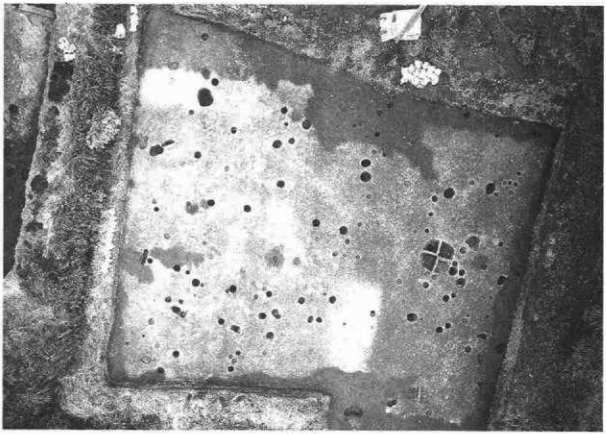



上平寺遺跡群遠望

調査前風景（北から）

調査区遠景（南から）

調査区遠景（北から）

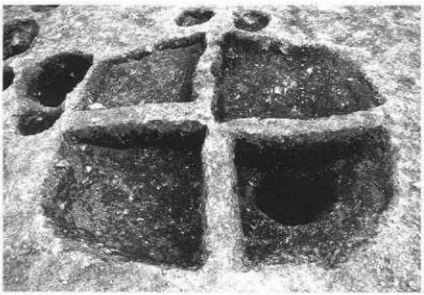


T2 全景

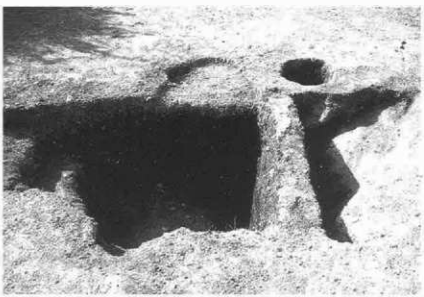
T2 全景（東から）

図版五　上平寺遺跡

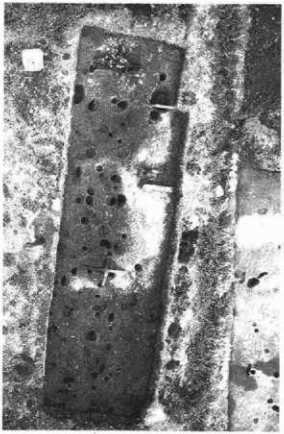
作業風景



T2SK1



T2SK2



T3 全景

T3 全景（西から）

図版七　上平寺遺跡

T3SK1

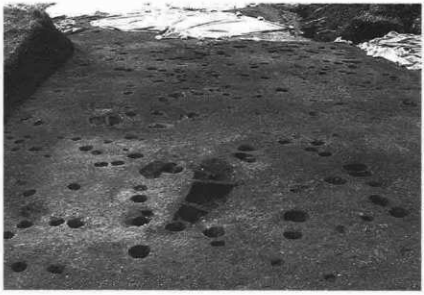
T3SK2

T3SK3

T4 全景

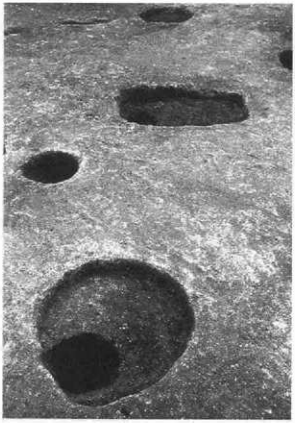
T4 全景（北から）

T4 調査区西側
（南から）



T4SB1

T4SB2



T4SB6 柱穴

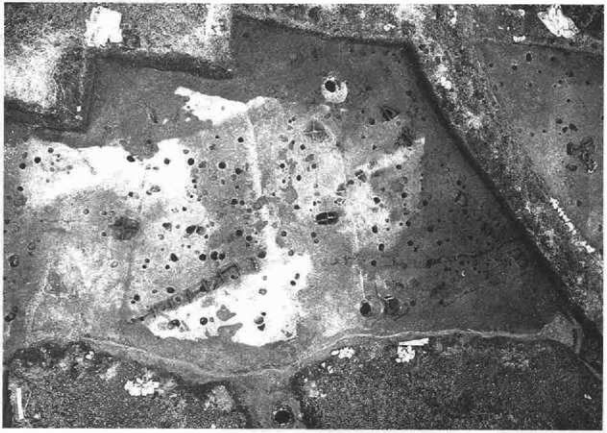
T4SD1

図版一一　上平寺遺跡

T4SK1

T4SE1

T4SK2



T5 全景（西側はうめもどし）

T5 調査区東側（北から）

T5 調査区西側

T5SB1

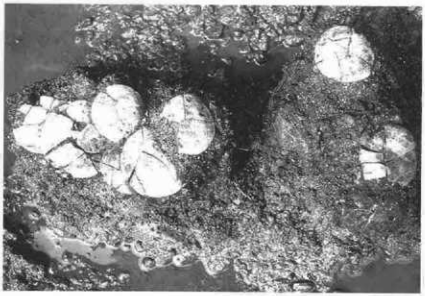
T5SB2

T5SD1
遺物出土状況

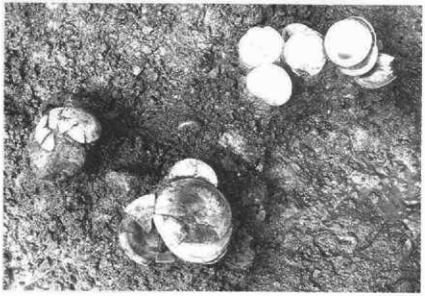
T5SD1
（南から）

T5SD2
（南から）

T5SD1
土器集積遺構
(C)



T5SD1
土器集積遺構
(D)



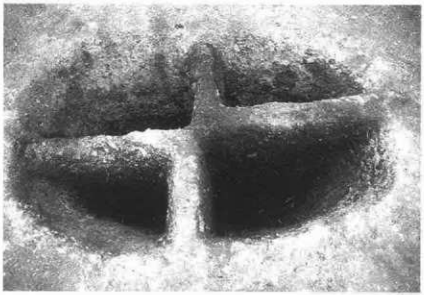
T5SD1
土器集積遺構
(E・F)

T5SE1

T5SE2
検出状況

T5SE3

SE3
漆器椀出土状況



T5SK1

T5SK6

T7 全景

T7 作業風景

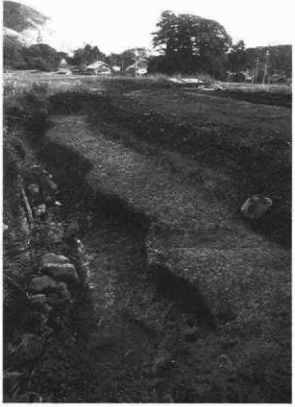
図版一九　上平寺遺跡

T7SB1

T7SE1

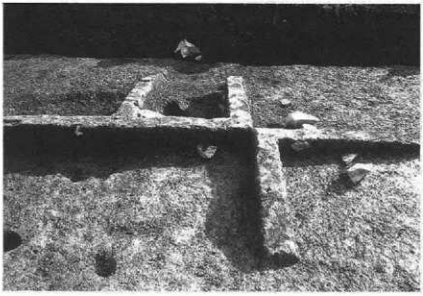
T7SE1
作業風景

図版一〇　上平寺遺跡



T7ST1

T7SK2

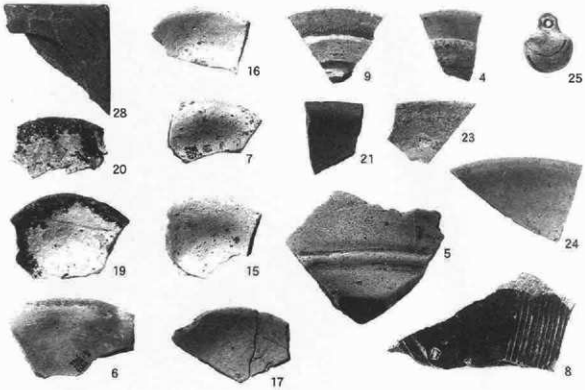


T7 焼土

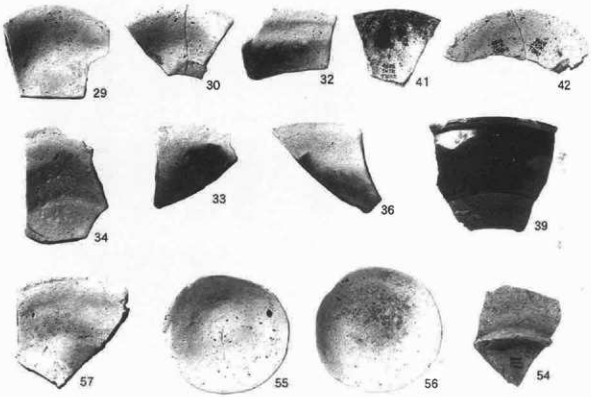
T8 全景
（北から）

測量作業風景

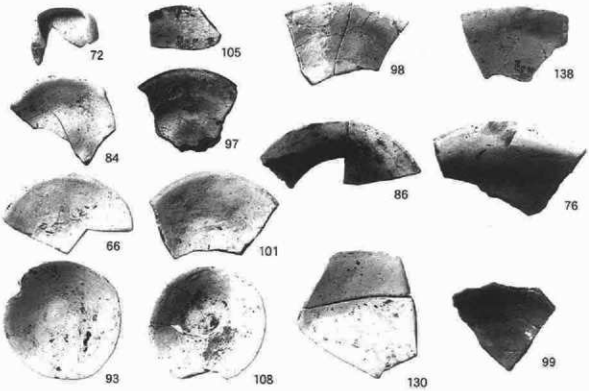
現地説明会風景



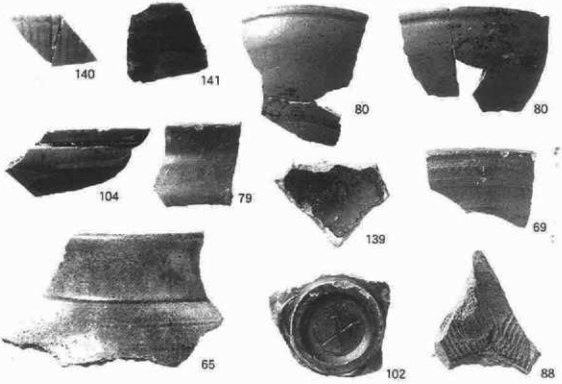

T2 出土遺物



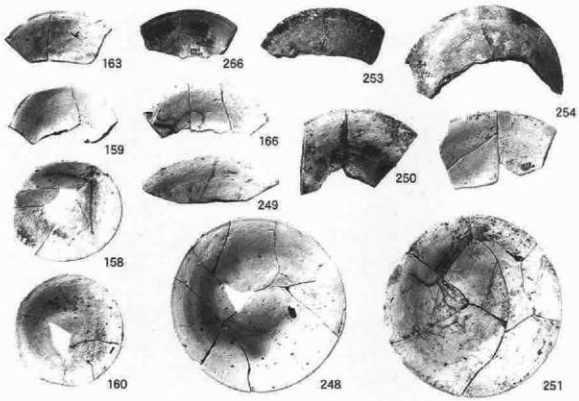

T3 出土遺物



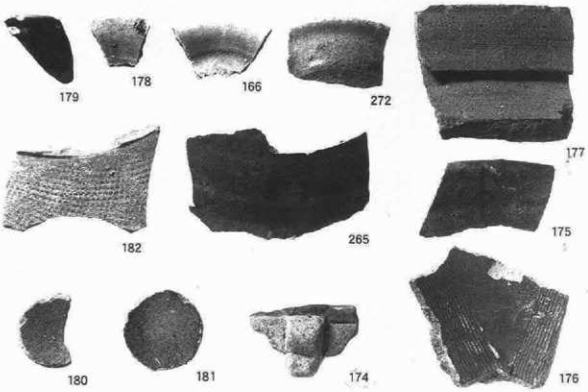

T4 出土遺物（1）



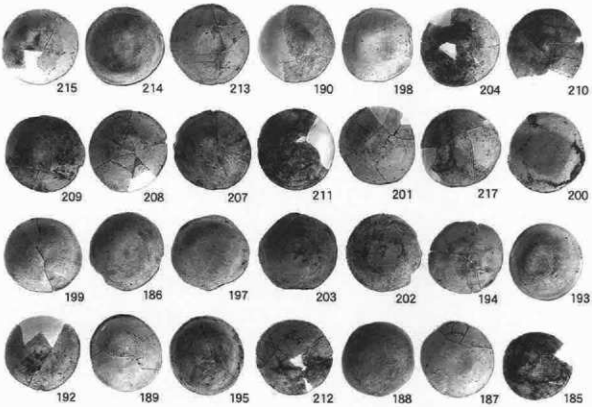

T4 出土遺物（2）



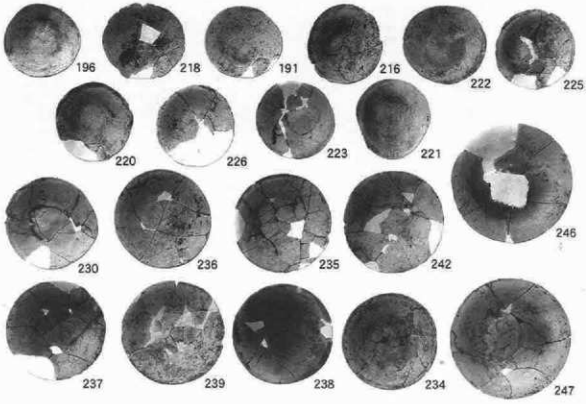

T5 出土遺物（1）



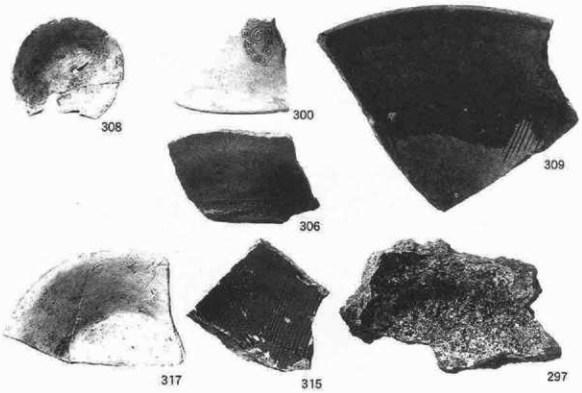

T5 出土遺物（2）




T5SD1 一括遺物（1）

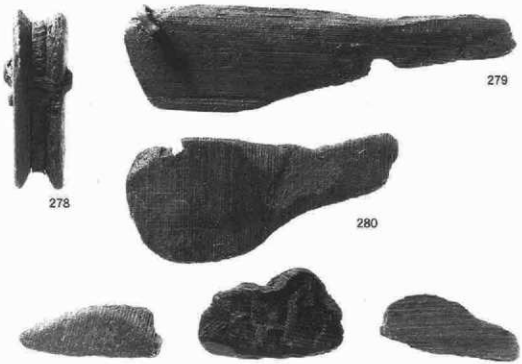



T5SD1 一括遺物（2）

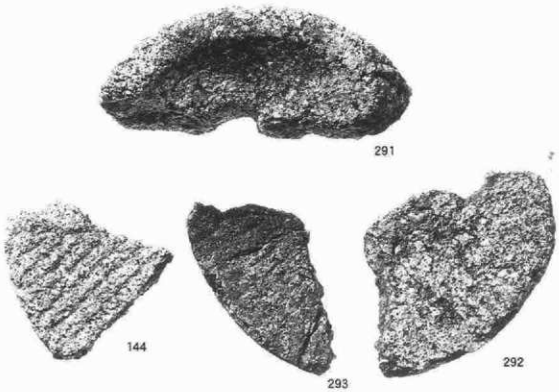



T7・8 出土遺物

金属製品




木製品




石　臼

調査前風景

作業風景

作業風景

T1 全景

T1P1

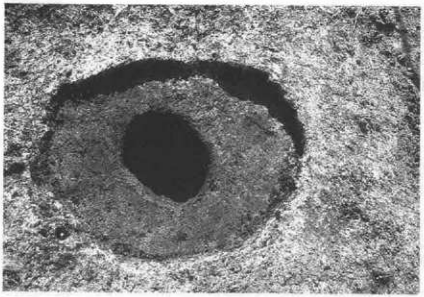
T2 全景

T2SX1

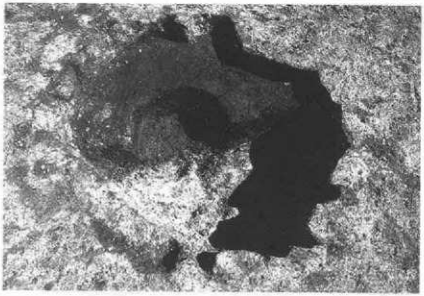
T3 全景

T3SB1

T3SB2



T3SB1 柱穴



T3SB1 柱穴

T3SK1

T4 全景

T5 全景

T11SD1
（南から）

T11 全景

作業風景

T12 全景

T12 上段

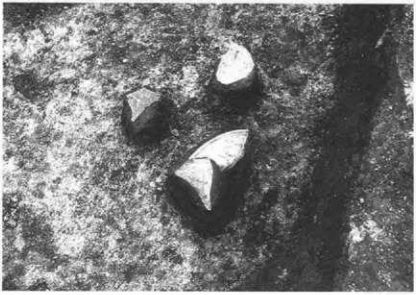
T12 下段

T12SB1

T12SB2

T12SH1

T12SH2



SH2 遺物出土状況

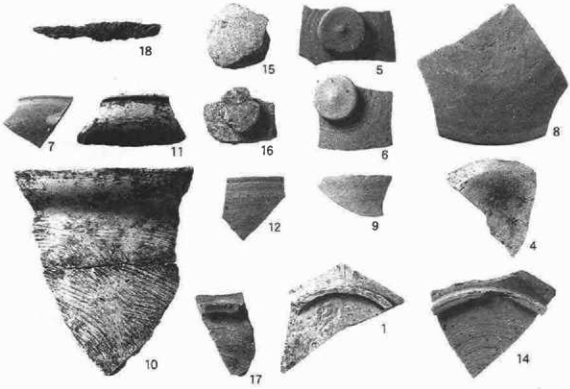
SH2 遺物出土状況

図版三七　寺林遺跡

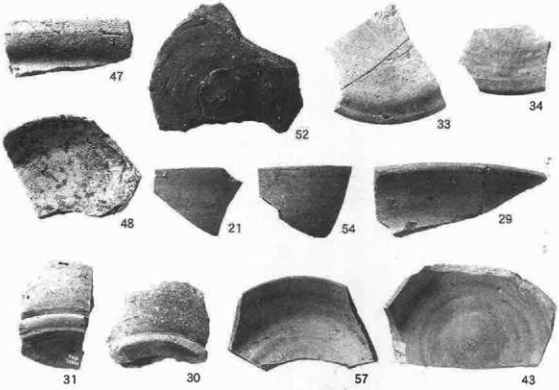
SH2 作業風景

T12SK3

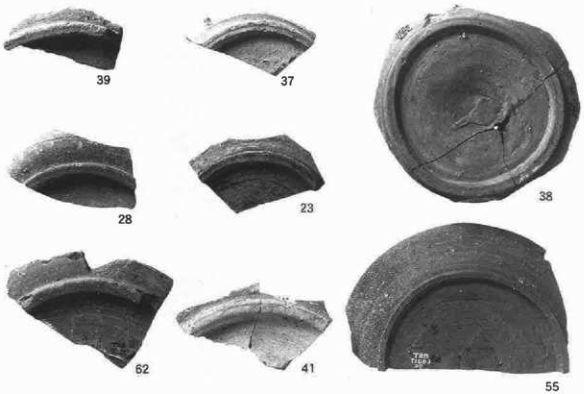
発掘体験



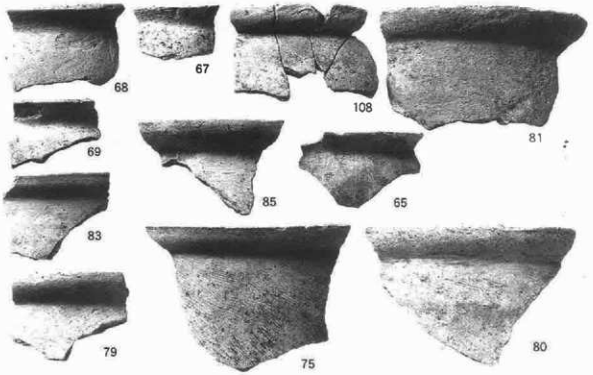

T1・T3　出土遺物



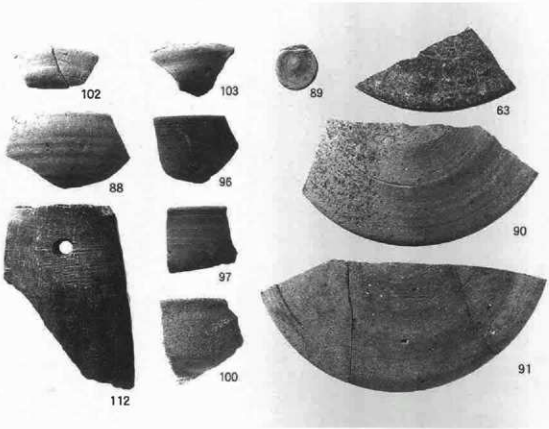

T11　出土遺物（1）



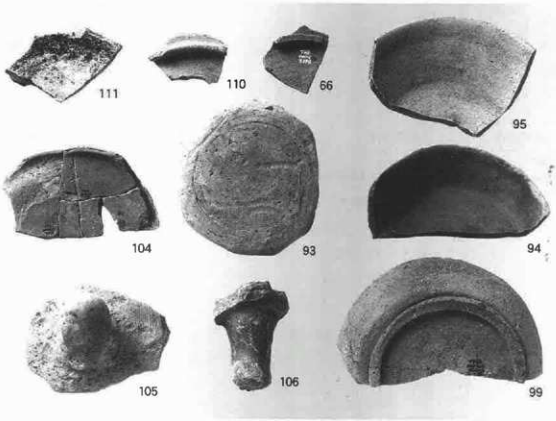

T11　出土遺物（2）




T12　出土遺物（1）




T12　出土遺物（2）




T12　出土遺物（3）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | じょうへいじいせき・てらばやしいせき |
| 書名 | 上平寺遺跡・寺林遺跡 |
| シリーズ名 | 伊吹町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第14集 |
| 編著者名 | 髙橋　順之 |
| 編集機関 | 伊吹町教育委員会 |
| 所在地 | 滋賀県坂田郡伊吹町春照37番地 |
| 発行年月日 | 平成13年3月 |

| 所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡No. | 北緯 | 東経 | 調査面積 | 調査期間 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上平寺遺跡 | 坂田郡<br>伊吹町<br>大字上平寺<br>字高殿<br>大字藤川<br>字上平 | 25469 | 462-043 | 35°22′55″ | 136°25′10″ | 3,200 ㎡ | 980528<br>～1222<br>990310<br>～0722<br>000703<br>～0728 | 町道改良工事 |
| 寺林遺跡 | 坂田郡<br>伊吹町<br>大字藤川<br>字寺林 | 25469 | 462-066 | 35°22′40″ | 136°25′15″ | 2,860 ㎡ | 980204<br>～0514<br>991209<br>～0328<br>000406<br>～0607 | 町道改良工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 上平寺遺跡 | 城下町 | 戦国時代 | 掘立柱建物<br>井戸<br>土坑、溝 | 土師皿・瓦質土器<br>常滑焼・瀬戸美濃焼<br>青磁・白磁・山茶碗<br>漆器・釘・古銭・<br>砥石・石臼 | |
| 寺林遺跡 | 集落 | 奈良時代<br>平安時代 | 掘立柱建物<br>竪穴住居<br>土坑、溝 | 須恵器・土師器<br>刀子・温石 | |

伊吹町文化財調査報告書第14集

# 上平寺遺跡・寺林遺跡

2001年3月

編集・発行　伊吹町教育委員会
滋賀県坂田郡伊吹町春照37番地
TEL 0749-58-1121

印刷・製本　（資）垂井日之出印刷所